

日本写真家協会会報

NO.183
(2025. Mar.)

- 焦点 「阪神・淡路大震災」から30年 写真と災害報道をふりかえって
- 新・声のライブラリー 写真家・木村恵一さん
- 第19回「名取洋之助賞」、第7回「笹本恒子写真賞」受賞者決まる
- 第18回JPSフォトフォーラム「記録、伝える、その先に見えるもの」

JPS



Photo Tsuchida Hiromi

ヨドバシ・ドット・コム 映像制作機材 専門ストア開設しました



プロ機材を豊富に品揃え
ぜひご利用くださいませ



<https://www.yodobashi.com/store/300201/>



新規会員募集中 日本写真家協会 会員様専用の
ゴールドポイントカード

12%ポイント還元

※現金・デビットでのお支払時。一部対象外商品ございます。



専門知識豊富な販売員が親切丁寧にご案内いたします!

ヨドバシカメラ

www.yodobashi.com

新宿西口本店 〒160-0023 新宿区西新宿1-11-1 ☎ 03(3346)1010	マルチメディア 新宿東口 〒160-0022 新宿区新宿3-26-7 ☎ 03(3356)1010	マルチメディア Akiba 〒101-0028 千代田区神田花岡町1-1 ☎ 03(5209)1010	マルチメディア 錦糸町 〒130-8580(駅ビルテルミナ1・2・3階) 墨田区江東橋3-14-5 ☎ 03(3632)1010	マルチメディア 上野 〒110-0005 台東区上野4-10-10 ☎ 03(3837)1010
マルチメディア 町田 〒194-0013 町田市原町田1-1-11 ☎ 042(721)1010	八王子店 〒192-0082 八王子市東町7-4 ☎ 042(643)1010	マルチメディア 吉祥寺 〒180-0004 武蔵野市吉祥寺本町1-19-1 ☎ 0422(29)1010	マルチメディア さいたま新都心駅前店 〒330-0843 さいたま市大宮区吉敷町4-263-6 ☎ 048(645)1010	マルチメディア 川崎ルフロ 〒210-0024 川崎市川崎区日進町1-11 ☎ 044(223)1010
アウトレット京急川崎 〒210-0007 川崎市川崎区駅前本町21-12 ☎ 044(221)1010	マルチメディア 横浜 〒220-0004 横浜市西区北幸1-2-7 ☎ 045(313)1010	マルチメディア 京急上大岡 〒233-0002(京急百貨店1・8・9階) 横浜市港南区上大岡西1-6-1 ☎ 045(845)1010	千葉店 〒260-0015 千葉市中央区富士見2-3-1 ☎ 043(224)1010	マルチメディア 新潟駅前店 〒950-0901 新潟市中央区弁天1-2-6 ☎ 025(249)1010
マルチメディア 宇都宮 〒321-0964(トナリエ6・7・8階) 栃木県宇都宮市駅前通り1-4-6 ☎ 028(616)1010	マルチメディア 甲府 〒400-0031 山梨県甲府市丸の内1-3-3 ☎ 055(230)1010	マルチメディア 郡山 〒963-8002 福島県郡山市駅前1-16-7 ☎ 024(931)1010	マルチメディア 仙台 〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡1-3-1 ☎ 022(295)1010	マルチメディア 札幌 〒060-0806 北海道札幌市北区北六条西5-1-22 ☎ 011(707)1010
マルチメディア 名古屋松坂屋店 〒460-8430(松坂屋名古屋店南館4・5階) 愛知県名古屋市中区栄3-16-1 ☎ 052(265)1010	マルチメディア 梅田 〒530-0011 大阪府大阪市北区大深町1-1 ☎ 06(4802)1010	マルチメディア 京都 〒600-8216 京都府京都市下京区東塩小路町590-2 ☎ 075(351)1010	マルチメディア 博多 〒812-0012 福岡県福岡市博多区博多駅中央街6-12 ☎ 092(471)1010	ヨドバシカメラの インターネットショッピング www.yodobashi.com



INAMURA Takamasa 1947

JCII PHOTO SALON

開館時間 10:00 - 17:00

休館日 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は開館)、年末年始など

入館料 無料

102-0082 東京都千代田区一番町25番地 JCIIビル1階

03-3261-0300

<https://www.jcii-cameramuseum.jp/>



■ Gallery	JPS ギャラリー 岩永 豊、大岩友理、角田新八、西村仁見、 野口 毅、内村コースケ	5
■ First Message	「会長全国行脚」から見えてきたもの	山口規子 11
■ Focus	「阪神・淡路大震災」から 30 年 写真と災害報道をふりかえって	森下東樹 12
■ Telescope	できることをできる範囲で「令和 6 年能登半島地震」の現場から	村山嘉昭 14
■ Wonder Land	<新・声のライブラリー>写真家・木村恵一さん	16
	「時代を追い続け、今日という日に着いた」	
■ Zooming	写真の散歩道(連載 10 回)	鳥原 学 20
	映画が描くフィルム写真へのロマン	
■ Opinion	スポーツ報道を通じて考えるデジタル化	小城崇史 22
■ Workshop	著作権研究(連載 58)	吉川信之 24
	写真著作権と生成 AI 画像の現状を考える	
■ Topics	賛助会員トピックス	26
■ Award	2024 年第 19 回「名取洋之助写真賞」決まる	28
	藤原昇平「東京オアシス」	
	星野藍(奨励賞)「赤き星が落ちた世界 ソビエト連邦崩壊の残響」	
■ Forum	第 18 回 JPS フォトフォーラム	32
	「記録、伝える、その先に見えるもの—ある大地の物語」	
	講演・パネルディスカッション＝中条 望、齊藤小弥太、小山幸佑、清水哲朗(司会進行)	
■ Award	2024 年第 7 回「笹本恒子写真賞」受賞者決定 !! 遠藤 励さん	38
■ Exhibition	第 7 回「笹本恒子写真賞」受賞記念展	39
■ Convention	第 50 回「日本写真家協会賞」贈呈式・第 19 回「名取洋之助写真賞」授賞式 第 7 回「笹本恒子写真賞」授賞式・2024 年度会員相互祝賀会	40
■ Archives	「日本写真保存センター」調査活動報告(42)	寺師太郎 44
■ Report	2024 年度「フォト・ジャーナリズム論」講座報告 榎並悦子、野田雅也	46
■ Report	セミナー研究会レポート	48
■ Books	JPS ブックレビュー	49
■ Information	追悼＝名誉会員・細江英公、正会員・西田茂雄、杉山栄紘、	54
	藤森秀郎、岩城昭輝／写真解説(表紙、表 4)／経過報告／編集後記	
■ Exhibition	第 19 回「名取洋之助写真賞」受賞作品 写真展	59
■ Message	Message Board	60
■ Gallery	X ギャラリー 林 義勝、塩田諭司、Rinaty (河合璃奈)	64
	表紙・土田ヒロミ、表 4・小柴一良	

広告 案内

- | | | |
|----------------------|----------------------|-----------------------|
| ■ (株)ヨドバシカメラ | ■ リコーイメージング(株) | ■ (株)浅沼商会 |
| ■ (一財)日本カメラ財団(JCII) | ■ キヤノンマーケティングジャパン(株) | ■ (一社)日本写真著作権協会(JPCA) |
| ■ アイデムフォトギャラリー「シリウス」 | ■ (株)タムロン | ■ 富士フィルム(株) |



想いを写す、フォトギャラリー。

[sirius]
AIDEM PHOTO GALLERY

アイデムフォトギャラリー「シリウス」 <https://www.photo-sirius.net/>
〒160-0022 東京都新宿区新宿1-4-10 アイデム本社ビル2F
TEL:03-3350-1211 FAX:03-3350-1240 時間:午前10時～午後6時 休館日:日曜





ハレの日、ケの日ふるさと佐賀 ——— 岩永 豊

20年以上、ふるさと佐賀の風景や人々の暮らしを記録してきた。多くの人たちと出会い、その営みに触れる中で、佐賀の新たな魅力を発見し続けている。祭りや行事が彩る「ハレの日」と、日常の静かな営み「ケの日」が織りなす風景には、日本人の精神性と暮らしの本質が息づき、それは私にとって原風景そのものである。一方、少子高齢化や後継者不足という厳しい現実に直面しながらも、地域を支える人々の姿に深く心を打たれる。
写真集『ハレの日、ケの日ふるさと佐賀』





雪形に春想う ————— 大岩友理

長野県木曽町・開田高原に花桃が咲く頃、御嶽山の山肌には農作業の目安とされる雪形模様が現れる。かつてこの時期になると木曽馬（日本在来馬の一種・長野県天然記念物）は人と田畑を耕してきた。現代その役割を耕運機が担い、乗馬・ホースセラピーなどで人と関わっている。時代に翻弄されながら今も人馬共存している所以は、様々な廻り合わせに他ならない。その根底に流れる「アイ」がある限りこの歴史は紡がれていくのだろう。

写真集・写真展「KISO HORSE めぐりあい」





スー（熟蚕）に顔がほころぶ ————— 角田新八

近代日本の経済発展を支えた養蚕の姿を残しておきたいと思っていた折、一人の女性に出会いました。桑畑の手入れに始まり、自然や病気の対策、きつい労働、汚れ物の片づけ、成長の楽しみや繭を手にする喜びなど、昭和を思わせる養蚕の姿が、彼女の日常と共にありました。辛い筈の労働が生きる張り合いになり、蚕が愛しい虫にまで変わっていく様子を伝え、養蚕の記録として残す事が出来ればと思います。

写真集『蚕養 60 年 ある女性の人生』





Kトラ物語 K-TRUCK DREAMY #21 — 西村仁見

農家の方により、長年大切に使われて来たこの軽トラは、まるで飛び立つかのように大空へ向かって置かれていた。この作品は昼バージョンと夜バージョンの2種類を定点撮影した。夜、唐突に一台の選挙カーがやってきて私の右側数メートル横に停車した。ウグイス嬢の声が辺りにこだまする中、被写体は、選挙カーのブレーキランプによって赤く浮かび上がり、カオスな状況の中、図らずも幻想的な光景が生まれた。

写真展「Kトラ物語 K-TRUCK DREAMY」





住宅棟 俯瞰 ————— 野口 毅

通称「軍艦島」と呼ばれる「端島」は、ほぼ全てが「危急存亡状態にあるコンクリート構造物」である。世界文化遺産に指定されている端島の「建造物群の調査保全活動」は続いている。国内最古のRC集合住宅の一つである「30号棟」は、2020年3月の暴風雨により大きな被害を受けた。閉山から50年の2024年、いまの端島のすがたを残す一つの術（すべ）としての記録である。島民が島を離れ明かりを失った島に灯台の小さなあかりだけが灯る。

写真展「HASHIMA 危急存亡状態にあるコンクリート構造物の島」





マルコがいた夏 ————— 内村コースケ

マルコは、アイメイト（盲導犬）のリタイア犬です。視覚障害者の目となって働いた日々を経て、10歳で我が家に来て、家庭犬として余生を過ごしました。とても愛情深い犬で、私は特にその優しい瞳に魅せられ、マルコとの4年半の日々を毎日、日記のように写真に残しました。このカットは、ある夏の日に、八ヶ岳山麓の自宅の前で、妻と向き合うコマ。マルコがそこにいだけで優しい時間が流れる、そんな日々が思い出されます。写真展「リタイア犬日記～3本脚で駆けた元アイメイト（盲導犬）の物語～」



「会長全国行脚」から見えてきたもの

副会長 山口 規子

2025 年がスタートし早 3 か月が経った。会員の皆様はどんなスタートを切っただろうか？抱負に向かって実行するもよし、健康に留意して無理せずゆっくり進むもよし、それぞれのスタートを切ったことである。

2024 年は元日に能登半島地震という大きな災害、その翌日 1 月 2 日には羽田空港地上衝突事故と 2 日間にわたり悲しいニュースで始まったが、花の都パリでのオリンピック開催や、アメリカからは大谷翔平選手の活躍など嬉しいニュースもあった。

当協会も 2023 年に会長に熊切大輔が就任して、理事の顔ぶれも変わり、毎月開かれる業務執行理事会では新しい議案や活発な意見交換が繰り返し広げられ、様々な活動を続けてきた。

そのなかの一つに「会長全国行脚」があった。2023 年 11 月に関西地区を第 1 回目として始まった行脚は、2024 年 1 月中部地区、4 月中国地区、6 月九州・沖縄地区、8 月東北地区、同じく 8 月北海道地区、12 月四国地区で開催している。この行脚は当初、オンライン形式でもいいのではないかという意見もあったが、その地域の会員に実際に会って、顔を見ながらの意見交換は、その人の発言のニュアンスを掴みやすく、有意義な行脚になったと感じた。

行脚会議の内容は、今現在の協会の活動内容や会員サービスなどの説明、次にこれからの協会はどこに向かっていくのかという展望「JPS アジェンダ」について、最後に質疑応答や意見交換に入るという流れで行った。

そこで驚いたことは、入会時の会員サービス内容をほとんどの方が忘れており、改めて説明したということだ。「え！ヨドバシカメラ、ビックカメラのポイント 2% アップなんてあるの？」「写真展開催 DM ハガキの同封サービス、知らなかった」極めつけは「文芸美術国民健康保険って何？」などだった。

それらの質問に一つひとつに返答しながらの「行

脚」から、会員の实態が徐々に見えてきた。新しくできた会員サービスなどはその都度、『JPS ニュース』紙でお知らせしてきたが、ここまで伝わっていなかったことに衝撃を受けた。「隔月で送られてくる『JPS ニュース』や年 2 回発行の『会報』を読んでいらっしゃいますか？」と尋ねるとほとんどの方が「『JPS ニュース』を読んでいない、封筒を開けていない」と答えた。では「協会からの伝達方法として、何が一番便利ですか？」と尋ねると「メール」。なかには「LINE がいい」という方もいた。この件は『JPS ニュース』の編集・発行を担当している総務委員会の常務理事に伝え、理事会で改善策を模索している。

また「技術研究会がオンラインでも参加できるようになったのは嬉しいが、その日が都合悪い時などもあり、会員限定でアーカイブが見られるようになると嬉しい」や「地方在住の会員が、東京で写真展を開催したい時に、東京のギャラリー情報やアドバイスなどが欲しい」などの声も上がった。

こうして会員の声を聞きながらの対話のなかで感じたことは、各地に住んでいる会員の方々が元気だということ。東京でバリバリ働いていた方が、実家の都合で戻り新たな活動をしていたり、地元で長年一つのテーマを追って作品制作を続けていたり、また JPS 会員に限らず、その地域に住む写真家で集まりグループ活動していたり、また会員同士で仕事を助け合っていたりと、それぞれの形で精力的に写真活動をしていた。また会員同士の横のつながりがなかった地域においては、これを機につなげることができ、情報交換ができるようになったという。まさに会長が掲げた「つながる JPS」が一步前進したようだ。

当協会の会員は職業写真家に留まらず、写真表現としての作品制作をする写真作家でもある。そんな彼らと日本の写真文化向上にむけて、これからも一緒に活動出来たらと願う。その活動はいずれ、会員一人ひとりの写真家としての価値向上につながると信じている。

「阪神・淡路大震災」から 30 年

写真と災害報道をふりかえって

文・撮影／森下東樹(JPS 会員)

●はじめに

1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分、淡路島から神戸に繋がる断層が動く、それは「阪神・淡路大震災」の発生だった。震源は淡路島北部。この直下型地震のマグニチュードは 7.3、震度 7、死者 6,434 名、不明者 3 名 = 2006(平成 18)年 5 月、消防庁 = という、戦後最悪の被害をもたらした。

私は当時 42 歳。朝日新聞西部本社編集局写真部で西部本社管内の写真の機材を中心にシステムを管理する職にあった。一報はデスクからの電話だった。「神戸が地震で大変だ、すぐにヘリで神戸に向かってくれ」。午前 8 時 30 分、北九州空港を離陸、神戸までの天候は曇りのち雨。淡路島の手前から天候はさらに悪化。淡路島東側から洲本上空をかすめ、海上を縫うようにして神戸に向かった。神戸に近づくと地上から黒煙がまるでカーテンのように立ち上り視界を遮った。とにかく、想像を絶することが地上で起こっているのだらうと思った。ヘリの撮影窓を開けた途端、ものすごいガスの臭いが機内に流れ込んできた。低空飛行をすると、エンジンに引火する危険もある。「街」全体が燃えていた。目の前で起きていることは本当なのか。身震いをしながらシャッターを押した。

●カメラマンはこの状況下でどんな思いで取材に当たったか

震災から 4 か月後の 1995 年 4 月、朝日新聞出版写真部は『カメラが震えた日』と題して 127 ページの本を発行した。これまでも災害に対するマスコミ報道の姿勢は、しばしば批判されてきた。非情なカメラマンのイメージもあるはず、この機会に、少しでも報道カメラマン一人ひとりの気持ち、考えを理解してもらおう、未曾有の出来事を取材した者が、戸惑い、驚き、悩み、どう行動したかをまとめようと、現場取材した朝日新聞社カメラマン(フリーを含む)総勢約 130 人が記録した 1 万本近い膨大な撮影済みフィルムから選ばれた 150 枚の写真と取材に当たったカメラマン一人ひとりの行動が時系列で書き綴られ、後世へ遺す大災害の記録として残されている。

本の巻頭で当時の大阪本社写真部長は次のように書いている。「朝日新聞大阪本社の写真部員 26 人のうち 10 人もまた被災者だった。カメラを担いで飛び出した部員。自転車にまたがって本社に向かったデスク。瓦礫の中を家族と避難所に向かった部員……。阪神大震災はスター



倒壊した阪神高速道路と道路上のトラックや乗用車
1995.1.17 撮影

ト時点で通常の取材と決定的に違っていた。通常は事件の発生を間接的に知り対応を考えつつ、現場に向かう。しかし、今回は程度の差はあれ、取材者がほぼ同時に地震の洗礼を受け、恐怖を感じ、それぞれに動き出したことだった。生後 1 か月もたない赤ちゃんをかかえる部員は、自宅のマンションが崩れ、壁の鉄筋がむきだしになった。暗闇の中、ガラスで足を切り血だらけになりながら、妻子を避難させた。オムツを取りにマンションに戻り、カメラを手にとると不安げな妻子を残して燃え上がる市街に向かった。靴の中は血でグチャグチャだった。夢中で生存者を助けようと瓦礫を掘った部員は、現れた手がだんだん冷たくなってしまい、瓦礫に向かって泣きながら罵った。「取材に来るなら、救援物資を持ってこい」と怒鳴られた部員もいた。夕刊の締め切り間際に大阪本社にバイクで飛び込んできた部員は、ヘルメットの下から血を流していた。

地震発生数日後の取材基地で、部員同士のこんな会話が合った。「瓦礫に埋もれた人を助けるのが先で、写真が写せなかった……。若い部員の、そんな地震直後の生々しい体験を聞いた先輩部員は、おそらく紙面を飾るすごいシーンを次々に頭に浮かべながら、こう言った。「せっかくのシャッターチャンスを逃したのではないか……。『人命救助か、取材かと迷ったりする



夜炎上する神戸の市街地、奥が淡路島 1995.1.17 撮影

暇ありませんでした。生き埋め現場に火の手が迫っていて、当たり前に出救作業をしていた」。若い部員は、そう答えた。スーダンの飢餓を訴えた衝撃的な写真で、1994 年のピューリッツアー賞の企画写真部門賞を受賞した南アフリカのケビン・カーター氏の『ハゲワシと少女』は、その後、少女はどうなったのか、写すより助けるべきでは、などカメラマンのモラルも含めて話題になった。私たちも、議論をした。写真を撮るという同業の立場からか、『カメラマンはとにかく撮る』の意見が大勢だった。私自身もそう思った。しかし、躊躇なく生存者を救出し、その後、瓦礫の中を走り回って取材を続けた部員に、なぜかほっとしている。予想を超えた大震災を写真でどう表現するか、貴重な記録の積み重ねは始まったばかりだ。「歴史に残るような現場に立って仕事をしたい」。何度も部員たちから聞いた言葉だ。いま私たちはそこに立っている。「写真でなにが出来るか」を問われながら。」

●取材現場での葛藤

神戸の火煙は夕方になってもおさまる様子はなく、私は夜

間飛行に入った。使ったネガカラーフィルムのISO感度は1600。「日没後、長田区」の写真はシャッタースピードが1/8sec。ヘリの振動に体とカメラを同調させて撮影した。フィルム3本のうち、3コマだけがどうにかブレが最小限で撮影できた物だった。

2011年3月に起きた東日本大震災、2016年4月の熊本地震、2024年1月1日に起きた能登半島地震の3つの災害を取材したカメラマンがいる。小宮路

勝(57)は東日本大震災発生時、仙台の自宅にいた。ビックリするほどの音で緊急地震速報が流れた。その直後、経験したことのない激震が2度あり、マンションが倒壊するのでは、死ぬかもしれないと強い恐怖に襲われた。気仙沼は、津波で車が何段にも積み重なり、陸地には漁船がいくつも取り残されていた。がれきを乗り越えながら港に着くと目を疑う惨状だった。一刻も早く現場の悲惨さを伝えなければとシャッターを切った。被災者からは支援が欲しい、この惨状を早く報道してくれと懇願された。自衛隊からは要救助者の居場所の提供を求められた。取材した写真が掲載されることで救援や支援が少しでも早く届くことを願いながら取材をすすめた。

●被写体の人権

近年、取材現場では被写体となる人たちの肖像権がクローズアップされている。恒成利幸(56)は名取市閑上で女性が橋の上にいるのを見た。女性はそのうち道路に座り込み履いていた長靴を脱ぎ、涙を流している。無防備に泣いている女性の写真を撮る事は彼の心を制した。しかし、彼女の涙は被災地や被災者の悲しみを表すものになるのではないかと、思いを振り切ってシャッターを押した。彼女に話を聞くと、座り込んだ視線の先に自宅があったが、津波にさらわれてしまい何もかもをなくして涙を流していた。

石巻では、被災して自宅に住めなくなった夫婦に出会った。嫌な顔を見せず「私たちも頑張っているのです、この被害状況を伝えて」と言って、写真撮影を許してくれた。関東に住む家族にも連絡する手段もないと聞き、自ら連絡をとり被災地家族の無事を知らせた。

また、東日本大震災は福島第一原子力発電所の水素爆発で、放射性物質を外部に放出させる事態を引き起こした。取材にあたったカメラマンは目に見えぬ放射能という恐怖の中で取材をしたに違いない。私も経験がある。1986(昭和61)年に起きた旧ソ連ウクライナのチェルノブイリ原発事故ではベラルーシはじめ中欧、東欧、ロシアの広い範囲までもが汚染された。事故から4年経った1990年、ベラルーシの首都、ミンスクに入り、被曝者の治療に建てられた白ロシア共和国国立放射線医学研究所付属病院を取材した。事故で放出された高い放射能を含んだ粒子(ホットパーティクル)を吸い込むと被曝する。モスクワでスティック型の放射線量計を手に入れ、クビからぶら下げて取材活動した。ただただ目に見えぬ恐怖の中での取材だった。



午前7時半頃、焼け跡の中を自宅を見に来た少年 1995.1.18
撮影：新井義顕

●アナログからデジタルへ

報道各社のカメラ機材はキヤノンやニコンが主流でオリンピックごとに新製品が発売され技術革新が進んだ。震災後の1999年9月にニコンが本格一眼レフデジタルカメラ「D1」(有効画素数266万画素)を発売。2001年12月にキヤノンがEOS-1D(有効画素数415万画素)を発売し、一挙にデジタル化が加速した。通信手段も進歩した。今では地上アンテナを使う携帯電話回線が通信不能になっても衛星電話による通信で音声、データ通信が可能となり衛星に電波を送信出来るところならどこからでも通信が可能となり活用されている。

震災当時、東京本社で映像開発を担当していた浅川周三(73)によるとデジタルカメラは当時、報道機関にとっては高価すぎて汎用機材ではなく、震災取材の最先端では活用できるものではなかった。震災後に新聞製作にも電子化の兆しが来て記事の入力や編集と各部門でデジタル化に向けた準備が始まった。当時は携帯電話とノートパソコンによる通信で画像を送るシステムは確立されていなかったという。

●情報社会に新たな問題

インターネットと共にスマートフォンも普及し、個人が簡単にフィルターのかからない情報発信が出来るようになった。無料のSNSには関心を集めれば収入をもたらすものもあり、誤情報や偽情報が拡散されることも多々ある。これらの情報は災害時などに大きな障害となる。新聞社をはじめテレビなどのメディアは法令遵守だけでなく、倫理観、公序良俗などの社会的な規範に従い、公正・公平に業務をおこなうというコンプライアンスを理念に情報発信を行っている。

最後にこれらの災害で亡くなられた方々のご冥福を心からお祈りするとともに、被災され、復興を目指す方々に声援をおくるとともに取材にご協力頂いた方々に報道カメラマンを代表して心から厚くお礼申し上げます。

(画像提供：朝日新聞社)



避難者で埋まった東灘小学校校庭 1995.1.18 撮影



森下東樹(もりした・はるき)

元・朝日新聞写真記者。日曜版のブータンでは標高4,650メートル、長崎県・松島炭坑では地底765mの切り羽を経験。ヨーロッパを中心に延べ11か国を取材。朝日カルチャーセンターの福岡・北九州写真教室、ハウステンボスアカデミア講師なども務める。東京湾で起きた潜水艦「なだしお」の衝突事故で東京写真記者協会ニュース部門賞。新燃岳噴火「火山灰に覆われた都城市街」で九州写真協会賞など複数受賞。2012年に定年。嘱託5年の後、KBC九州朝日放送のラジオニュースデスク嘱託勤務。現在72歳。

できることをできる範囲で

「令和6年能登半島地震」の現場から

村山嘉昭(JPS 会員)

最大震度7を記録した「令和6年能登半島地震」(編集部注)から1年が経った。能登半島には発災直後から繰り返し足を運んでおり、滞在期間は通算で4か月近くになっている。取材や撮影で訪れるだけでなく、災害廃棄物の片付けや泥出しなどといったボランティア活動を目的とした場合が多くなったからだ。

会報編集部からは「自然災害と写真家の役割」というテーマでの原稿を依頼されたが、能登半島地震を含む過去の自然災害地にはこれまで数え切れないほどの写真家が出かけており、不幸にも家族や本人が被災当事者となった写真家も存在する。私が「役割」を語るのはおこがましいのではないかと思います、私自身の個人的な経験と考えを記させていただく。

車に機材一式を積み現場へ

2024年1月1日、能登半島地震の発生時、私は帰省先の横浜市内で元旦を過ごしていた。ニュース速報で地震が起きたことを知り、大津波警報の発表や建物が広範囲で倒壊している状況に驚いた。東日本大震災や熊本地震で目にした光景が頭に浮かび、石川県へ取材に行くことを決めた。当時はまだ能登半島に知り合いは1人もおらず、土地勘もなかった。取材に出かけると判断してからは関連ニュースやSNSに投稿された現地の様子、行政機関のウェブサイトなどをチェックし続けた。取材に必要な被災状況や道路情報を得るためだ。これまでの災害取材の経験から今回も単独登山のような自己完結型で、食事や寝泊まりは自分で用意する必要があると判断した。現地で調達できる可能性は低く、被災地に負担をかけないことは災害取材の基本だからだ。そのために徳島市の自宅へいったん戻り、現地での行動や滞在に必要な10日分の食料品や調理器具、ガソリン携行缶や撮影機材などを車に積み込み、準備を整えた。同時に、以前勤めていた酪農専門誌に連絡し、現地ルポの企画を提案した。



町内一帯の家屋が倒壊した珠洲市正院町。
1月24日撮影

*

金沢市に到着したのは、1月5日の早朝だった。その頃には被害の全体像がテレビや新聞で報じられ、孤立集落が続出していることもわかってきていた。また、「奥能登」と呼ばれる2市2町(珠洲市、輪島市、能登町、穴水町)では崩落や土砂崩れなどで通行可能な道路が限られ、随所で深刻な渋滞が発生していることが問題となっていた。とくに富山湾側から奥能登へ出入りする際に通る七尾市や穴水町での渋滞がひどく、朝夕は長い車列が断続的に続く状況だった。県や馳浩知事らは不要不急の移動自粛を呼びかける一方、現地入りした支援団体やメディア関係者らがSNSなどでバッシングされる現象も起きていた。支援者の中

には被災地外からの批判を避けるために、この時期の情報発信を控えたと話する人もいる。私自身もバッシングの対象になることを恐れ、SNSには内容を慎重に考えてから投稿した。



地震と津波で被災した珠洲市三崎町寺家。公助による支援がなく、漁師自らが被災漁船を撤去していた。3月23日撮影

奥能登へ出入りするのは、交通量が激減する夜間にした。これにより貴重な時間を渋滞で潰さずに済んだ。寝泊まりは道の駅などでの車中泊を基本とした。被災地の中で泊まるため、移動時間の節約になり、同じように車中泊をする避難住民から話を伺うこともできた。就寝時は燃料を節約するためにエンジンを切り、羽毛寝袋を二重にして寒さをしのいだ。

今回の災害でも、日本を代表するアウトドア用品メーカーである株式会社モンベルが中心となって活動する「アウトドア義援隊」の被災地支援に協力し、モンベルから預かった防寒着や寝袋などを必要な住民に届けた。モンベルが災害支援を始めたのは1995年の阪神淡路大震災からで、東日本大震災では世界中から寄せられた約300トンの支援物資を津波被災地に届けている。私がアウトドア義援隊の活動に関わるようになったのは東日本大震災からで、それからは災害取材で得た避難所や在宅被災者などの状況を伝え、私自身も活動の一環として必要な物資を届けたりしている。被災住民の支援を発災直後から迅速に進める姿勢は心から尊敬でき、今回もその姿勢は変わることなく徹底していた。

*

災害取材では被害が深刻な地域へ出かけ、困難な状況に置かれた住民と接する機会も多い。住民から話を聞いて書いた記事や被害状況を記録した写真や映像を伝えることで、被災地の理解が深まり、支援が現地に集まることもある。誰でも気軽に行けない状況下では、伝えることの重要性が増し、具体的に正確な情報発信は住民支援につながる

(編集部注・2024年1月1日16時10分に石川県能登半島を中心に発生したM7.6最大震度7の地震)

ケースが少なくない。さらに記録として残すことで、それぞれの地域で防災を考える材料となり、次の災害に備えるきっかけにもなりえることもある。このような考えを持っている



4月19日、珠洲市蛸島町。被災住宅の間に桜が咲いていた。ドローン撮影

たととしても、現実には被災して困っている方を目の前にと無力感を強く感じることもある。

被災地は常に写真家としての仕事や役割を突きつけられ、考えざるを得ない状況ともいえる。写真では目の前にいる住民の空腹を満たせず、報じることで起こる効果が実感し難いからだ。ならば、取材と並行して具体的な支援もすれば良いのではないかと私は考え、可能な範囲で実行するようになった。苦労して現場へ行くならば、車に必要な物資を載せないともったいない。今回も被災地を取材で回る途中、公民館や集会場などの小規模避難所を見かけたら立ち寄り、必要なものや足りないもののニーズを聞き取り、アウトドア義援隊の支援につなげたり、ものによっては個人的に届けたりしていた。立ち寄った際は区長などの管理責任者だけでなく、食事作りを担当する住民にも声をかけ、話を聞くように努めた。玄関先では本当に困っていることがわからないからだ。

写真家の役目とは何か？

ある能登町の避難所では、発災直後から数人の女性たちが休む間もなく食事を作り続けていた。交代する適任者がおらず、役割が固定化したことで、やむにやまれずに続けているとこぼしていた。各家庭から持ち寄った調味料が残りわずかだと教えてもらって、金沢市などにある24時間スーパーへ出かけ、菓子やコーヒーなどの嗜好品と一緒に届けたりしていた。購入費用は友人たちが託してくれたお金を使った。理解ある友人たちのおかげで成立した支援でもある。



震源地に近い珠洲市馬線町でキリコ祭りで開催された。10月13日撮影

東日本大震災以降、被災自治体は個人からの支援物資を拒む代わりに、義援金振込みやアマゾンの「欲しいものリスト」での支援を呼びかけることが一般的になりつつある。個人の支援物資は仕分け作業に余計な人手と手間がかかり、必要数が揃わないなどといった面からも嫌厭される。中には使い古されたものが支援物資として送られてきたケースもある。ただ、災害で混乱した状況では、被災者のニーズに対して自治体が適時応えられていないのも事実だ。

私が避難所などに直接届けた物資の量や内容はわずかなものだったが、顔と顔が見える関係を築いた上で丹念にニーズを聞くことで、必要なものを届けられていたと思っている。現地では誰からも移動自粛中に来たことを咎められず、

注意もされなかった。むしろ取材であっても歓迎された。さらに御用聞きで何度か顔を合わすうちに私を信頼し、ファーストコンタクトでは知り得なかった本音や被災後の悩みを



側溝の泥だし作業を終えて。7月15日、珠洲市馬線町で撮影

話してくれる方もいた。支援の目的は本音を聞くためではないが、結果的にコミュニケーションを円滑し、現地の事情を深く理解することにも役立っていた。

＊

当初は10日間ほど取材して引き上げる予定でいたが、その後も能登半島に通い続けることになった。私が知っているこれまでの自然災害と比べて取材者やボランティアなどの支援者が少なく思え、勝手ながら「ほっとけない」と思ってしまったからもある。さらに地元住民と親しくなるにつれ、人手の必要性を切実に感じたことも大きい。発災直後の支援は私1人でも出来ていたが、復旧のフェーズへ変わってからは1人では出来ない作業ばかりとなったのだ。

道路事情が良くなったタイミングで手伝いを呼びかると、被災地へ行くのを我慢していた友人たちが応答してくれた。連休ごとに公費解体される住宅の片付け作業や災害ゴミの搬出などを続けた。



豪雨による土砂撤去作業を終えて。10月13日、珠洲市片岩町で撮影

9月に奥能登で発生した豪雨災害後はさらに人手が必要になり、泥だらけになって住宅まわりの土砂撤去をした。被災した方から辛い話を聞き、写真を撮らせてもらった者としては、カメラの代わりにスコップを握ったのはしぜん成り行きだった。他者への寄り添い方はいろいろな方法があり、答えはひとつではない。写真家の役目もまた同じだと思う。それぞれができる範囲でできることを探し、動くことが大切なのだ。

(文中の写真は全て筆者撮影)



村山 嘉昭(むらやま・よしあき)

1971年、横浜生まれ。2017年に東京都から徳島市へ移住。在京中はテレビ・ラジオ局の広報撮影、農業系出版社に勤務。2005年に独立し、週刊誌や月刊誌、企業広告などの仕事をしながら、ライフワークである市井の人びとや災害取材を続けている。防災士。ウェブサイト：muracame.com

<新・声のライブラリー> 写真家・木村恵一さん 「時代を追い続け、今日という日に着いた」



JPS では、写真家本人に直接お会いして創作活動や写真論などを話していただく、声と映像による「声のライブラリー」(1970-99 年)を企画し、後世に遺すことを実施してきました。そして今年度から「新・声のライブラリー」として再開し、会報 182 号から掲載をスタートしました。新シリーズの第 2 回目は、当会の名誉会員であり、長く『会報』誌の編集にも携わった木村恵一さんにお話を伺いました。

聞き手：小池良幸専務理事、伏見行介常務理事 2024 年 10 月 9 日(木)

■ まだ“食えなかった”時代に JPS へ入会

—— 木村恵一先生(以下木村さん)は、長く協会の『会報』の編集責任者を務めてこられた。私たちはその仕事を通じて、いろいろなことを教えて頂きました。今日は写真との出会いや、今の写真界に感じられていること、若い人に向けたメッセージなどを伺っていきたくと思っています。

まず、木村さんが JPS に入会した頃のことを話して下さい。

木村：私が会報の編集に携わるようになったのは、通巻の 20 号からですね。1968 年の発行。すると昭和 43 年ということになりますね。まだその頃は、JPS に入りたての私がやることはあまりなくてね。その頃は八木下弘さんが中心になって編集をやり、会報のページ数も少なかったので、話を聞きに出かける八木下さんの後を付いて回っていたようなものでした。今、会報は 182 号まで出ていますから、結構長いですね。会報の仕事をやらせて頂けたお陰で、ずいぶんたくさんの JPS のメンバーと知り合うことができました。当時はまだ会員の数は少なく、会報も薄いものでしたから、写真界の動きを報告するくらいの記事しかできませんでした。

—— 当時の記事を見ますと、第 19 回の総会で会員が 346 名とあります。昭和 43 年のことですね。会員数は今の 4 分の 1 くらいです。

木村：僕が入会できたのは、ちょうどその頃、JPS をもっと多くの人が参加する団体にしようという動きがあったからです。木村伊兵衛さんや、渡辺義雄先生の

働きがあったようです。

—— 木村さんが JPS に入られた時、同期のメンバーは誰がいましたか？

木村：僕はまだ駆け出しのカメラマンでしたから、JPS というプロの団体になど入れないと思っていたのですが、渡辺先生の一声「入りなさい」とね。確か熊切圭介さんと同期だったと思います。

—— その時、木村さんはおいくつでしたか？

木村：僕は 1935 年生まれだから、26 歳ですね。まだ、写真家としては、食えなかったですよ(笑)。

—— 木村さんは、学校は日本大学の芸術学部写真学科へと進まれています。ご自身が写真を学ぼうと考えた動機は何だったのか？どこで写真と出会ったのでしょうか？

木村：僕は東京の下町の銘木屋、つまり材木屋の生まれです。いきおい床柱であるとか、建築物を見て育ちましたから、日本建築には興味があったのです。高校までは東京の下町で育ちましたから、外のことはあまりよく知らないのです。気がついたら大学受験という年になり、あまり勉強もしてなかったから、さあどうしたらいいんだ、といっているうちに、みんな願書提出の締切りになっちゃってね。で、あと残っているのは、日本大学くらいしかなかったのです。その時に、高校時代の友人のお兄さんが、芸術学部の話をしてきて「面白いよ」と。まだ願書を受付していたので、申し込み、合格しちゃったのです(笑)。その頃は、まだ写真のことなど、何にも分らなかったのです。

—— 写真に興味がなかったのですか？

木村:兄が、スプリングカメラを持っていたから、写真の存在は知っていたのですが、それでは、写真とはどのようなものであるのかということは、全然分からなかった。入ったのはいいけれど、それからは大変だったですね。周りにはもうみんな経験を積んでいて、同級生であっても、年がいくつも上の人もある。もう出版社の仕事をしている人もいます。その時は大変慌てただけで、そういう人たちにいろいろ教わりながら、だんだんのめり込んでいきました。

—— 木村さんはちゃんと4年で卒業したのですか？

木村:うん。成績はあまり良くなかったのですが、授業だけは真面目に出ていたからね。

—— 卒業した後は、渡辺さんのところにアシスタントに入られたのですか？

木村:そうです。家が銘木屋でしたから、学校で写真をやっても、建築そのものに興味があつてね。大学の授業、まだその頃はゼミとはいっていなかったけれど、渡辺先生の建築写真の授業をとって、だんだん建築写真にハマっていくのです。で、今度は卒業ということになって、みんな出版社や、新聞社に入っていくんだけど、自分にはそのような所に行く力がないことはよく分っていたのでね。どうしよう、どこか拾ってもらおうと、四谷にあった渡辺先生の事務所を訪ねたんですが、「私は弟子は取りません」とピシッといわれて。それで終わりにすれば良かったのでしょうけれど、それから3日、4日と先生の事務所に通い、毎日扉の前で「おはようございます」と挨拶をする。4日目くらいに「部屋に入りなさい」といって頂き、それから助手の生活を始めたのです。けれども、建築写真の世界はそんなに甘いものではなくて、厳しい世界だなと思いました。渡辺先生がちょうど『伊勢神宮』

という立派な本を作っていた時で、そのお手伝いの仕事のできたのです。その時は、いずれは建築写真で生活



木の上でもニコリ 1993年2月 撮影：齋藤康一

をしていける

ようになりたいという気持ちになったのだけど、そう簡単にはなれるものじゃない。渡辺先生の事務所を辞めてからしばらくは建築写真をやっていたけど、やっぱり建築写真からは降りざるを得なかったですね。当時は、有名な建築雑誌もあったのですが、その雑誌には、もう高名な専門家が多数携わっていたのです。



作品「分身妖艶」より 撮影：木村恵一

■ 渡辺先生は怖かった、けど叱ることはしなかった。

—— 当時のアシスタント生活は、どんなでしたか？

木村:怖いというよりね、何ていうのかな？ 喋らない。教えてくれないので、それが一番怖かったかもしれない。

—— 見て習うしかない。

木村:もう1人、渡辺先生に写真学校卒業ではない助手さんがいて、この人はすごい技術を持っていました。仕事の手伝いは、その人が全部やっていて、僕が手伝うと、全部失敗になったりしていました。

—— 渡辺先生のアシスタント時代の一番の思い出は失敗ですか？

木村:今のようなカメラの無い時代です。撮影は、全部暗箱のカメラで撮って、フィルムはキャビネ判のシートフィルム。現像はその頃のセーフティライトがもの凄く暗くて、現像の進行具合がよく分らないのです。現像は2分くらいでやればいいものを20分くらいやり、真っ黒にしてしまったこともありまして。でも、先生はそういう時には怒らないのです。その時は一緒に撮影に出直し、そういう師匠でした。

—— 凄いですね。木村さんのその後は？

木村:大学の同期には、私のような東京の下町生まれという人間はいなかったのですが、先代協会の会長だった熊切圭介、APAの会長だった高村規、それからもう1人、卒業して講談社の出版部に就職した根岸透、これは後になって野上透という名前に変えましたけれど、彼らとは、しょっちゅう会ってはお酒を飲み、将来のことを話していました。

—— それで、木村さんは出版社の仕事をするように？

木村:東松照明さんとか、奈良原一高さん、田沼武能さんもいたかな？ そういった方々が華々しく写真界にデビューしたのを横目で見ながら、「俺たちも、あのくらいの写真を撮りたいな」と仲間と話して、小さな仕事を続けていました。そんな集まりにも、時どき田沼さんがいらっしゃって、ご自身の話をしてくれましたね。それから暫くして、「じゃ、俺たちも会を作ろうじゃないか」という話になりました。それは熊

編集部注1:1975(昭和50)年頃、日本大学芸術学部写真学科卒業の同期生6人(木村恵一、熊切圭介、齋藤康一、高村規、野上透、松本徳彦)で作られた会。6人のそれぞれ得意とする分野で写真展を開き写真集を発行。

切、野上、高村、齋藤康一、それから私の他に、もう1人、どういうわけか東京生まれではない松本徳彦、それでは会の名前を何にしよう？でも、良い名前が出て来ないのだね。じゃ、6人だから「六の会」（編集部注1：）でいいじゃないかと。そうやって、出発したのですね。

—— 最初の会の活動は？

木村：この頃は、ありがたいことに、あちこちに写真ギャラリーがあったので、半年に1回ぐらいグループ展をやって騒いでいましたよ。でも、「10人の眼」VIVO（編集部注2：）のような主張のある精度の高い写真展ではなかったですけどね（笑）。

—— 『江戸っ子』という本に携わったのは、その頃ですか？

木村：『江戸っ子』という本に関わるようになったのは、少し後からですよ。やはり、いろいろと動いている間に、講談社が幾つか雑誌を立ち上げた。そうして知り合った中に一人変わり者がいて、池田弥三郎というチャキチャキの江戸っ子なのですけど、この人が「雑誌を作ろう」といい出し、熊切と2人が引きずり込まれて、出来上がった雑誌が『江戸っ子』でした。

—— 『江戸っ子』という本は、東京の文化を紹介する心づもりで始められたのですか？

木村：そうです。この本は売るのではなく、銀座や浅草の名店に置いてもらい、読者に無料で配るということを考えていました。

■ K2 写真研究室を設立

—— 『江戸っ子』の仕事を通じて、東京の下町の職人さんとかに興味を持ったり、それがずっと続いているらしかったライフワークということになるわけですか？

木村：JPSには東京の下町、生まれ育ちというのは少なくね。逆にいえば、下町を撮る人間があまりいない。あまり人気のあるテーマじゃなくなったのかな。

—— さっき VIVO の話が出たのですけど、VIVO に限らず、当時木村さんが、この写真は凄いな、この写真家は凄いなと感じたことはありましたか？

木村：石元泰博さんの写真がありましたね。『桂離宮』という作品の優れた視点に、石元さんの写真の本質があったように思います。VIVO という集団はものすごく理論派で。当時の写真家の見本みたいなものでね。

—— やっぱ刺激されることはありましたか？

木村：いや、もう刺激されっ放しですよ。ちょうどその頃、日本の出版のブームがおき始めて、新刊誌がどんどんどんどん、もうすごく伸びていった。

—— 木村さんの経歴を見ると、講談社でお世話になったのに、1969年に『週刊ポスト』の創刊に関わっています。つまり、ライバルの側に回られた…

木村：その頃はね、自分たちも仕事が忙しくなって、

仕事の部屋が欲しくなっちゃった。そこで、熊切と2人で事務所を持つことになりました。名前は、熊切と木村のKをくっつけて「K2」としました。仕事は週刊誌が主流で、2人ともドキュメンタリーの写真を好んで撮っていたものですから、その頃ちょうど雑誌が増えてきて、私も『週刊現代』の巻頭のグラフを撮れるようになっていた。その時に、小学館が週刊誌を出すということになりましたね。『週刊現代』の編集長を引き抜いたのです。

—— 凄いですね。

木村：その編集長が僕に「新しい週刊誌を作るから来てくれ」といったので、行っちゃった。

—— その頃『週刊現代』で「企業最前線」という連載をお持ちでしたね。

木村：まだやっている最中です。昭和の頃は時代が良かったんだな。

—— 講談社の中では大変な騒ぎだったんじゃないですか？編集長が行っちゃうって。

木村：講談社の仕事をしている熊切と、小学館の仕事をしている木村が同じ事務所で一緒にいるという変な図式になっちゃった（笑）。その頃に、フリーの写真家が何をしてもしゃって行けるという形が出来上がったのではないのでしょうか？

—— その頃にはJPSの活動もなさってたのですか？

木村：熊切と一緒に、渡辺先生から「日本写真家協会」というものがあるのだから、そこに入って、少しは役に立つように」といわれたのです。

—— その頃はJPSの会員は何名くらいですか？

木村：190人？それくらいですかね。

—— 木村さんは、JPSの広報の仕事に長く携われてきたわけですが、それはやはり、ご自身が出版の仕事が好きだったからなのでしょう？

木村：会報の編集という仕事をやっているのと、いろいろな人と会うことができる。それが嬉しくてね。

—— 1981年に『FOCUS』の創刊スタッフに加わられたことは、今までの週刊誌と違う路線というか、かなり画期的なものだったのでは？

木村：やっぱりね、新しい仕事というものは、やってみたくなるもので、『週刊ポスト』では、一応創刊からグラビアの撮影をやっていたけれども、『週刊ポスト』が違う方向にだんだん行くようになり、週刊誌の仕事から離れよう、何か新しい仕事を始めようと思



K2 写真研究室で熊切圭介さんとツーショット 撮影：熊切大輔

編集部注2：1959年に写真家6人で、セルフエージェントを目指して有限会社「VIVO」を設立。主要メンバーは佐藤明、東松照明、奈良原一高、川田喜久治、丹野章、細江英公で、個々の作家性を重視しながらも、共同活動を通じて新しい写真表現を模索したグループ。1961年に解散。

ていた時に、今度は新潮社が写真の雑誌を出すという。新潮社の仕事はそれまでほとんどやったことがなか



ったので、新しい編集長が「実はこういう雑誌を作るので、写真のキャップになってくれないか」ということで、これは面白そうだったのです。

■ JPS 会報には外の空気を入れよ

——『週刊ポスト』が違った方向に行っちゃったというの？

木村：雑誌の性格を周りが変えちゃった。『FOCUS』は、いってみれば、今でいう特ダネみたいな特集を主にしていたから、後から出てきている週刊誌がみんなこれを真似して、トラブル続出ということになってしまいましたね。

——『FOCUS』は今までの週刊誌と全く違う切り口ですよ。撮影には、張り込みしたりとか、いろいろ大変だという話を聞いているんですけど、やっぱり最初から木村さんも、そういうことをやってらっしゃったんですか？

木村：面白かったね。人生の中で一番面白かった。『FOCUS』のスタートは、自分の写真生活の中で一番の盛り上がりだったね。

——じゃあもうほとんど家に帰れなかったとか？

木村：家には帰ったけど、明け方だね（笑）。

——月刊『文藝春秋』で、東名高速道路の工事現場を写したものがあつた、日本製鉄の工場などを撮影されていますね。職人さんの姿を撮ったものや、入れ墨の写真や、江戸の職人さんの細工の写真もあった。テーマが広いのは、ご自身の好奇心が旺盛だったからでしょうか？

木村：やっぱり新しいものが好きだから。のめり込む方だからね。本当は女の子の写真も撮りたかったけれど（笑）、そういう仕事は縁がなかったね。

——木村さんが長い経験を積まれてきて、いまの若いカメラマンに感じることは？

木村：物事に何でも興味を持って、写真を撮るということが、今の時代には少なくなっているのかな？何が面白いかが、あまり語られなくなったかな。

——木村さんは大学の講師も長く務められてきましたが、昔と今の学生の違いというのは感じられますか？

木村：今の時代、組織の中に入ってまで写真を続けようっていう気持ちのある人が、少なくなっているのではないですかね。組織の中に入ることが、やっぱり嫌いというか。

——それはよく聞きますよね。なんかすごく肩苦しくなっちゃうみたい。私たち JPS 自体も、いろいろ変わらなきゃいけない時期に来ているんですけど、JPS に対して何か、思われることがありますか？

木村：今回、久しぶりに会報を読んだのですが、面白くないなって思いましたね。それはなぜかという、誌面に、自分たちのことだけしか考えていないということが感じられるのです。他の組織の人、文化人、そういう方に執筆をお願いしたり、インタビューしたりするページがないのですね。これはね、雑誌を面白くさせるためには、絶対に必要なこと。何かいろいろな方に登場願って、読み物を作ってはどうか？それからもう1つ、もっと世界に向けて、目を広げた記事が欲しい。この二十年くらいの間に、戦争があり、コロナ禍が起り、そういう事象に読者が興味を抱くような、もっと何かの動きが起こるような、そのような記事を書いて欲しいですね。今は、ごく内々の人間だけの記事が続いている。それをこの辺で少し変えていかないと、これから会報を読んでもくれる人がますます少なくなっていくのじゃないかな？

——編集を始められた頃の会報記事を振り返ると、座談会にはいろいろな人が登場していますし、格調の高さを感じられることがあります。そういうものを見直していくつもりです。

木村：見直しはやらなきゃいけないことでしょう。今の会報は、他の世界との交流が乏しくなっているように感じます。誌面においても、常に他との交流があることが望ましいように思います。

——なるほど、ありがとうございます。木村さんの言葉を肝に銘じて、これからの会報を作っていきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

（構成／出版広報委員・池口英司、

撮影／出版広報委員・山縣 勉）

※「新・声のライブラリー」のインタビュー内容は動画でも記録しており、後日資料映像として公開する予定です。

木村恵一（きむら・けいいち）

1935年東京生まれ。1958年日本大学芸術学部写真学科卒業後、写真家渡辺義雄に師事。1960年フリーランスとなり、週刊誌、月刊誌を中心に作品を発表。1966～69年『週刊現代』連載、1969年『週刊ポスト』創刊スタッフ、1972年から『日本カメラ』誌テストレポート連載、1974～89年『江戸っ子』創刊より「江戸―東京伝統の文物」を連載。1983年『FOCUS』創刊スタッフなどで活躍。その間日本大学芸術学部写真学科、NHK学園等の講師を務める。

主な個展に「京の山・川・里」（東京、大阪ニコンサロン、1979）、「分身妖魔」（東京、大阪他のキャノンサロン、1987）、「北朝鮮」（キャノンサロン、1990）、「白州の水」（銀座富士フォトサロン、1992）等。

主な出版物は『京の山』、『京の川』、『京の里』（講談社）の三部作、『江戸職人』、『ウイスキー博物館』、『北朝鮮』等多数。1967年「企業の前線」で第8回講談社写真賞受賞。日本写真家協会名誉会員。

1961年日本写真家協会入会、『会報』の編集を20号（1968年）より147号（2012年）まで40年以上ご尽力された。

名誉会員の木村恵一さんが、2025年3月4日にお亡くなりになりました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。（編集部）

映画が描くフィルム写真へのロマン

鳥原 学 (写真評論家)

Toriyama Manabu

●アメリカの近未来をシミュレーションした「シビル・ウォー」

ふだん映画館に行けていないぶん、やっと年末年始にチェックしていた作品をまとめて観ることができた。私のような怠惰な人間にとって、配信サービスはほんとうに有難い。そのなかで印象に残ったのは、「シビル・ウォー アメリカ最後の日」と「PERFECT DAYS」の2作品。前者は苛烈な“戦場”を、後者は何気ない“日常”に起こるドラマを丁寧に描いたものだから、物語の方向性としては正反対といえる。ただ、いずれもフィルム写真が重要なキーになっているところが興味深かった。その描写の仕方には幾つか気になる点もあるが、それらを含めて、制作者たちのフィルム写真に対するロマンが見えてくるのである。

まず「シビル・ウォー」について、一言で表せば戦場を巡る“ロードムービー”ということになる。主人公の“リー”という女性のフォトジャーナリストを含む4人の取材チームが、悲惨な戦場を旅するのである。その筋立てはどこかベトナム戦争を舞台にした「地獄の黙示録」を思わせるが、こちらは内戦下のアメリカ合衆国であるという設定がきわめてユニークだ。劇中ではカリフォルニアとテキサスを含む19州が連合を組み、連邦政府に反旗を翻し、文字通り「Civil War (内戦)」に陥っているのである。戦闘や虐殺シーンを含めた暴力描写は極めて克明で、人の心に潜む悪意と偏見とが暴走するとどうなるかが見事に表現されている。これまで海外で同様の事態取材してきたアメリカのジャーナリストたちは、自国内で直面する事態に対して無力な当事者として巻き込まれていくのである。

だが暴力描写以上に怖いのは、こういう状況がじっさい起こるのではないかと思わせるからだ。

貧富の格差、政治信条に「シビル・ウォー」のポスター



よる反目、人種や不法移民などの諸問題で国民の分断が進むアメリカ社会の現状をリアルに浮かび上がらせているし、冒頭に登場する大統領の演説シーンなども現職のそれによく寄せている。本作は監督のアレックス・ガーランドが、政治学者バーバラ・F・ウォルターの著書『アメリカは内戦に向かうのか』（東洋経済新報社）から着想を得て企画したのだという。同書の警鐘を見事に、しかも皮肉をじゅうぶん効かせて近未来をシミュレーションして見せている。

●“写真家映画”というジャンルの変化

現在の状況を投影しているという点では、主人公のリーが“女性”という点でもそうだ。キルスティン・ダンストが熟演する彼女は、マグナムに最年少で参加するほど優秀な写真家であり、現在はロイター通信に所属するという設定である。これはじっさいにマグナムに最年少で加入したのが、イラン人のニューシャ・タバコリアンという女性の写真家だったという事実を反映しているのだろう。いずれにしても本作は、フォトジャーナリズムの歴史をジェンダー・スタディの視点から再評価しているという側面もある。

写真家を主人公とした作品は、シリアスなエンターテインメント映画の系譜に、ひとつのサブジャンルとして確立している。まだ記憶に新しいところとしては「ミナマタ」（2020年）などがあり、本号が出るころには深瀬昌久を浅野忠信が演じた「レイブンズ」が公開されているはずだ。

ここで注目したいのは、女性を主役にした作品が増えていることである。2010年以降を見ても「おやすみなさいを言いたくて」（2013年）や「カミュー」（2018年）などがある。なかでも個人的にぜひ見たいのが、リー・ミラーの軌跡を描いた「リー」（2023年）だ。ミラーは第二次世界大戦のヨーロッパ戦線に従軍取材して注目すべき写真を撮ったものの、戦後はその経験からPTSDに悩まされ続けたことで知られる。その葛藤をケイト・ウィンスレットが見事に演じていると、幾つかの外国メディアのレビューで評されていた。

じつはこの「シビル・ウォー」の主人公リーのキャラクターは、リー・ミラーをモデルに造形されている。

だから彼女もまた、内戦の様相が彼女の心に深い傷を刻んでいき、しだい迷いが生じ、レンズを向けることに恐怖を覚えていく。これまでの戦争取材で撮影してきた彼女が、今度は被写体となった人たちの苦しみを、戦争被害の当事者として実感するのである。その過程は、彼女がこれまでの取材で撮影した写真が繰り返し挿入されることで示される。

このリーに加え、本作にはやはり女性でカメラマン志望のジェシーが登場する。まだ23歳のジェシーはリーに憧れており、押し掛けるようにチームに参加、悲惨さに慣れるうちにプロとして成長していくのである。このベテランと新人の対比を、二人の使う機材が象徴している。リーはソニーのα7を2台使い、ジェシーは父から譲り受けたフィルムカメラ、ニコンFE2を手に入れているのである。

この点はさまざまな場面に対応してきたプロと、戦争取材で名を馳せたフォトグラファーに憧れているアマチュアの違いを象徴している。またフェイク画像がまん延しているデジタル時代を批判し、フォトジャーナリズムの原点がどこにあったのかを思い出させる。デジタルネットワークで素早くイメージを拡散するよりも、フィルムと印画紙という物質に眼前の事実を刻み、検証と議論のための記録として確かなものにしておく。そんな写真の社会的役割の重みをあらためて問うているように思えた。

とはいえ、ジェシーのFE2に最後までずっと同じ広角系の単焦点レンズがつけられていたのはどうかと思えた。劇中ではその一本で遠景を捉え、夜間撮影や連続撮影までもこなしているのだ。そこにフィルム写真に対するかなり過剰なロマンや、一歩間違えば神話化しているような危うさを感じてしまったのも事実である。

●セラピーとしてのフィルム写真

もう一本の「PERFECT DAYS」は、過酷な競争社会から距離を置いた初老男性の日々が丁寧に描かれている。カンヌ国際映画祭で役所広司が主演男優賞を獲ったこともあり、公開前からかなり注目された一本だった。

その役所が演じた公共トイレの清掃員である平山は、下町の古い木造アパートの一室に住み、規則正しい毎日を送っている。1960～70年代のアメリカンロックと読書、そして早風呂が彼のささやかな趣味だ。部屋には



「PERFECT DAYS」のポスター

家具も衣服も少なく、社会的にも家庭的にも大きな挫折を経るなかで、本当に好きなものだけを手元に残す

ことを決めたのだろう。女性に対しても深いかわりを避け、見守るだけの姿勢を貫いている。本作は爽やかな諦念が全編を貫いており、それは、ある種の男性的願望とも結びついているように思える。

そんな平山の日課のひとつが、公園で昼食をとっている合間に、モノクロフィルムを詰めたコンパクトカメラ（オリンパスのμ）で樹木を写すこと。だが、私の印象に残ったのはこの撮影ではなく、部屋でプリントを確認するほんの短いシーンである。仕上がった写真を一枚ずつ真剣に、しかし素早くチェックする。そして、気に入らないものはためらいなく破り捨て、良いと思ったものだけを四角い缶に放り込む。その缶は、押し入れの奥にしまわれるが、すでに同じ缶が何段にも積み重なっている。

このとき平山が選ぶのは、樹々が逆光のなかで揺らめくなか、一瞬だけ生まれる抽象造形である。それは繰り返し出てくる彼の夢と重なるイメージであり、写真を通して、失われた原風景的な記憶を呼び戻そうとしているように見える。そして、そのような写真を大量にストックしていくことは、無意識であってもセルフセラピー的な意味を持つことになるだろう。それはモノとしての写真が持つ効能のひとつであり、フィルム写真に対するロマンチズムの根源にあたる部分だともいえる。

このあたりの繊細な描写には、監督ヴィム・ヴェンダースの写真に対する深い愛情と理解とが表れている。ヴェンダース作品において写真の果たす役割は大きく、登場人物の感情や精神的な成長や、内面の発見に深く関わる重要なモチーフとなっていることが多



ヴィム・ヴェンダース監督

い。その理解は、写真家でもある彼が出版してきた写真集にもよく表れている。なかでも個人的には「バリ・テキサス」（1984年公開）の制作にあたって撮られた「Written In the West」をお勧めしたい。カラーネガを使ったウィリアム・エグルストンらのニューカラー派とは違い、コダクロームで撮られているため広大なアメリカ西部の風景が、クールに捉えられていて清々しい。20代の私に深く突き刺さり、写真という表現に関心を向かせた一冊であった。



「Written In the West」の表紙

スポーツ報道を通じて考えるデジタル化

～デジタル化から四半世紀の「今」～

小城崇史 (JPS 会員)

今や当たり前に使われているデジタルカメラだが、ほんの四半世紀前、その登場がまるで黒船襲来のごとく、大騒ぎになったことを覚えている人も少なくなったようだ。先日あるところで写真講師を務めたときも、多世代にわたる三十名超の受講者に「フィルムで写真を撮ったことのある人はいますか?」と尋ねたところ、誰ひとりとして手を上げなかったことに驚いた私だが、その一方でデジタルカメラの登場以来、ソリューション全体を俯瞰しながら取り組んできた立場ゆえに見えるものもあるのかなと感じながら、この一文をしたためている。立ち位置は一応「スポーツ報道」としたが、デジタル化は写真に限らず、世の中のあらゆるジャンルにおいて進行してきた事実を踏まえてご一読いただければ幸いだ。

■「親和性の高いジャンル」から進出した写真のデジタル化

写真術はその誕生から近代に至るまで、ケミカルと切っても切れない関係にあったが、その関係性をいとも簡単に破壊したのがデジタル技術だったことは論を挟む余地もないだろう。

写真のデジタル化は印刷のデジタル化によって引き起こされ、また即時性・速報性を求める特性上、デジタルと親和性の高い撮影ジャンルから普及していった。そう、デジタル技術の普及は速報性を求められるジャンル、すなわち報道分野から急激に進行し、その中でも商業コンテンツ化が急激に進んだスポーツ撮影のジャンルでは、瞬く間にフィルムを駆逐していった。

最初の頃は慣れ親しんだフィルム撮影では起こり得なかった諸問題もあったが、たゆまぬ技術革新の結果、2002年のFIFAワールドカップ(日韓共催)、2004年のオリンピックアテネ大会と国際大会が数を重ねるごとに写真撮影のデジタル化が進み、2012年のオリンピックロンドン大会では、遂にカメラにLAN端子が付くこと(つまりそれはカメラがネットワーク上の一機器となることを意味する)で撮影現場からリアルタイムで写真が配信される時代となった。

とはいっても実際には通信社・新聞社のサーバーと制作システムを経由しているのだが、それでも紙とフィルムで紙の媒体しか伝達手段がなかった時代を思えば、情報革命の度合いはかつてないほどの発展だったと断言しても過言ではないだろう。この頃から「写真=データの1ジャンル」という認識が急速に広まった



LAN端子が付いたデジタル一眼カメラ。キヤノンはEOS-1D Xから、ニコンはD4から(いずれも2012年発売)、遅れて参入したソニーもα1(2021年発売)からハイエンド機では当たり前の装備となった。

ように感じている。そして若い世代は写真(デジタルデータ)を送ることを「データ納品」と言い表すようになり、私も当然それを受け入れていたのだが、当時所属していたJPS出版広報委員会で会員に寄稿をお願いする際その文言を使ったところ「写真をデータとは何ごとだ」とお叱りをうけたことを思い出す。

■ デジタル化=データ化。その先にあったもの

しかし、あらゆるコンテンツがデジタル化された以上、写真もその中で流通するデータのひとつに過ぎないという事実は変わらないし、変えようもない。2012年のオリンピックロンドン大会で話題になったのは、試合会場の天井に据え付けたロボティックシステムを用いた遠隔撮影だった。そしてセンサー技術の進化によってイメージセンサーの小型化が実現した結果登場した、GO PROなどのアクションカメラやドローンによる写真・映像撮影は、それまで必要とされてきた大がかりな仕掛けを不要としたばかりでなく、写真撮影や映像制作といった専門職種への参入障壁を限りなく低くした。その結果待っていたのは「似たような写真・映像の氾濫」と、それに対する人々の意識の低下ではないだろうか。特に権利意識の希薄な人にとって、ネット上に氾濫する写真・映像は格好の「素材」となり、ネット上から集めた写真・映像を著作者の断りなく無断で使い構成された動画でページビュー(PV)を稼ぎ、収益を上げるといった行為もSNS上では当たり前の行為と化している。

昨今、スポーツの統括団体やチーム・クラブが既存のメディア報道に頼るのではなく、自らが情報発信元となって動画やウェブサイトを立ち上げる、いわゆるオウンドメ



2021年に開催された東京五輪。横浜スタジアムのバックネット裏に取り付けられたリモートカメラ。日本の電波法を遵守するため、全ての無線機器は大会組織委員会でも適合確認を行った。

ディアの流れが活発になってきたが、既存のマスコミ（最近はおールドメディアと呼ばれるようだ）と異なり厳しいコントロールがないのか、これらの発信を素材としたコン



試合会場、フォトグラファーエリアの様子。椅子の下にきているのが画像転送用のLANケーブル。

テンツは増える一方で、それを制御する仕組みもないまま推移しているように見受けられる。

■ ペーパーメディアの衰退以上に深刻な「こたつ記事」の氾濫

ペーパーメディアが衰退し、PV至上主義が言われるようになった影響を受けているのは写真だけではない。海外で活躍する日本人選手は増えたものの、現地に行かず、オウンドメディアの記事や他から配信された記事から関係のありそうなトピックを抜き出してリライトした「記事もどき」が氾濫していることをご存じだろうか。いわゆる「こたつ記事」と言われるものだが、ポータルサイトがPVの多い特定の記事を上位に表示するという仕組みを有しているため、現地に行かずにこたつ記事を量産する方が効率がいいと判断する会社も現実が増えてきている。一度でも現地取材を経験すれば「あそこのスタジアムにはこれくらいのカメラマンとライターしか入れない」とわかるので、似たような記事の大半は「これはこたつ記事だろう」と判断できるが、大多数の一般の読者がそのような事情を知る由もなく、そして大量に流通するコンテンツが「似たりよったり」であることが無関心の無限ループを描いているといったら言い過ぎだろうか。

■ デジタル化＝必ずしも幸せにはなれない？

このような、産業革命的な社会の構造変化は関係する人間に様々な影響を与える。この四半世紀を俯瞰してきて、デジタル化の当初はケミカルからの解放を「良かった」と感じていても、その後急激に進んだ外的変化が良いことばかりではないということも見えてきた。しかし、現実から目を背けているだけでは話は前に進まない。昔なら迷宮入りしていたであろう事件事故が可視化されたのは、映像技術の発展や解析技術の進歩によるところが大きいのは事実だし、写真術がデジタル化によって秘術ではなくなり、他ジャンルの知見を持つ専門家が参入することによって写真業界が活性化されたのも、中長期的視点から見たら好ましいことだと思う。つまり、どんなにテクノロジーが進歩しても「人間の視覚に訴える」メディアの強さは変わら

ない。

■ 人間の営みを伝えるのは人間

少し古い話になるが、2022年のFIFAワールドカップカタール大会で話題になった「三苦の1mm」という写真がある。強豪スペインを相手に2-1で逆転勝利を勝ち取った試合で、日本代表・三笥薫選手のライン上ギリギリでボールを止めた瞬間を捉えた写真だ。既に多くのメディアで記事化されているので概要をご存じの方も多いと思うが、この写真には相手GKや味方の選手の動きも写っており、誰もがひと目見て、状況を理解できる内容となっている。「なぜこんな写真が撮れたのか？」実際の撮影者ではない私に意見を求める人も多かったが、その答は常に一貫している。これは「予測して、狙っていたから撮れた」写真なのだ。更にいうならば「どんな選手がいてどんな試合展開になるか」を見通せないと撮れない写真でもある。風景写真家が気候や植生を調べるように、動物写真家が動物の行動特性を探るように「次に何が起きるのか」に備えるのがプロ写真家の特性であることを考えると、どんなに自動化が進んでも、人間でないと撮れない写真というものはあると感じる。

■ これから先、テクノロジーの進化とどう向き合うか？

どんなに優れた機材があっても、それを使うのは人間だ。あらゆる撮影術が自動化されたと言っても、スタートボタンを押さない限り機械は稼働してくれない。有史以来、これほど写真や映像が世の中にあふれた時代はないだろうが、これからはこんな時代だからこそ「残る写真」を突き詰めることが生き残りの鍵となってくるのではないだろうか。そのためには新しいテクノロジーを拒むのではなく、それをどう活用するかの道筋を早く見つけることが大切だと思う。写真のデジタル化が始まってから四半世紀の時間が流れ、もう劇的な進化はないと考えている人も多いようだが、あらゆる変化は少しずつ始まり、気が付いたら当たり前になっていたという歴史を繰り返しているのが人類の常だ。現状は限りなく惨状に近くても、それをどう変えていくのかは私たちの行動にかかっているのだ。

(文中写真は筆者撮影)



小城崇史(こじょう・たかふみ)
東京都世田谷区出身。1996年より国内外のスポーツシーンを撮影し続け、Jリーグ・Bリーグのクラブオフィシャルフォトグラファーを務める一方、2021年開催の東京オリンピック・パラリンピックでは組織委員会フォトマネージャーとして活動。現在もスポーツの現場に立ち続ける一方で、作家活動においてはスポーツ、古典芸能・Cityscapeをテーマとした個展を開催。一般社団法人日本スポーツプレス協会(AJPS)理事、カメラグランプリ 特別選考委員(2024～25)。

写真著作権と生成 AI 画像の現状を考える

吉川信之 (理事・著作権担当)

生成 AI 画像が社会の大きな関心事となっており、2 年が過ぎました。一見ただけでは写真と区別が難しい生成 AI 画像がインターネット上に氾濫したことは衝撃的でした。日本写真家協会は 2023 年 8 月 23 日に声明「生成 AI 画像についてその考え方の提言」で公表当時の懸念を表明しました。その後、写真だけでなくテキストや音声動画など複数のデータを一度に処理できるマルチモーダル化も進み常に変化しています。現在の写真著作権と生成 AI 問題と現状について写真家の立場から整理してみたいと思います。(著作権委員会)

■ JPS が生成 AI に対する声明を公表

日本写真家協会では声明「生成 AI 画像についてその考え方の提言 (2023 年 8 月 23 日)」で、写真家の立場から生成 AI 技術に対する懸念を表明しました。

視覚的には写真と区別できないような生成 AI 画像が高度なスキルなしに生成できてしまうことをどう考えるか。写真には被写体の存在が必要で、写真を見るときには写っている被写体や光景が現実存在したということが前提になります。

フランスのニセフォール・ニエプスが「現存する世界最古の写真」を撮影したとされるのが、いまから二百年前の 1825 年。それ以来、写真はこの約束のもとで鑑賞されてきました。

報道写真は写真の光景が実際に存在したという約束の上に成り立っている表現ですが、生成 AI 技術を使えば被写体が存在しない画像を作ることが可能になってしまいます。実際に存在しない、著名人のスキャンダルや災害現場の光景などのいわゆるディープフェイクが簡単に作成されるようになりました。

当初、生成 AI 技術で作成した画像は不自然なものが多かったのですが、技術の進歩は早いもの。日々、画像からの判断が難しくなっています。JPS では、写真家が積極的に撮影者名を記載して、写真であることを明示することを呼びかけています。

著作権法の問題もあります。現在の著作権法は 1971 年に施行されたもので、当時は生成 AI 技術の問題などは考慮されていません。既存の著作物 (原著物) をもとに新たな著作物 (二次的著作物) を作成することを翻案と呼び、原著作者は二次的著作物に対して同じ種類の権利を持つとされています。しかし、このルールは人間による作業が前提です。人間と違って思想や感情を持たず、疲れることもないコンピュータは連続して作業し続けることも可能。生成 AI 技術の使用が適正にコントロールされなければ写真家の著作権をはじめとする著作権や被写体の肖像権、その他の知的財産権などが損なわれ、権利へのフリーライドの発生などが懸念されます。あらゆるプロフェッショナ

ルによるクリエイティブの再生産を維持するためにも、生成 AI 技術に対して著作者の権利を保護するルールづくりが重要なのです。

■ 著作権法では学習と利用を分けて考える

著作権法ではどのように解釈されているのでしょうか。文化庁著作権課は「AI と著作権に関する考え方について (2024 年 4 月、以下「考え方」)」という文書を公開しています。著作権法では「著作権等の権利の保護」と「著作物等の公正・円滑な利用とのバランスを図り、もって文化の発展に寄与する」ことを目的としています。著作者等の権利の保護を図ることがこの法律の一番重要な目的となりますが、権利を大きく害さない部分においては、公正・円滑な利用を促進するために、権利者の承諾なしに著作物を利用できる除外規定が設定されています。

生成 AI 技術に関わる除外規定としては「当該著作物に表現された思想又は感情を自ら享受し又は他人に享受させることを目的としない場合には、その必要と認められる限度において、いずれの方法によるかを問わず、利用することができる。(中略) 当該著作物の種類及び用途並びに当該利用の態様に照らし著作権者の利益を不当に害することとなる場合は、この限りでない。(著作権法 30 条 4)」。

著作物の価値とは著作者によって表現された思想や感情を鑑賞することなので、思想や感情を鑑賞できない機械だけが使用することは著作者などの権利を損なわないとしています。これは、ビデオデッキなどの映像機械の開発や AI ソフトの機械学習 (ディープラーニング) などのために整備されたもので、生成 AI 画像の登場までは大きな影響はありませんでした。

「考え方」では「AI 開発・学習段階」と「生成・利用段階」を著作物の利用行為が異なるため分けて考える必要があるとしています。

AI 開発・学習段階とは AI に基礎的な学習をさせるための行為で、著作物を学習用データとして収集・複製し学習用データセットを作成したり、データセットを学習に利用して AI モデルを開発すること。具体

的には赤い球体の画像をくりかえし学習させて AI にリングと認識させる作業です。AI はリングの属性を学習しているだけで、その画像の表現を鑑賞しているのではないため「非享受目的」となり、自由に使用することができます。

対して、生成・利用段階とは AI を利用して画像などを作成し、生成した画像を Web などにアップロードしたり、複製物（印刷物など）を販売することなど。

こちらは既存のリングの写真をもとに生成 AI 技術で画像を生成させること。この場合、生成物が人目に触れれば「享受目的」と判断され、除外規定は適用されません。利用目的の中に 1 つでも「享受目的」が含まれている場合には除外規定は適用できません。

このように説明すると区別は明確なようですが、実務の場で学習段階と利用段階を明確に分けて考えることができるのか？が大きな疑問です。

著作物の作風の問題もあります。従来から著作権法の保護対象は表現された「もの」であるとされていて、著作物の作風やアイデアは対象になりません。

しかし「考え方」では、意図的に、創作的表現の全部又は一部を生成 AI によって出力させることを目的として使用した場合には、享受目的が併存すると考えられるとも説明しています。重要なポイントです。

■グレーゾーンが多い生成 AI 画像の定義

2023 年に生成 AI 画像が社会に氾濫し始めた当初、写真と AI で生成された画像は別なものであり、人間のように「思想や感情を持たない」AI が作成した画像に著作権は発生しないという考えが中心でした。AI 生成物には創作的寄与が生じないという判断です。しかし、現在では、その区別が曖昧になってきています。「考え方」で「AI は法的な人格を有しないので著作者には該当しないが、人間が生成 AI に対して創作的寄与が認められるような指示を行って AI 技術を用いた場合には著作物性が認められる」としています。その人間による寄与とは作業の労力の積み重ねや単なるアイデアではなく、人間による創作的な寄与が認められることが必要になります。「生成物を確認し指示・入力を修正しつつ試行を繰り返すといった場合」に該当するという説明です。

フォトショップなどの画像編集ソフトに生成 AI 技術が多く使われるようになってきたことも大きな変化です。写真の背景を延長する、範囲選択した部分を生成 AI で塗りつぶす、ノイズの除去、解像度の上昇など。写真に写り込んだ電線や人物を AI が自動検出して自動で消去するという機能も出現しています。

背景を延長したり、選択範囲を塗りつぶしたりという作業が生成 AI による加工であることは明白ですが、電線や不用物をレタッチすることは、従来は人間が手作業で行っていたもの。しかし、生成 AI を使用したソフトは専門のスキルを必要とせず、瞬時に作業を終えてしまいます。写真家がこのような機能を使

って背景を加工した場合には、出来上がった写真は実際の風景とは違うものになっているということを自覚することが必要でしょう。

また、高画素化やノイズ除去の機能はソフト上で展開したファイルから、AI ソフトが新たな写真ファイルを生成し直す作業になることもあります。これをどう考えれば良いのか？人間の目では生成 AI ソフトの中で何が起きているのかということは判断できません。完全にブラックボックスです。

■ SNS の規約にも注意

写真の公表手段として、インターネットメディアは欠かせないものとなりました。しかし、SNS の使用には注意が必要となりました。

多くのインターネットメディアでは SNS を運営する巨大プラットフォーム企業が、ユーザーが投稿した著作物を生成 AI 技術に利用していくとアナウンスしています。たとえば、次のような SNS の規約があります。「コンテンツをシェア、投稿またはアップロードする場合、利用者は、弊社が利用者のコンテンツを使用、配信、変更、実行、複製、実行、表示、翻案、およびその派生的著作物の作成を行う非独占的、譲渡可能、サブライセンス可能、使用料無料、かつ、全世界を対象としたライセンスを弊社に付与するものとします」

SNS のアカウントを作るためには規約への合意が必要なので、アップロードした写真はこの規約で運用されます。運営会社が生成 AI に使用することは「翻案」であり、生成物や読み込んだ内容（派生的著作物）を第三者に提供（サブライセンス）することも可能となってしまいます。ブログやホームページなどの写真を公表した場合、第三者による使用は著作権法の除外規定の範囲に限られますが、写真家がこの規約を承諾していれば SNS 運営会社は無条件で生成 AI 技術への著作物の使用が可能となってしまいます。

対策として「オプトアウト」という方法が紹介されることがあります。AI トレーニングへの個人情報などのデータ取得を拒否する仕組みですが、個人情報のトラブルに限られ、アップロードした写真の著作権保護に活用できる制度ではないようです。

著作権にかかわる契約は当事者が納得していればその内容は自由。アカウント作成時に「規約に同意する」というボタンをクリックすれば契約は成立してしまいます。しかし、内容を十分に精査せずに使っている方が多いのが実情です。規約の内容をしっかりと読み、理解した上で使用することが大切です。

SNS は社会の中で重要なメディアとなっており、使用のメリットも大きいことは事実。しかし、著作権上のリスクも増大していることを自覚する必要があります。インターネット黎明期に言われた「大切な写真は安易にアップロードしてはいけない」という戒めは、今後、さらに重要になっていくことでしょう。

リコーイメージング

フィルムコンパクトカメラ PENTAX 17

・たくさん撮れるハーフサイズフォーマット採用

PENTAX 17はフィルムを左から右へ送るためハーフサイズフォーマットの仕組み上、カメラをそのまま構えたときに縦位置構図の写真になります。日常的に撮影しているスマートフォンも縦位置構図のため、同じ感覚で撮影出来ます。

・被写体との距離に応じて設定を切り替

えるゾーンフォーカス

近距離から遠距離まで、被写体との距離を6つのゾーンに区切りアイコンで表示しています。被写体に応じたアイコンを選択して撮影を行います。

・画質にこだわった単焦点レンズ

焦点距離 25mm (35ミリ判換算 37mm)



相当) F3.5の単焦点レンズ。ハーフサイズフォーマットだからこそ画質にこだわり、一眼レフレンズでも定評のあるHDコーティングを採用。クリアでシャープな描写を実現しています。

【問い合わせ先】

リコーイメージング株式会社

・電話での問い合わせ

お客様相談センター

TEL:0570-001313 営業時間

10:00~17:00

・インターネットからの問い合わせ

https://webform.ricoh.com/form/pub/e00016/rim_inq

キヤノンマーケティング ジャパン

新たな撮影領域、映像表現を 切り拓く、EOS R5 Mark II

EOS R5 Mark IIは、EOS R5 (2020年7月発売)の後継機です。新開発の約4,500万画素フルサイズ裏面照射積層センサーを搭載し、連写性能はAF/AE追従で最高約30コマ/秒を実現。デュアルピクセル Intelligent AFにより、ディープラーニング技術を活用した優れたAFトラッキングを可能にし、特定のスポーツの撮影シーンで主被写

体をカメラが認識するアクション優先AFも搭載。これまで追いきれなかった被写体の動きを高速に解析し、AFします。

また、カメラ内アップスケーリングにより、撮影後、縦横の画素数をそれぞれ2倍、全画素数を4倍に変換し、約1億7900



万画素まで画像の拡大が可能。作品展などの大判出力にも対応できます (JPEG / HEIF 画像)。

EOS R5 Mark IIは、静物から動体、静止画から動画まで幅広い撮影ジャンルをカバーし、プロの皆様にもふさわしい操作性と信頼性を兼ね備えたオールラウンダーなカメラとしてご使用いただけます。

【問い合わせ先】

キヤノンマーケティングジャパン株式会社

イメージングカルチャー推進課

TEL:03-3542-1831 <https://canon.jp/>

光邦

CMYK 変換プロファイル 「Chiarossier」を導入

印刷物の製版・印刷から製本・加工、納品業務までを請け負う総合印刷会社です。これまで書籍やパンフレットなど、多種多様な印刷物を製作してまいりました。

この度東洋インキ開発の高彩度CMYK変換プロファイル「Chiarossier (キャロシエ)」を導入しました。標準的な変換プロファイルと比べ、RGBデータをより

高彩度のCMYKデータに変換することができます。弊社では画像を鮮やかに印刷することが求められる印刷物にChiarossierを活用しております (画像はChiarossierを使って印刷を行った書籍です)。

「特色インクを使わない高彩度印刷」・「校正回数とレタッチ時間削減」など費用面や時間面での効果が期待できる他、Chiarossierで



変換処理を行い印刷された画像は通常の印刷画像と比べ白内障の方が色の識別をしやすいという実験結果も出ております。

Chiarossierを用いた印刷や写真集の制作にご興味がありましたら、是非一度お問合せください。紙の選定からご要望を伺い、理想の本作りをお手伝いいたします。

【問い合わせ先】

株式会社光邦 営業部 森崎

TEL : 03-3265-0612

FAX : 03-3264-4035

e-mail : morisaki-c@kohocome.co.jp

URL : <https://www.kohocome.co.jp>

富士フイルム

フジノンレンズXF16-55mmF2.8 R LM WR IIのご紹介

広角16mm (35mm判換算: 24mm相当) から中望遠55mm (35mm判換算: 84mm相当) のズーム全域を開放絞り値F2.8の明るさで撮影できる大口徑標準ズームレンズです。高い描写力を生かした自然や風景の撮影や、滑らかで美しい後ボケを生かしたポートレートなど幅広いジャンルの静止画撮影に対応します。また、質量約410gの軽量設計と動画撮影を

サポートする新機能により、「XFレンズ」による映像表現の幅を広げます。ズーム全域で最短撮影距離0.3mを実現。最大撮影倍率0.21倍の近接撮影が可能です。

「絞りクリックスイッチ」を採用し、スイッチをONにすると、絞りを動かした量を直感的に把握しやすく静止



画撮影に最適です。またOFFにすると、絞り操作時の明るさの変化を滑らかにし、よりスムーズな操作感を実現。快適に動画を撮影できます。

【製品URL】

<https://fujifilm-x.com/ja-jp/products/lenses/xf16-55mmf28-r-lm-wr-ii/>

【お問合せ先】

富士フイルムイメージングシステムズ株式会社 コンシューマー事業本部 事業推進本部カメラ事業部 デジタルカメラグループ 沖 浩志 hiroshi.oki@fujifilm.com

ライカカメラジャパン

ライカの新製品、フルサイズミラーレスシステムカメラ「ライカ SL3-S」

2024年に登場した「ライカ SL3」は、卓越したクオリティと描写性能を誇り、ライカ独自のユーザーインターフェースによって使いやすさの新たな基準となりました。そしてこのたび、高速性能と柔軟性を両立させたミラーレス一眼「ライカ SL3-S」が発売されました。写真と動画のいずれにおいても最高水準の画質が得られ、最適な操作スピー

ドと信頼性を兼ね備えたカメラとなりました。プロフェッショナルの映像コンテンツ制作ワークフローにふさわしい新機能も多数追加しています。このカメラの中核をなすのは、新開発の2400万画素・35mmフルサイズ裏面照射型CMOSセンサー、4800万画素および9600万画素相当で



の撮影が可能なマルチショットモード、そして最新世代の位相差 AF、デプスマップ（物体認識）AF、コントラスト AF という3種類の検出方式のメリットを融合させたオートフォーカスシステムです。それにより最大30コマ/秒の連続撮影が可能となりました。SLシリーズでは初めてのコンテンツクリエイショナル機能も搭載しています。

【問い合わせ先】

ライカカスタマーケア
0570-055-844(ナビダイヤル)

ブルージェイ

株式会社ブルージェイ(山ノ手写真事業部)がギャラリーをオープン。 繁殖あづさ写真展を開催

Gallery Focus (ギャラリー・フォーカス)は株式会社ブルージェイ(山ノ手写真事業部)が運営するギャラリー(レンタルおよび自主企画)です。壁面は10メートル弱と小さな規模ですが、写真、イラストレーションなどの展示やワークショップを通じて、芸術のあり方を考える様々な人の交流や「も

のづくり」を間近に感じられる場であることを目指します。また国連によって制定された「国際女性デー」に賛同して、Happy Woman を応援しております。

記念すべきオープニングは、3月29日から4月26日まで「繁殖あづさ写真展」。繁殖さんは長崎にてライフワークである出産や



狩猟に関する撮影や執筆に取り組んでいる写真家です。その中でも出産をテーマに、出産される女性だけではなく、赤ちゃん、家族、また支える医療関係者の方々を見つめ続けてきた写真家が捉えた「命の感触」をご覧いただきます。

【問い合わせ先】

Gallery Focus (株式会社ブルージェイ内)
東京都千代田区一番町 27-2 理工図書ビル5階
開館時間：10:00～18:00(日、月、祝定休)
TEL03-6261-6861 FAX03-6261-6862
info@yamanotephoto.jp

Nextorage

次世代パフォーマンスで新たな高みへ CFexpress 4.0 メモリーカード

次世代規格のCFexpress 4.0に対応し、高速連写や高精細な動画撮影に必要な仕様を備えるNX-B2PROシリーズ。撮影から取り込み、編集までのプロセスにおいて、かつてないパフォーマンスを発揮し、効率のよいスムーズなワークフローを実現します。

・クラス最高レベルの高速書き込み・高速読み出し性能

このクラス最高レベルの性能により、RAW画質での高速連写から8K動画撮影まで、あらゆる撮影シーンに安定したパフォーマンスを発揮します。また、撮影後のデータ転送や編集作業においても、高容量データの転送時間を飛躍的に短縮し、ワークフロー効率を向上させ



ます。

・動画撮影をさらに安定させる、独自の低消費電力技術

Nextorage 独自の低消費電力技術「Dynamic Auto Power Save」を搭載。動画撮影における電力消費とカードの温度上昇を効果的に抑制。

【問い合わせ先】

Nextorage 株式会社
PDM2 部 イメージングセール&マーケティング課 木村 仁
TEL：050-3505-8182
E-mail：Hitoshi.Kimura@nextorage.jp
URL：www.Nextorage.net

浅沼商会

「シューベースにパン機構を備えた カーボン三脚 Fotopro X-AIRFLY シリーズ」

Fotopro X-AIRFLY MAXはシューベースにパン機構を備えたボールヘッドに高品質な3Kカーボンファイバーを使用した脚でパイプ径28mmの4段で収納時はコンパクトながら伸長166cmと十分な高さを確保しました。センターポールを取り外すことで最低高14cmからの撮影も可能。グリップ

のついた脚は取り外して一脚としての使用も出来ます。X-AIRFLYはパイプ径25mmの5段カーボン三脚で更にコンパクトさを追求しながら伸長160cmの高さも確保しました。



この度、JPS会員の皆様に向けてアサヌマネットショップ (<https://www.asanumashoukai.co.jp/c/store>) で使える30%OFFクーポン(クーポンコード「JPS」)をご用意しました。是非、当社取扱商品をお試しください。

【問い合わせ先】

株式会社浅沼商会
イメージング事業部 商品部 山岡
E-Mail:info@asanuma1871.jp
URL:<https://www.asanumashoukai.co.jp/>

2024 年第 19 回「名取洋之助写真賞」決まる

公益社団法人日本写真家協会は、新進写真家の発掘と活動を奨励するために、主としてドキュメンタリー分野で活躍している 40 歳までの写真家を対象とした「名取洋之助写真賞」を設けている。2024 年第 19 回目の選考を、山田健太（専修大学教授）、清水哲朗（写真家・JPS 会員）、熊切大輔（写真家・JPS 会長）の三氏によって行い、受賞者を決定した。応募は、1 組 30 枚の組写真の作品で、今回はプロ写真家から在学中の大学生までの 21 名 21 作品。男性 17 人、女性 4 人。カラー 16 作品、モノクロ 3 作品、モノクロ・カラー混合 2 作品があった。最終協議の結果「名取洋之助写真賞」は藤原昇平「東京オアシス」、「名取洋之助写真賞奨励賞」は星野 藍「赤き星が落ちた世界 ソビエト連邦崩壊の残響」に決定した。



選考風景 写真左から清水哲朗、熊切大輔、山田健太の各氏
撮影／企画委員：齋藤小弥太

○最終選考候補者

- ・manami tanaka「何でもない光」
- ・星野 藍「赤き星が落ちた世界 ソビエト連邦崩壊の残響」
- ・番匠 健太「PASHMINA」
- ・May「HOME and HOPE ～ミャンマー避難民の村～」
- ・藤原 昇平「東京オアシス」
- ・ジェイムス・オザワ「山歌 - Sanka -」
- ・山下 裕「続いていく日常」
- ・五十嵐 丈「ある集落の遺影」

■ 2024 年 第 19 回「名取洋之助写真賞」受賞



藤原 昇平（ふじわら・しょうへい） 1987 年 京都府生まれ。37 歳。

2012 年 立教大学社会学部卒業。2013 年から 2018 年まで、神戸新聞社にて記者として勤務。2018 年 同社退職後、日本写真芸術専門学校でドキュメンタリー写真を学ぶも中退。現在、会社員として働きながら、写真制作をライフワークとして続けている。2019 年『週刊文春』6 月 13 日号に「戸山ハイツ」のルポを寄稿。同年 10 月及び 11 月、銀座ニコンサロン、大阪ニコンサロンで「東京オアシス」の個展を開催。東京都在住。

受賞作品 「東京オアシス」（カラー 30 枚）

作品について 東京都新宿区にある老朽化したマンモス団地である都営住宅「戸山ハイツ」は、鉄筋コンクリート造りの 35 棟に約 3,300 世帯 5,600 人が暮らしている。高齢化率は 56% で「都会の限界集落」としてメディアでも取り上げられるため、住民たちは取材を歓迎しない。2018 年春、はじめて団地を訪ねた時は、断られ続けたが、部屋の外でポートレート写真を撮ってプレゼントし続けることで、次第に取材を許されるようになり、住民たち

の井戸端会議などにも参加するようになった。新型コロナウイルス感染症の蔓延により、住民たちの環境は変化したが、近所付き合いや助け合いは続いている。この団地には時代が移り変わっても変わらずに在り続けるものがあることを伝えた作品。

受賞者のことば

「名取洋之助写真賞」を受賞し、大変光栄に思います。2018 年から都営住宅「戸山ハイツ」に通い続け、コロナ禍で撮影が困難な時期もありましたが、住民の皆様は常に温かく迎え入れてくれました。高齢化が進む日本の縮図である戸山ハイツは、メディアではネガティブに描かれることが多いですが、ポジティブな視点で捉えることは若い世代に「希望」をもたらす重要な意味があると考えています。歳を重ねることを前向きに受け入れる社会を願い、今後も撮影を続けていきます。

■ 2024 年 第 19 回「名取洋之助写真賞奨励賞」受賞



星野 藍（ほしの・あい） 福島県生まれ。

デザイナー・アートディレクターの会社員として勤務するかたわら、旧ソ連構成国、旧ユーゴスラビア構成国など、旧共産圏の痕跡を主に写真として残している。APA アワード 2024 金九重嶺賞受賞。著書として『旧共産遺産』『未承認国家アブハジア』『幽幻廃墟』などがある。

受賞作品 「赤き星が落ちた世界 ソビエト連邦崩壊の残響」（カラー 30 枚）

作品について 従姉の自死をきっかけに日本中の廃墟写真を撮り始めた。廃墟に感じた感覚は従姉の死と強く重なった。私的備忘録の写真が、2011 年 3 月の東日本大震災で流転した。故郷福島がかつてのチェルノブイリのような廃墟の街になってしまうかもしれない、と当事者意識の感情を抱き 2013 年 11 月、実際に渡航。旧ソ連各地に残る「失われたユートピア」に興味を抱き、強く引きつけられた。多くの人が希望を抱いた共産主義も終わり、叶わぬ楽園の見た夢の跡、赤き恒星の終焉は廃墟として残された。廃墟とは物言わぬからこそ雄弁に現実を語り、時として人間より饒舌だ。「廃墟とは、無機物の群像劇である」との思いで撮った作品。

受賞者のことば

この度は「名取洋之助写真賞奨励賞」を受賞できたこと嬉しく思います。極東島国では目にすることができない旧ソ連各地に残る「失われたユートピア」に興味を抱き、強く引きつけられ気が付けば十年以上が経ちました。廃墟とは物言わぬからこそ雄弁に現実を語り、時としてそれは人間よりも饒舌であると感じます。そして一人一人がそれぞれのドラマを持つ無機物の群像劇のようにも見えます。好奇心がついえぬ限り私の旅は続くでしょう。

2024 年 第 19 回「名取洋之助写真賞」総評

熊切 大輔(写真家・公益社団法人日本写真家協会 会長)

今回応募作品は 21 名 21 作品の応募と昨年を大きく上回り、ドキュメンタリーに取り組む若い写真作家の新たな、そして力強い息吹を実感することが出来た。

その作品テーマ、表現手法もバラエティーに富んでおり、多様化した現代社会の縮図がそこに現れているようであった。そんな力作ぞろいの作品のなかで光っていたのが藤原昇平さんの作品「東京オアシス」だった。東京新宿という都会のど真ん中にある巨大な都営団地。昭和の高度成長期に建てられた団地群は限界集落と化しており、これは日本全体でも起きており、今まさに静かに直面する大きな社会問題でもある。それを淡々と、しかし人間味あふれる切り撮りで人々の暮らしをいきいきと描いている。どこか寂しく、しかしほっこりとした空気感を写し出しているのは、撮影者と被写体の絶妙な距離感がなせる技なのではないだろうか。

奨励賞は星野藍さんの作品「赤き星が落ちた世界 ソビエト連邦の残響」になった。昨今廃墟を被写体とするケースが増えている。しかしソビエト連邦が残した廃墟は規模が違う。理想国家の終焉というスケールの大きさをその構造美をいかして見事に表現できている。

廃墟の喪失感は撮影者の苦難の体験と重なり、空虚な心の内が垣間見える。

対象的な 2 作品だがそれぞれ力強く、心に残る作品になったのではないだろうか。

清水 哲朗(写真家・公益社団法人日本写真家協会 会員)

30 枚組と枚数設定のある本賞は応募者皆同じ条件だけに「取材力・写真力・構成力」の差が結果に表れやすい。被写体や土地、情勢の変化は長年迫る人ほど有利に表現できる。

名取洋之助写真賞の藤原昇平「東京オアシス」は取材拒否の壁を泥臭い訪問と丁寧な交流を繰り返すことで受け入れてもらった渾身作。2019 年の個展発表作品をベースに新作を交えて再構成したことで深みが出



た。高齢化の進む都営住宅は悲劇も少なくないが、そこを主題とせず、個の集合体である団地の適度な距離感を保ちつつ行う互助と住民の人物像を淡々とキャプション付きで描いたのが心に響いた。奨励賞の星野藍「赤き星が落ちた世界 ソビエト連邦崩壊の残響」はシリーズで撮り続けている揺るぎない視点、安定感、写真力が評価につながった。ただ、撮影意図の従姉の死が廃墟に目を向けるきっかけはわかったが、福島出身の作者が東日本大震災を機にチェルノブイリに渡航し、その後の視点につながったという本質は作品や構成からは伝わらなかった。今後、本質が表現に反映されることを期待したい。選外にはモノクロにした意味が伝わりにくいもの、仕上げる悪さで損をしたもの、もう少し時間をかけたら高評価になりそうなものもあった。あきらめず再挑戦して欲しい。

山田 健太(専修大学教授)

応募点数が前年比で 1.5 倍、35 歳以下応募者数は昨年に比べ 2 倍近く増えたことを、素直に喜ぶたい。とりわけ今年は、戦争が止まない時代状況や国内外で進む格差・分断に、若い世代がどう向き合っているかが気になった。ドキュメンタリー・フォトがジャーナリズムの重要な一翼を担うとするならば、戦争をさせない、弱者の立場に立つといった基本的姿勢をどう写し込んでいるかということになる。そうしたなか、名取賞の作品は高齢化社会の実相を温かい眼差しで捉えたもので、応募者の優しさが伝わり、組み写真の特徴をうまくいかした秀作だった。

一方で奨励賞は、1 枚 1 枚の写真が絵になる力強い完成された作品群であるものの、作者の東日本大震災の思いがどう写真と結びつくのかは疑問が残った。

受賞作以外にも屋久島、義手、限界集落、ミャンマーなど挑戦的な力作がそろったが、扱い方が平板であって切り口を工夫するなど、もっと訴求力をアップする手立てが残されていると思う。戦地に赴く意思は高く評価するものの、「現場」は国内の身近なところにも数多くあり、さらに撮り手の「新しい発見」と「時代を見る眼」に期待したい。



「名取洋之助写真賞」について

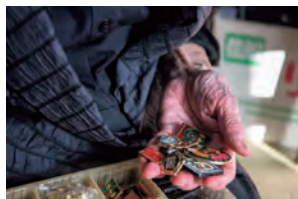
公益社団法人日本写真家協会 (JPS) は、社会に貢献する事業として「JPS 展」や「日本写真家協会賞」「笹本恒子写真賞」の表彰並びに顕彰を行っています。新進写真家の発掘と活動を奨励するために 2005 年に「名取洋之助写真賞」を創設しました。

名取氏は、1950 年の JPS 創立初期から写真企画展への助言、更に写真著作権の重要性を進言されるなど、さまざまな面で協力をいただきました。没後、名取洋之助が関わった日本工房、サンニュース、岩波写真文庫の創設に関してわが国のフォトジャーナリズムの発展に大きく貢献されたことを顕彰し、40 歳までの写真家を対象に公募しています。

●名取洋之助 (1910～62 年) ドイツに留学していた名取洋之助は 23 歳の若さで、1930 年代ヨーロッパで勃興していたフォト・ルポルタージュをわが国に導入し、木村伊兵衛と 33 年「日本工房」を興す。その後、土門 拳、藤本四八、亀倉雄策らと『NIPPON』を創刊し、フォト・ジャーナリズムを確立する。戦後は 47 年に『週刊サン・ニュース』を創刊。50 年に『岩波写真文庫』を創るなど、写真家であると同時にすぐれた企画、編集者でもありました。

2024年 第19回名取洋之助写真賞

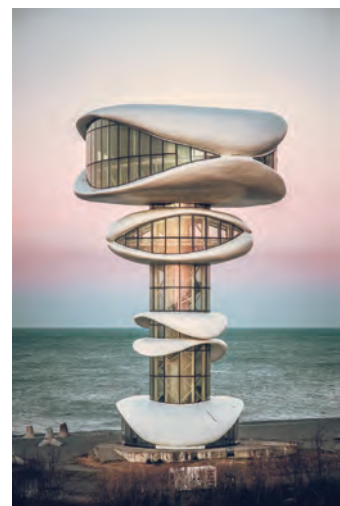
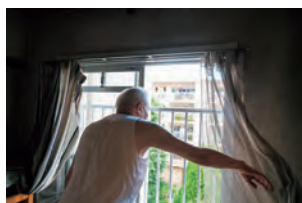
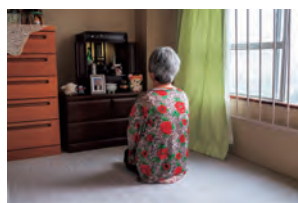
藤原 昇平 「東京オアシス」 (カラー 30 枚)



2024年 第19回名取洋之助写真奨励賞

星野 藍 「赤き星が落ちた世界 ソビエト連邦崩壊の残響」 (カラー 30 枚)





第18回 JPS フォトフォーラム

(2024年11月9日(土): 東京都写真美術館 1階ホール)

主催: 公益社団法人 日本写真家協会

今回のテーマ:

「記録、伝える、その先に見えるもの — ある大地の物語」

2024年11月9日(土)10時30分より午前の部、午後の部の2回に分かれて「JPS フォトフォーラム」を東京・恵比寿の東京都写真美術館で参加者合計188名で開催した。

JPS がフォトフォーラムを催すきっかけは、デジタルによる写真が急速に普及した時代に「写真が持つ力とはなにか、写真でしかなしえない記録、表現、創造とはなにか」について深く考えることだった。第1回目は、2007年に朝日新聞社との共催で有楽町朝日ホールで「写真力ってなんだ」をテーマに開いた。最前線で活躍している篠山紀信、中村征夫、田沼武能の写真家と作家の立松和平氏に語っていただいた。その後、2022年第16回から会場を東京都写真美術館に移し、午前と午後の2回開催となった。第18回目の今回のテーマは「記録、伝える、その先に見えるもの—ある大地の物語」。

JPS では新進写真家の発掘と活動を奨励するために「名取洋之助写真賞」を設けて表彰している。今回の講演は、2023年第18回受賞者の中条望氏、奨励賞受賞者の齊藤小弥太氏と小山幸佑氏の3人の写真家を招き、世界を舞台にして撮影を続けている写真家が、旅先で出会った情景を紹介しながら、写真による記録が人の暮らしにどう関わるものなのか、人の生き方はいかにあるべきかを熱く語っていただいた。その後、この3人と第1回名取洋之助写真賞受賞者・清水哲朗氏の司会によるパネルディスカッションを行った。

熊切大輔会長の挨拶に始まり、お三方のスライドを投影しながらの講演。休憩後、写真家4人によるパネルディスカッションへと続き、会場は2回ともほぼ満員となって盛況のうちに終了した。



講演: 「帰るべき大地を求めて」 中条 望

本日は「帰るべき大地を求めて」というタイトルでお話しさせていただきます。まず、これは今日お越しいただいている方への呼びかけになるのですが、「あなたの故郷を教えてください」と問われたときに、どういったものをイメージされますでしょうか。それは、地元の自然風景であるとか、お祭りであるとか、食べ物とか、特産品であるとか、いろいろあると思うんですけども、自分自身がどういった人間かというのを考えたときに、こうした故郷との結びつきというのは少なからずあるんじゃないかなと思います。この講演の中では「ロヒンギャ」と、「ビハール人」というテーマを通じて、お話をさせていただきます。

「ロヒンギャ」というのは、仏教徒が多くを占めるミャンマーにおいてバングラデシュに程近いラカイン州出身の少数派イスラム教徒」とされています。彼らの多くはバングラデシュの難民キャンプに暮らしているのですが、国家への帰属は浮いたままで、亡くなれば仮暮らしの土地に埋葬されていく、というのが現状です。私の取材では、そういった意味合いというのは、彼らにとってどういったものなのかなというふうに考えて写真を撮っておりました。

そして2つ目のテーマが「ビハール人」です。彼らはバングラデシュの独立戦争の際にパキスタン軍に協力した人たちで、戦争終結後に弾圧の対象となり、難民と



キャンプ中心部から覗く空に向かって少年が鳩を放った。「GENEVA CAMP(1972年設立)」には25,000人以上ものビハール人が今も暮らし続ける。2023年4月撮影 撮影：中条望

なりました。ビハール人のキャンプの中で最も大きなジュネーブキャンプというところでも、周囲がどんどん発展を続ける中で、50年以上取り残された区画となっております。

今回のタイトルとした「大地」。私はそれを故郷というふうに解釈しました。「ロヒンギヤ」の難民キャンプの入口に掲げられた看板には「忘れ去られた1992年登録の難民キャンプによる、私たちを数十年の難民生活から救い出してください。難民生活はもうたくさんだ。30年は十分すぎる年月です」と書かれています。難民キャンプというと、多くの方は着のみ着のままで逃げてきた、ビニールハウスのような暮らしを想像するのかもしれませんが、30年を越す暮らしの中で彼らは何を求めているのか、難民キャンプが持つ意味合いも変わってくるということを、この看板の前に立って少し考え込んでいました。

続いてビハール人です。2008年にビハール人に国籍が与えられたのですが、今なお権利闘争が続いています。キャンプ内は、昼間でも薄暗いです。人々は差し込む光を頼りに生活を送っているような形で、昼夜問わず停電というのが頻繁にあります。彼らはワンルームのような狭い空間の真中にベッドを置き、その下がキッチンとなり、上が暮らすための場所になる。その限られた空間の中で、家族が食事をする。私は、家族で食事することが人間の幸せの最初単位ではないのかなと思うようになりました。そうすると、この狭い場所に住居の数だけ家族の団らんがあるということになる。

彼らはイスラム教徒ですので、祈りの時間になると

モスクに集まって、美しい所作で祈りを捧げます。祈りの時間になると、キャンプ全体が、一つの意思を持った共同体であるように思えてきます。祈りを捧げる姿というのは本当に美しく、言葉はわからない、祈りの所作とか、意味とかもアラビア語とかなのでわからない。けれども、伝わってくる振動、所作、音の全てが、個々の意味するところがわからないけれども、美しいと思います。祈りというのは、人間の根源的な本能を表したものなんじゃないかなと思います。そして、その姿を何とか収めたいと思い、話をして、写真を撮らせていただいています。

彼らは過酷な環境の中で生き、祝い事があれば、集まって、歌って、踊る。そうした姿を見ると、人が生きていく力強さと美しさというのを感じます。その姿を次の世代に伝えていくのは本当に重要なことなんだと思

い、彼らの姿を見つめていました。

なぜ現地に写真を撮りに行くのか、それはやはり、同情や正義感だけではないと思

います。私は良い写真を撮りたいと思って現地に行っていますが、それでは良い写真って何だろう、私は彼らの尊厳とか美しさというのを掴み、写真に残して伝えていきたいと考えています。



以前には無かったフェンスで覆われた監視塔が設置されたロヒンギヤ難民キャンプ。今ではロヒンギヤは庇護されるだけの存在では無くなった。

2023年5月撮影

撮影：中条望

中条 望 (ちゅうじょう・のぞむ)

1984年三重県生まれ。同志社大学卒業。大学在学中より活動を始めフリーランスフォトグラファーとして難民キャンプ、スラム、辺境に生きる人々の姿を撮影。写真展、新聞、雑誌などで作品発表を続けている。
『GENEVA CAMP 一取り残されたビハール人』で第18回取洋之助写真賞受賞。JPS 会員。



講演：「対話によって生まれる風景」 齊藤小弥太

今回は成田市の一鉄田集落についてお話をさせていただきますと思います。一鉄田集落と聞いても、皆さん聞き慣れないかなと思うので、まずこの集落がどこにあるのか、お話をさせていただきますと思います。一鉄田集落は、成田空港のすぐ真横にあります。この集落では、今どんどん集団移転が始まっています。というの

も、2029年3月31日に成田空港の第3滑走路という新しい滑走路が運用開始され、地域の再開発が予定されているのです。今はその日に向かって集落の人が他の場所に引っ越し、集落がどんどん更地になり、いろいろな風景や、営みが喪失しているような状況になっています。

一鉄田集落は、2020年の時点では72世帯ありました。今では約半分以下、34世帯くらいの方が住んでいます。今はこの地域の発掘調査が行われている



集落の台地の下には田園風景が広がる。谷間で栽培されるお米は山のミネラルを多く含み、美味しく育つ。現在は耕作放棄地として雑草が生い茂る。

2021年撮影

撮影：齊藤小弥太

て、旧石器時代の住居の跡や、鉄の塊が見つかっています。つまり、この地域に相当昔から、豪族などの、権力の

ある人が移り住んだ証なのだろうと思っています。私が一鉄田の撮影を始めたのは2020年です。他の要件もあって現地に赴き、写真を撮りながら集落の中を歩いていると、ご夫婦が乗った軽トラック前から走って来た。その時のご夫婦の表情が本当に晴れやかで、私は、その土地に生きて、その土地に生かされている方々の姿、失われてしまう集落の姿を、写真家として記録しなければいけないという思いから、撮影を始めました。

撮影を始める時には、まずお金を借りて、中判のデジタルカメラを購入しました。その理由には、機動力が備わったカメラで撮影をしていると、一つの場所に留まる時間が短くなりがちです。私は一鉄田での撮影は、そうあるべきではないと考えたのです。2020年はコロナウィルスが猛威を振るっていた時代で、人と会って話をするのが憚られ、私は風景の写真ばかり撮っていました。けれども、風景というものは、単にそこにあるというのではなく、そこに住まう人の営みとの関係性によって生まれてくるものです。風景をいくら撮ったとしても集落の姿を記録できていない。やはり集落の姿を伝えるためには、人に話を聞いて、人の営みの中で風景を撮らなきゃいけないという思いが徐々に強くなっていきました。集落の人は、自分たちが築いてきたものを後世に遺したい。けれども遺す手段がない。そこにタイミングよく、私が撮影を始めていたということもあって、集落の人がいろいろなものを撮らせてくれるようになったのです。

私はドキュメンタリー写真を撮るときには、「対象と対話をする」ということを大切にしています。人の暮らしを撮るのであれば、人と対話をして、その方が持って

いる色々な思いを知り、自身の認識を深めていくことによって、写真がどんどん深みを持ってくる。私はそのプロセスを大切にしています。

空港と住民の方との対立構造を描いてしまうと反対に問題を簡素化してしまうことになるのではないかと。そういった懸念も抱くようになりました。過疎化を始めとする日本全国に起こっている様々な問題の象徴として、この集落を捉えたいという気持ちになってきました。マスメディアは反対運動などの、見ていて分かりやすい「絵」を欲しがりますが、写真家であるならば、反対運動などが無くても、一人ひとりの小さな思いを残すこと

ができるのではないかと、撮影を続けていくうちにその思いをどんどん強くしていきました。長く住んでいた土



成田空港第3滑走路の新設工事により移転対象となっている集落。現在はこの家は取り壊されて更地になっている。2024年撮影

撮影：齊藤小弥太

出は、その人にとって故郷の喪失であると同時にアイデンティティの喪失に他なりません。しかしそういった喪失はこの集落だけではなく日本全国で起こっているように思います。ドキュメンタリー写真の面白味は、伝える、記録する、ということはもちろんなのですが、単にそれだけではなく写真を見た人が、その人自身の身の回りの出来事のように捉えることで、写真のイメージが広がっていくことにあるかと思っています。私は2029年3月31日に新しい滑走路が運用を開始されるまで、この一鉄田集落を撮り続けていきたいと思っています。そうして撮り続けることで今の時代を表現できると考えています。

齊藤小弥太 (さいとう・こやた)

1986年神奈川県生まれ。日本写真芸術専門学校卒業後、ファッションスタジオ勤務を経てフリーに転向。以降、ドキュメンタリー写真家として国内外問わず活動を続けている。コロナ以降は国内での作品制作に専念しており、成田空港第3滑走路の新設により移転の対象となっている集落を撮影した作品が第18回名取洋之助写真賞の奨励賞を受賞した。JPS会員。



講演：「カメラを持った部外者として」 小山幸佑

今からご覧いただくのは、私が2018年からイスラエル、パレスチナを取材してきた写真です。まず、なぜそのような場所に出かけたのか。取材を始めた当時、私

は新聞社系の出版社の写真部に在籍していました。甲子園の高校野球大会を主催していて、お盆期間は、まったく仕事を休むことができないのですが、その替わり

に、1年の中で2週間、どこかで休みを取ることができる。これは旅行に出かけるには便利な制度で、どうせ出かけるなら、一生のうちにもう



全長700Km超、高さ8mのイスラエル／パレスチナ分離壁そばのオリーブ畑に放牧される2頭の馬。
2023年撮影 撮影：小山幸佑

二度と行けないようなところに今のうちに行っておきたいなと思って、イスラエルを選んだのです。今振り返ると、その後何度も通うようになり、思い入れ深い場所になるとは思っていなかったのですが、最初は休暇の旅行のつもりで行きました。

イスラエルというと、ニュースではひどい状況ばかりが伝わってくるのですが、もともとは、地中海のほとりの穏やかな気候の中に、歴史あるきれいな街が造られています。ここにはアジア人の観光客というのは珍しいようで、街を歩いていると「うちでコーヒーを飲んでいきなよ」という具合によく話しかけられます。イスラエルで最初に声をかけてくれたのが、ハナという名前のおばあさんで、彼女は私がカメラを持っているのを見て、私のことをただの観光客ではなく、この地域を取材に来たジャーナリストだと思ったのだそうです。「今回は、ただの旅行だ」といってもハナは一方的に話し続け、「あなたはジャーナリストなのだから、真実を伝えなさい。真実とは、どこかで間接的に見聞きしたようなことであるとか、他の人が決めることではなく、あなた自身が見て感じたものが、あなたにとっての真実だから。それを伝えなさい」といわれました。イスラエルについて2日目

にそういわれてしまって、違うんだけどなあと思いつつもその言葉はずっと頭に引っかかっています。

さて、イスラエルに行ったのだから、当然パレスチナのほうも行ってみようということになったのですが、その境界には大きな壁が立っています。高さが8メートル、全長が国土を縫うように約700キロ続いているコンクリートの壁です。現地の人は、特別な許可がないと通ることができないけれども、私



パレスチナに暮らす Tariq Muhammad Mousa Shwriaさんは苦しい生計を助けるためにハウスクリーニングの仕事をしている、自宅で育てる羊は特別な日に屠り、家族だけでなく近所に人々にも振る舞う。2022年撮影 撮影：小山幸佑

のような外国人ツーリストであれば、パスポートを見ただけでチェックポイントを通ることができる、ちょっと特殊なシステムになっています。

そこで、その立場を利用して自分にできることは何だろうと考えました。ニュースで見えるようなセンセーショナルな場面を撮って、皆さんにお見せするというのもひとつのジャーナリストの仕事かもしれませんが、どちらが正しいかということ、私が外から断言する権利はないと思いました。あくまでも私が出会った人たちのことを、彼らが自ら交流することができる、逆に外国人だからこそ私が接することのできる壁を挟んだお互いのことを、彼らに対して伝えたい。その方法として、ポートレート撮らせてもらった人に、壁の向こうに手紙を書いてもらうというアイデアを思いつきました。壁の向こうの顔が見えない相手に対して何を書いてもいい。仲良くしましょうというような内容でも良いし、批判でもいい。何でも良いから手紙を書いてほしい。両地域は公用語が違うので、いわば「伝わらない手紙」になるのですが、伝わらないことそのものも意味合いを含むので、そのまま自分の言語で書いて欲しいとお願いしました。最初は断られ続けたのですが、あるとき「私がやる」とってくれた人が現れた。その写真の手紙を見せることに協力してくれる人がだんだんと増えていきました。私は現地語を読めませんから、英語に訳して貰ったものを読み、内容を把握しました。そういう作業を繰り返し、少しずつ壁の反対側に届ける手紙が溜まっていきました。

私が好きな言葉に「私たちが正しい場所に花は咲かない」というものがあります。これはユダヤ人のイエフダ・アミハイという詩人の詩の中の一節で、日本語にするとニュアンスの解釈が難しいのですが、私は、自分の正しさを主張するときには人はその場で足を踏ん張りますが、そうして踏み固まった地面には花は咲かないというふうに解釈して、私の一連の作品のタイトルとして使っています。

小山幸佑（こやま・こうすけ）

1988年東京都生まれ。朝日新聞出版写真部を経てフリーランス。
2018年よりイスラエル／パレスチナにて取材を行う。
2021年東京恵比寿にKoma Galleryを設立。
第18回名取洋之助写真賞奨励賞受賞。JPS会員。



【協賛】OM デジタルソリューションズ株式会社
キャノンマーケティングジャパン株式会社
株式会社シグマ
株式会社タムロン
株式会社ニコンイメージングジャパン
富士フイルムイメージングシステムズ株式会社

パネルディスカッション

パネリスト

中条 望

齊藤小弥太

小山幸佑

司会進行：清水哲朗（JPS 会員）

■信頼関係は時間をかけて築く

清水 午前中に三者三様の講演を聞いて頂きました。みなさん独特のスタンスがあったかと思いますが、皆さん、何かこだわりってあるのですか？

中条 やはり対話を通じて、その場所に入り込むというか、私はその場所がやっぱり好きなのです。その場所が好き、文化が好き、人が好き、宗教が好き。目で見えて美しいというだけではなくて、対象が宗教であるとするなら、祈りの時の服が擦れる音や、空気の振動が好きです。日本に帰ってきてしばらくすると、また会いたくなる。その繰り返しかなと思っています。

清水 中条さんが海外に出られたきっかけというのは？

中条 私は沢木耕太郎さんの『深夜特急』に影響を受けまして、各地を回るようになったというのがスタートですね。

清水 なるほど。で、バン格拉ディシュ？

中条 そうです。気がつけば、何回くらい行っているのだろう？ 15 回か 20 回か。

清水 みなさん、現地に溶け込むには、何か方法があるのでしょうか？

小山 何度行ってもやっぱり外国人は外国人です。通い続けるうちに知り合いもできて、私をコウスケと呼んで迎えてくれる人もできたのですが、それでもやはり、自分は日本人だということを思い知らされることがありますし、自分自身もそれを忘れないようにしています。

清水 言葉はどうしているんですか？

小山 基本的には英語です。

清水 中条さんは？

中条 英語と、挨拶や自己紹介は現地の言葉を練習します。

清水 通訳はつけずに？

中条 つけられないです。英語でもきちんとした表現が難しいときには、最近は翻訳をかけて内容を細かく詰めるところは詰めたりしています。

小山 今のグーグル翻訳はすごくいいですよ。本当に便利です。

清水 アプリの翻訳の対象になる言語と、そうでない言葉があるじゃないですか。私もツールに弾かれることがあります。そうすると、もう覚えるしかない。ハードな所に行くとなると、通訳をつけることができないので、そうなると覚えるしかない。私もモンゴルに行った時に、これから喋るであろう言葉を全部日本語で書いて、日本語ができるモンゴル人に現地語を書いてもらい、指差し会話帳を作ったことがありました。齊藤さんは日本語だからね。

齊藤 残念ながら話に入っていけないなって（笑）。ただ日本でも、現地の言葉がわからないことは時々ありますね。

清水 被写体になって欲しい人との信用信頼関係づくりって、何かコツがあるのでしょうか？

中条 現地に行く私のことを嫌う人もいます。結論は、やはり何度も通って、こちらがいかに本気で話を聞きに来ているのかということを伝えるしかないと思います。

清水 後から写真を届けたり？

中条 それはもちろん毎回しています。お世話になった人には日本のお菓子を届けたり。

清水 何が喜ばれるんですか？

中条 やはりチョコレートやコーヒーです。この前は女性からスキンケアクリームが欲しいという、いかにも女性らしいリクエストがあって、それは今回届けてきました。

■写真を撮るためのモチベーションを維持する

清水 取材に通う、写真を撮り続けるには、相応のモチベーションも必要だと思うのですが、これを維持するための方策というのはあるのでしょうか？

小山 私の場合は、手紙を書くことを断られ続けた中で、「私は協力する」、「俺は協力する」、「これを持って帰ってくれ、たくさんの人に見せてくれ」と手紙を託してくれた人たちの思いというものを、今度は自分が背負っているということ。それを思い出すことで、やる気が戻っています。

清水 齊藤さんは、取材を続けてゆく中で、現地からどんどん人が減っている、日本の過疎化の問題との直面を強いられているのではないのでしょうか？

清水哲朗（しみず・てつろう）

1975 年横浜市生まれ。日本写真芸術専門学校卒業後、竹内敏信の助手を 3 年間務め、23 歳でフリーランスに。独自の視点でネイチャーからスナップ、ドキュメンタリーまで幅広く撮影。個展開催多数。主な受賞歴は第 1 回名取洋之助写真賞（2005 年）、2014 年日本写真協会賞新人賞、2016 さがみはら写真新人奨励賞。JPS 会員。



齊藤 現地で家や物がなくなっていく。家がなくなった後に花が一輪立っているというような情景を見ると、どうしてもセンチメンタルになってしまう部分はあるのです。ただ、そうなると、過去にあったものの記録が重要になる。過去の思い出が風化し、あるいは亡くなってしまう方もいる。そういう状況を現在進行形で体験していると、「とにかく撮らなければいけない」という気持ちにはなります。

清水 昔の鉄器のような物は、偶然見つけたの？

齊藤 地元の方が、集落の歴史であったり、自分自身のルーツというのを見つめ直そうという動きが出ていますね。お話をしていると、現地の人から逆に質問や、相談を受けることがあるのです。そうすると、最初は自分自身が撮るつもりでいなかったものが被写体になったりします。どのような関係性が構築されるかで、撮影の対象も変わってゆきます。

清水 今回（2023年度）、名取洋之助写真賞を受賞されたことで、何か変わったことはありましたか？

中条 私自身の内面的な部分としては、自分が続けてきた仕事が評価されたということで、間違っていないかったのだな、自分の思いが伝わったのだな、ということが理解できました。それまでおぼろげだったものが、ちゃんと自分の核になって、これまで試行錯誤であった作品も、きちんとまとまるようになったと感じています。

小山 受賞の幸せを聞いて、嬉しいなと思ったことの1つに、自分の責任を少し果たせたかなというのがありました。これまでは小さなギャラリーで少しずつ展示していた写真を、今度は東京と大阪の展示に出させて頂けたというのもあります。

清水 齊藤さんはもうマイペースですか。

齊藤 変わったことはちょうどこれですかね。人前で話すことが増えました（笑）。これまで人前で話すことがなかったのが、全然自信もなかったのですが。

■写真家自らが発表の場を作る

清水 小山さん、齊藤さんはギャラリーも出されているじゃないですか。その辺の話も聞きたいなと。やっぱり記録伝えるという意味では。そういう場があるということについて。ちょっと一言、何かあれば。

小山 私は「KOMA GALLERY」という小さいギャラ



リーを、ちょうどこの恵比寿の写真美術館とは山手線を挟んだ向かい側で3年間運営に関わっています。このギャラリーは、いわゆる自主ギャラリーという名前のカテゴリーに入るのですけれども、写真家仲間9人で家賃を折半して、家賃を9等分している代わりに365日を9等分して1人当たり約6週間をいただく。その6週間で年に何回かの展示に使うというようなシステムです。自分の撮ってきたもの、あるいはちょっと自信ないけど人に見て欲しい写真をどんどん展示していくというシステムです。

清水 齊藤さんも同じシステムですね。

齊藤 はい。神田にある「東京ブライトギャラリー」です。私の場合は、今まで写真展を開催する時、作品が完成した状態で展示をするという形でした。ただ、作品がそういった完成した状態になるまで数年かかる。その点と点をつなぐ間がどうしても必要だなと思ったのです。作品がまだ未完成の状態でも、いろいろな人に見てもらって、意見をもらい自分も考えを深めていく。そういった場所を作ろうと思って始めたのです。

清水 写真は、写真館で撮ったり、写真展で発表したりなど、色々な扱いがありますけど、人と人をつなぐメッセンジャーという役割も大きいのではないかなと思います。そういった場を、写真家自らが作っているというのはすごい大事な事かなと思います。今回は、皆さんのことを深く知ることができましたし、やはりドキュメンタリーを手掛けている人は覚悟が違うなということを感じることができた時間でした。楽しい時間をありがとうございました。

（記／出版広報委員：池口英司、
撮影／出版広報委員：桃井一至）



JPS 公式 YouTube チャンネル

「フォトフォーラムオンライン」など、
動画コンテンツがごらんいただけます。

<https://youtu.be/j-tpwI7sWwQ?si=jTgT3CIPD1BGXCJJ>





2024 年第 7 回受賞者決定 !!

遠藤 励さん

厳しい自然環境のなかで太古の昔と変わらない暮らしを維持している人間がいる

わが国初の女性報道写真家として活躍された笹本恒子(1914～2022、109歳没)名誉会員の多年にわたる業績を記念して、実績ある写真家の活動を支援する「笹本恒子写真賞」を平成28(2016)年に創設。今回の選考委員は佐伯剛(『風の旅人』編集者)、野町和嘉(写真家)、熊切大輔(写真家、JPS会長)。

第7回の受賞者は遠藤励さんに決まった。授賞式は2024年12月19日(水)、アルカディア市ヶ谷で行い、受賞記念展「MI AGOORTOQ (ミアゴート)」を12月19日(木)～25日(水)、アイデムフォトギャラリー「シリウス」で催した。

【受賞理由】

グリーンランドの奥地に住む先住民を訪ね、撮影を続けるその行動力と圧倒的な表現力で撮影された写真をまとめた大型の写真集など、熱量を強く感じさせる作家活動に対して。



【受賞の言葉】

今、撮らなければならない写真がある。フィルムからデジタルへの移行を経験し、写真の大衆化を目の当たりにした世代の私は、現代美術としての前衛的表現にも関心はある一方、これまでの写真が持っていた記録としての役わりも大切にしてきた。9か月費やした北極遠征計画が出発直前にパンデミックで頓挫し、ウクライナへの砲撃はシベリア遠征の中断を余儀なく

された。多くの資金と先手を失い、人生のいろいろが限界だった。半生を賭けてきた写真を、辞めてしまおうと思った。技術の進歩が生み出す視覚表現、承認欲求、広告戦略。目に映る世界がいくら華やかでも、本質を静かに突きつけるストレート写真の強さに心が震えた。写真は行動と体験をとめない、被写体と一時的、もしくは長期的に関係を結ぶ。あの時、自分の賭けごとのような写真は終えたのだろう、「これが作品だ」と必死に付加価値を見出そうとしていた写真は、森や動物たちを育てる木の実のようで、写真という行為の中で「自分自身の方が作品化されていく」。そう思えるようになった。坦々と準備を進めると、私は再び北極に向かった。今回の受賞はこの時代に写真を続けていく勇気と役目を与えてくれました。私にとっては言葉にできないくらいの感謝でしかありません。

遠藤 励(えんどう・つとむ)

1978年長野県大町市に生まれる。1997年スノーボードの黎明期を目撃し、独学で写真を始める。1998年ボードカルチャーの専門誌を中心に写真表現を開始。～スノーボード写真の作品化、文化・潮流の撮影を継続。2017年北極圏の民俗プロジェクトに着手。2024年日本写真協会新人賞受賞。

主な著作：2015年「inner focus」/小学館。2023年「MIAGGOORTOQ」/自主制作。

主な個展：2024年「世界の果てに見えるもの」大町市企画展(長野)、2024年「MIAGGOORTOQ」富士フィルム・フォトサロン(東京)、2023年「MIAGGOORTOQ」Gallery AL(東京)、2018年「北限の今に生きる」富士フィルム・フォトサロン(東京)、2018年-2019年「遠藤 励 写真展」82ストリートギャラリー(長野)、2016年「inner peace」Creative space Hayashi(神奈川)、2016年「Art of snow players」Gallery AL(東京)、2015年「水の記憶」富士フィルム・フォトサロン(東京)、2012年「Snow meditation」Fire king cafe(東京)

第7回「笹本恒子写真賞」選評

佐伯 剛

地球上で西欧文明の影響を受けていない場所を見つけることが難しい時代に、厳しい自然環境のなかで太古の昔と変わらない暮らしを維持している人間がいる。遠藤さんの写真を観た時、世界にまだこんなところが残っているのかと新鮮な驚きがあった。遠藤さんは、グリーンランド最北の地域に生きるエスキモー・イヌイットと暮らしをともにしながら、水上での彼らの狩猟や解体を手伝い、同じ目線で、同じ経験をしながら、長年、撮影を続けてきた。文明社会では都合が悪いことのように避けられていることが、実は、美しくて神々しい。そして、文明社会の中で優れていると評価されていることが、いかに欺瞞に満ちていることか。遠藤さんの写真に魅了されることは、目先の利便性や自己都合的な功利主義によって文明圏の人間が損な

ったり失ったりしているものを再認識させられることでもある。現代は、誰でも簡単に写真が撮れて、自分に都合よく加工できる時代だが、写真家が失ってはならないものは、写真行為を通じて、人間の精神が頹廃に向かう流れを、少しでも阻止しようとする気概だろう。遠藤さんもまた、当然ながら文明人の一人に違いないが、エスキモー・イヌイットの人々と暮らしをともにしていくなかで、自分の中に潜んでいる本能的な何かが呼び起こされ、自分を省みる機会となったのではないか。こうした撮影行為を通じて自分自身を変えていけるのは、彼が、被写体に対して敬意を持ち、誠実に、真摯に向き合っているからだろう。そうした彼の精神と眼差しに触発されて、人間らしく生きることの意味を改めて問い直す人が、この現代社会にあって、少なからず存在しているのではないと思う。

第7回「笹本恒子写真賞」受賞記念展

遠藤励写真展「MIAGGOORTOQ (ミアゴート)」 2024年12月19日(木)～25日(水)
アイデムフォトギャラリー「シリウス」

第7回「笹本恒子写真賞」の受賞を記念した、公益社団法人日本写真家協会主催・遠藤励写真展「MIAGGOORTOQ (ミアゴート)」を2024年12月19日(木)から25日(水)まで、アイデムフォトギャラリー「シリウス」(東京都新宿区)で開催した。

「笹本恒子写真賞」は、日本写真家協会が報道写真家として活躍した笹本恒子氏の業績を顕彰し、その精神を受け継ぐ写真家の活動をたたえ、助成することを目的として創設し、今年度が7回目となる。

今回の受賞者は遠藤励氏で、作品はグリーンランドの奥地に住む先住民を訪ね、極北の自然と、そこに住む人々の姿を描いたもの。作品の圧倒的ともいえる迫力が、見る者の心を打つ。ここでは氏の作品に寄せる思いを伺った。

—— グリーンランドに行こうと考えたきっかけは？

遠藤 私は『雪つながり』でどこまで行けるか？という個人的なゲームをやっていて、気がついたら北極にいた、という感じなのです。元々は長野県の大町市の出身で、友達も皆スノーボーダーだった。その友達を撮ることから始まって、今でもスノーボードが私のベースにあり、その延長線上に北極があった、という感じです。

—— 簡単に行ける所ではありませんよね？

遠藤 自分のテーマとも照らし合わせてリサーチを続けた中で、とにかく、興味が沸いてしまったので、行こうと。体力的にも行くなら今しかない。私のテーマは、雪にまつわるすべてです。それでは何故、グリーンランドに行き当たったのかというと、私は原始的な民族に興味があり、『原始的な』というフィルターをかけると、グリーンランドとなったのです。

極北の地のことである。私たちがまず想像するのは厳しい寒さだが、－20度より下がっても、その先は体感としては大きな違いは感じず、それは空気中の水蒸気量が減ることに拠るものと遠藤さんは説明する。－5度から－10度くらいがいちばん寒く感じ、現地の『エスキモー』も同じことを言うのだとか。ただ、私たちが童話で知った『エスキモー』の暮らしぶりは、今はもうほとんど残っていないのだという。

遠藤 現地では犬橇で移動することもあります。私は冒険家ではありませんから

単独行はせず、現地の人の橇に乗せてもらうことになる。彼らの文化の中に入り、信頼関係を築くことには気を遣いました。写真を撮らせてもらう前に、彼らの生活の手伝いをしてい



会場、展示作品前の受賞者・遠藤氏 2024.12.23

ます。お願いをして写真を撮らせてもらうのではなく、彼らと友達になり、一緒に生活をして、8割が仕事の手伝い、1割から2割がシャッターを切るという感覚で、それは今でも変わりません。私のプロジェクトは、自身が体験することにも重きを置いているので、撮影することだけが興味の対象ではないのです。

遠藤さんが現地の人から聞いたのはオオカミという動物の危険性で、人に近づくことが少ないといわれているオオカミも、集団になると状況は違ってくるのだという。『彼らの腹が減っていたら、餌になるかもしれないぞ』と。季節の違いなども関係するでしょうし、オオカミの習性を一概に言い切ることはできないのですが、と遠藤さんは語りが、そのような情報を得られるのも、長い時間をかけたからこそなのかもしれない。

遠藤 民族というのはデリケートなテーマです。それを興味本位で撮り下ろして、その写真を図鑑のように並べてはいけない、ということは感じ続けています。昔はそういう写真もあった。けれども、私は私なりの瞬間に立ち会う必要があるのだと思います。

—— これからも『雪つながり』で写真を撮り続けられるのでしょうか、それはどんなビジョンで？

「それを言ってしまうとつまりません(笑)。この後、シベリアの写真を3年くらい撮り続ける気持ちでいますが、その先のプロジェクトは秘密です」と遠藤さんは笑い、「日本に帰り新宿の街を見ていると、ここに居ては自分の目標は達成できないだろうな、と感じます」と付け加えた。

(記・撮影／出版広報委員：池口英司)



受賞記念展の案内状 DM



写真展は新宿区の「シリウス」で7日間にわたり開催

第 50 回「日本写真家協会賞」贈呈式

受賞者：ライカカメラジャパン株式会社

第 19 回「名取洋之助写真賞」授賞式

受賞者：藤原 昇平「東京オアシス」

星野 藍(奨励賞)「赤き星が落ちた世界 ソビエト連邦崩壊の残響」

第 7 回「笹本恒子写真賞」授賞式

受賞者：遠藤 励

2024 年 12 月 11 日（水） 於：アルカディア市ヶ谷「富士の間」

年末恒例の「贈呈式・授賞式・会員相互祝賀会」を 2024 年 12 月 11 日にアルカディア市ヶ谷「富士の間」で開催した。

定刻 16 時半に司会者の筒美きょうかさんによる進行で始まった。初めに熊切大輔会長から「日本写真家協会賞も 50 回となりました。コロナ禍のイベント自粛もほぼ収まり、写真界では多数のコンテストが行われて作品もバラエティーに富んでおり、写真業界全体が力を取り戻しています。本日の表彰をする 3 賞も、丹念に取材した力強い実力のある作品です。今夜は、祝賀会までごゆっくりお楽しみください」と挨拶があった。

続いて来賓の挨拶は、文化庁文化戦略官・芸術文化支援室長の林保太氏より「各賞を受賞された皆様おめでとうございます。ますますのご活躍をご期待申し上げます。JPS 展はじめ、歴史的・文化的価値の高いフィルム写真の収集保存、表現・技術の調査研究、国際交流、人材育成などわが国の写真文化の発展に努められ、関係者皆様に敬意を表します。文化庁におきましても写真文化関係資料のアーカイブ構築に取り組むなど、わが国の多様な文化の保存継承を図っておりますが、本日お集まりの皆様にも写真を通じたそれら発展のため、お力添えをお願い申し上げます」と祝辞をいただいた。

「日本写真家協会賞」贈呈式

2024 年度の日本写真家協会賞はライカカメラジャパン株式会社に贈呈した。贈呈理由は「ライカ A 型を 1925 年に発売以来、ライカカメラは世界の写真文化発展に寄与し続けている。ライカが生まれなければ、写真

の歴史は違ったものとなったであろうとも言われている。伝統あるフィルムカメラを作り続けながら、最新のデジタルカメラ開発にも挑戦して、フィルム、デジタル、インスタントカメラを発売する唯一無二のカメラメーカーとなっている。ライカカメラジャパンは多くの直営店による独自のカメラ販売方式を行い、ギャラリーも多数展開して国内外の写真家を紹介している。カメラと写真の両方で我が国の写真文化発展に貢献していることに対して」。受賞されたライカカメラジャパン株式会社代表取締役社長の福家一哲氏へ熊切会長より表彰状を、山口規子副会長より同社マーケティングの岸本典子氏へ盾を贈呈した。続いて福家氏より「このたびは 50 回の節目での名誉ある賞を賜りありがとうございます。ライカカメラは、1925 年の製造販売から来年 100 年になります。“写真と写真を撮る方々に寄り添う”をモットーに継続してまいりました。2020 年



「日本写真家協会賞」贈呈式 記念撮影



熊切大輔会長の開会挨拶



文化庁文化戦略官・芸術文化支援室長 林保太氏の来賓挨拶



受賞者のライカカメラジャパン株式会社代表取締役社長福家一哲氏へ表彰状を贈った



ライカカメラジャパン株式会社マーケティングの岸本典子氏へ盾を贈った



受賞の言葉を述べるライカカメラ「名取洋之助写真賞」選考委員の
ジャパンの福家一哲氏



清水哲朗氏による講評

フォトキナではたいへん大きなスペースをお借りし、機材展示に2割、写真展示には8割をあて“写真に対する強い思い・意欲”を表した展示でした。世界ではライカギャラリーが30以上になり、写真を見ていただく事にかなりのエネルギーを注いでおり、国内では3店舗目を表参道にオープンし、ギャラリストを社員に迎えました。今後とも皆様方との交流と、ご指導をいただきながら写真文化の発展と継続に尽力してまいります」と受賞挨拶を述べられ、壇上で記念撮影を行った。

「名取洋之助写真賞」授賞式

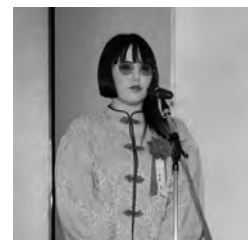
続いて「名取洋之助写真賞」の授賞式を行った。新進写真家の発掘と活動を奨励することを目的に2005年に創設。写真ジャーナリストの活躍が極めて厳しい現在、ドキュメンタリー写真は社会に欠かせない。この時代に新しい感性で表現に挑戦する40歳までの写真家を対象とした賞。第19回の「名取洋之助写真賞」は藤原昇平氏「東京オアシス」、同奨励賞には星野藍氏「赤き星が落ちた世界 ソビエト連邦崩壊の残響」に決定した。まず、選考委員の専修大学教授・山田健太氏、第1回名取賞受賞者・清水哲朗会員、熊切大輔会長の3氏が紹介された。選考委員を代表して清水氏が「今回21名21作品の応募がありました。藤原さんの作品は高齢化の進む新宿区の都営住宅を地道に取材され、受け入れてもらったもので、2019年にニコサロン銀座で発表されたものをベースにコロナ禍前後の新作を加えて再構成し、深みが増し高評価につながりました。全国では高齢化・過疎化がどこでも問題になっていますが、個の集合体である団地での適度な距離感を保ちつつ、住民の人物像を淡々とキャプション付きで描いており、熊切選考委員も『どこか寂しく、しかしほっこりとした空気感があるのは、撮影者と被写体の絶妙な距離感があつたのではないかと』とおっしゃっています。奨励賞の星野さんの作品はシリーズで撮り続けているゆるぎない視点、安定感、圧倒的な写真力が評価につながりました。企画・撮影・仕上げ・プリント・構成に至るまでクオリティー、完成度ともに高く、人が写っていない人工物のみの作品はこれまでなかったので、ドキュメンタリーの表現の幅が広がったのではないかと思います。従姉の死が廃墟に目を向けるきっかけになったのは作品から理解できましたが、福島出身の作者が東日本大震災を機にチェルノブ



「名取洋之助写真賞」授賞式 記念撮影



熊切会長より「名取洋之助写真賞」「名取洋之助写真奨励賞」を星野藍氏へ贈った
受賞者・星野藍氏の挨拶



イリに渡航し、その後の視点につながった事は読み取れなかったで、今後の表現力に反映されることを期待したい。選外作品では意味が伝わりにくいもの、仕上げる悪さで損をしたもの、時間をかければ高評価になりそうな作品もありました。山田選考委員の講評には、『危険な地へ赴く意思は高く評価するものの現場は国内の身近なところにも数多くあり、撮り手の新しい発見と時代を見る目に期待したい』との事です。応募者数が一時期減ったことに対して、関係者努力で回復に向かっていることにお礼申し上げます。ドキュメンタリー作家の活躍の場が減っているなかで、JPSが光をあてるお手伝いをできれば良いと思っています」と講評を述べた。

「名取洋之助写真賞」の藤原氏は体調不良により授賞式を欠席されたため、モニターにて作品と経歴を紹介し、インタビュー記事を資料配布した。

続いて熊切会長より同奨励賞の星野氏へ表彰状と賞金を贈呈した。

星野氏から「素晴らしい賞を頂けたこととても光栄に思います。2013年11月末に初めてウクライナのチェルノブイリへ行ったことをきっかけに、旧ソ連を中心に旧ユーゴスラビアなどの旧共産圏を取り上げております。すたれ景色や廃墟などが写らない景色を撮り歩いており、人が写っていないなかにも人の気配や痕跡や歴史を感じられる写真を踏まえつつ、自分の思った感覚で常々撮り続けております。今回、奨励賞を頂きとても嬉しいです。ありがとうございます」と受賞の言葉を述べた。壇上で記念撮影を行い、「名取洋



熊切会長より「笹本恒子写真賞」の遠藤励氏へ表彰状と副賞を贈った



「笹本恒子写真賞」受賞者・遠藤励氏の挨拶

之助写真賞」の授賞式を終えた。

「笹本恒子写真賞」授賞式

「笹本恒子写真賞」は、わが国初の女性報道写真家として活躍された笹本恒子名誉会員の多年にわたる業績を記念して、実績ある写真家の活動を支援する目的で2016年に創設。今年の受賞者は遠藤励氏に決定した。選考は編集者の佐伯剛氏、写真家の野町和嘉、熊切大輔会長によって行った。佐伯氏からは「世間では人工知能が騒がれていますが、カメラにも付けられるようになり、一面では人工知能での表現がどうなるかの競い合いがありますが、「笹本恒子写真賞」は全く逆方向で人口知能にはできない人間の尊厳や力をどれだけ肉薄して行けるかの側面で選んでいます。3つのポイントとして“インターネットの普及や文明化が進んでいる現代の地球上でまだこのようなところがあるのかという驚きの点”、“通りすがりではなく現地の人々に入り込んで生活を共にしながら内側からみて根気よく撮影している点”、3点目として“なぜ写真を撮るのか、表現をするのか”に関わってくることです。100年前にはエドワードカーティスがアメリカ先住民と生活を共にしながら30年間撮影して人間の尊厳を見いだしていたのですが、物があふれ便利な現代に、マネーゲームなど人間が世間の歯車となって尊厳が失われていくなかで、遠藤さんがグリーンランドで撮った人物たちは物が豊かになるわけでもなく便利な生活でもなく、世界中で最も不便な場所で最も過酷な生活だけれど、表情も振舞いや作法も美しい。それらを人間の美德、美意識、尊厳をギリギリのところで撮っている。「笹本恒子写真賞」はAIとは真逆で、人間とは何か、世界とは何かにきっちりと向き合っている写真家に与えられる賞である。彼の作品は昔ながらの表現の生命線を守り続けている”ということが挙げられます。今日の何でもありの表現世界のなかで、昔ながらのオーソドックスだが古くない新しい表現方法があるという事を、後日開催される受賞記念の写真展で感じて頂ければと思います」と選考理由を述べた。

続いて熊切会長より遠藤氏へ表彰状と副賞を贈呈した。遠藤氏からは「素晴らしい賞をいただき心より感謝しております。私は冒険家でも環境学者でもないのですが、雪国で育ち自然への愛情をもち、スノーボードからもらった冒険心が北極に導いてくれました。気



「笹本恒子写真賞」授賞式 記念撮影

候変動、パンデミック、戦争のこの時代に写真を取り巻く環境も変化しています。極北の誰にも目撃されない私の孤独な取り組みに希望を与えてくれるものです。写真が社会に与えるインパクトを私は信



「笹本恒子写真賞」選考委員の佐伯剛氏による講評

じていて、温暖化と近代化の進む北極地方で目撃した原始的な狩猟民のたくましさやシステムによって淘汰されていく世界への危うさを感じました。“便利”に依存することはアイデンティティを失っていくことでもあります。AIの出現によって写真家も持続可能な人の役割を真剣に考え、深めてゆく必要があると強く感じます。真実を記録して自分の言葉として問いかける人間的な行為が、これから先重要な意味を持つかもしれません。それを私は“写真”と呼んでいます。関係者の皆様、応援して下さった皆様お礼申し上げます」と受賞の言葉を述べた。終わりに記念撮影と3賞の受賞者全員の記念撮影を行い、贈呈式・授賞式を終えた。最後に東京都小池百合子知事からの祝電を披露した。

会場を展開しコムロミホ会員による恒例の集合記念写真の撮影を行った。



3賞の受賞者全員で記念撮影

2024 年度会員相互祝賀会

2024 年 12 月 11 日（水） 於：アルカディア市ヶ谷「富士の間」

写真関係者が一堂にそろう「受賞・出版・写真展」などで活躍された会員を相互祝福

同会場にて会員相互祝賀会が始まった。初めに熊切会長から「この1年も“つながる JPS”のなかで、全国行脚を行ってまいりました。各地で会員の皆さんの目を見て話しますとポジティブな話題になります。相互祝賀会は JPS 会員はじめ関係者皆様が“つながる場所”でありますので交流を深めて写真の未来を語って楽しんでいただければ嬉しいです」と挨拶があった。

続いて来賓を代表して株式会社ビックカメラ社長室部長・堀越雄氏より「各賞受賞の皆様おめでとうございます。弊社の祖業はカメラ、プリントサービスから始め、四十年以上になります。新着任の社長から『祖業の写真文化を大切に下さい』と大号令がかかり、写真文化をもう一度盛り上げるミッションに取り組んでおります。社員フォトコンテストや、一般対象に総額百万円程のギフトカード賞金のフォトコンテストも開始し、熊切会長や山口副会長にご協力いただいております。弊社は写真・カメラ業界に注力してまいります」と挨拶があった。その後、本日出席の会員外理事と名誉会員

を紹介した。

乾杯の発声は賛助会員の株式会社フレームマン代表取締役社長の奈須田一志氏が行って、歓談に移った。

2024 年度名誉会員に推挙された桑原史成氏が紹介され、2024 年度受賞・出版・写真展で活躍された会員と今年度の新入会員の紹介があり、恒例の福引抽選会が行われた。福引を交え JPS 展アピールと名取洋之助写真賞のアピールが行われた。

最後に会員理事が壇上に上がり、山口副会長より「多くの新入会員含め、今年も三百人超の出席者となりありがとうございました。写真家は多くの分野の方々に支えられています。JPS は写真界の向上を目指し続けていきます」と挨拶のあと、高村副会長の三本締めで祝賀会は盛況のうちに終了し、散会した。

（贈呈式・授賞式共に記／出版広報委員：小野吉彦、撮影／出版広報委員：桃井一至）



「会員相互祝賀会の記念撮影」（撮影／コムミホ会員）



（株）ビックカメラ社長室部長・堀越雄氏による来賓挨拶



（株）フレームマン奈須田一志氏による乾杯の発声



桑原史成新名誉会員との記念撮影



2024 年度新入会員の皆さん



2024 年に受賞、出版、写真展等で活躍された会員の皆さん



豪華景品で今年の福引抽選会も盛り上がった



写真展委員会より「JPS 展」のアピール



企画委員会より「名取洋之助写真賞」のアピール



三本締めで祝賀会を終了した

「日本写真保存センター」調査活動報告(42)

寺師太郎（理事・日本写真保存センター担当）

1. 令和6年度保存センター事業概要

(1)文化庁への事業報告

令和6年4月契約開始から令和7年3月31日まで実施される文化庁委託事業は、写真原板や資料を受取った時の整理状態や数量など全体を記録する「初期調査」と、その後に原板1本ずつの詳細な状態や公開するコマの撮影日時・場所などを記録する「本調査」の2つがある。本年度調査を行った内容は以下の通りである。

○初期調査：大東元、勝山泰佑、広島平和記念資料館
○本調査：杉村恒、打田浩一、岡村崔、広島平和記念資料館

本調査が完了した写真原板は、国立映画アーカイブ相模原分館に3回入庫を行った。

(2)写真原板のデジタル化

高画素のデジタルカメラを使用した複写方式の写真原板のデジタル化に変更して以来、効率化を図ることができ、本年度は新規デジタル化と低画質分の再撮影も含め18,594点となった。

撮影者が現場でとった行動や時系列での状況を掴むことができる画像全コマのコンタクトシート加工は省略しつつ、採番方法を工夫するなどして必要時にPC画面上で再現できるようにし、従前の時系列分析や作家研究における制作過程の調査に役立ように努めた。これらコンタクトシートは、出版物掲載画像の特定にも活用されている。

スキャン方式から撮影方式のデジタル化に変更したことによる高精細化はコンタクトシートの一覧性による真正性担保と画面上での掲載画像調査、画像貸出とマルチユースの基盤整備に役立っている。

(3)写真原板の利活用と広報活動

調査や権利処理が完了したコマの画像や撮影情報（メタデータ）は、順次閲覧データベース（写真原板データベース）にて公開し、ジャパンサーチとの連携を進めている。

本年度は525点を追加し、2025年2月末現在では24,454点となった。再出庫分の重複もあるが効率化により入庫本数は昨年度を上回ることができた。また、再撮影を含め高精細画像を増やすことは、教育利用目的アーカイブへの活用にも活かされている。

写真原板の利活用の状況を把握する指標の一つとして、データベースの閲覧数を調査している。PV数は17,420件、UU数は2,311人であり（2024.4.1～2025.1.31）、月平均PV数1,742件、UU数231人であっ

た。昨年度の月平均PV数1,445件、UU数221人（2022.4.1～2023.3.31）と比較して、月平均PV数は121%と増加し、UU数は105%微増した。日本写真家協会HPのスマートフォン対応を進める予定であることから、次年度もアクセス増加が見込まれる。併せて、今後も閲覧数を増やすために、ジャパンサーチのギャラリーを作成する頻度を上げ、その時々話題性のあるような写真を掲載していく。

保存センターの事業費の大半は文化庁の事業委託予算であるが、一部は画像データの貸出による手数料で得ている。利用に関しては、2025年1月末時点で出版物への掲載やイベント、写真展での展示、テレビ番組での放送などが中心で、2025年1月末時点で24件となった。

保存センター主催セミナーは対外広報活動としても機能するようになり、本年度は「後世に伝えるフィルムデジタル化とフィルム保存」令和6年10月11日（金）、「そのレタッチ大丈夫？～歴史を捉えた写真仕上げと公表時の法と倫理」令和7年2月12日（水）の2回を開催した。近年のセミナーの半数程度は非会員の参加者になっていることや、他アーカイブからの見学希望が来るなど、写真界以外からも期待が寄せられていることが示された。

2. 中長期計画（アーカイブガイドライン）の検討

撮影媒体がフィルムからデジタルへ移行して久しいが、写真家の高齢化や物故に伴い、ご遺族から写真フィルムの処分についてご相談を受けることがまだまだ多い。しかしながら、今後どれくらいの期間、どのように活動していくのかはこれまで明確に数値として示されて来なかった。文化庁から多額の予算を得ているにも関わらず、計画が不明確であったことは問題であり、中長期計画を作成することとした。今後収集すべき写真家の候補をリストアップし、収集する原板数のシミュレーションを行ったが、調査や保存作業が追いつかない現状を打破することは難しく、こうした課題に対する取り組みとして、まず中期的な施策の検討を行った。その骨子は以下の通り。

- ・調査を行って相模原分館に入庫する原板と、包材入替やDB登録を行わずにそのまま冷所保管する原板に仕分けることを検討する。
- ・そのまま冷所保管するための保管場所とその費用捻出を検討する（相模原分館の空き室の活用、他のアーカイブ機関との連携、民間倉庫の利用など）。

- ・原板保存の分散や他機関と連携した利活用の促進を図るため、他のアーカイブ機関の参考になる写真原板アーカイブ方法のガイドラインを作成する。
- ・写真家個人での適切な原板保存を推進するため、写真家自身(または遺族)に推奨する写真原板の整理方法や保存方法をセミナー等で啓蒙する。
- ・教育現場での利活用を推進するため、JPCA 教育利用アーカイブへのデータ登録を計画的に進める。

本年度の諮問委員会では、「一極集中での収集・調査・保存は限られたリソースでは無理があるので、写真家の地元の機関などを巻き込んで保存する可能性も考えていく必要がある」とのご意見も頂いた。他のアーカイブ機関の参考になるガイドラインの作成を次年度より進めることでこれらを実現すべく、項目の抽出や優先度を写真保存センター委員会で協議してできる限り早く公開を共有したい。

3. 本年度本調査について

センターではこれまでの収集順にデジタル化、本調査を行う方針を変更し、より利活用が期待される内容の作品から作業を進めることとした。本年度は打田浩一氏の撮影した「比叡山千日回峰行 光永圓道阿闍梨写真集」を行いデータベース公開した。打田氏は京都を拠点に、雑誌・カタログ等、コマースフォトを撮影しながら、ライフワークとしてブルースミュージシャンや比叡山千日回峯行の撮影を行っていた。特に千日回峯行を追ったドキュメンタリーは打田氏の代表作で、昼夜を問わず行われる行は、暗い環境での撮影を強いられることも多

く、厳しい条件のなかで阿闍梨の内面を写した打田氏もある意味、行者といえるのではないだろうか。その多くはカラーボジで撮影されているがモノクロイメージもあり、比叡山を駆ける光永圓道阿闍梨の姿を時にダイナミックに、時に静かに捉えている。保存センターの写真原板データベースでは現在 90 点の画像を見ることができ。この機会に皆様



にもご覧いただきたい。

4. 収集した原板による写真展開催の実施

被爆から 80 年の節目となる 2025 年に、写真原板の保存意義と原爆写真による被爆の記録継承をテーマにした写真展の開催を計画し、会場の選定、講演会の企画を進めた。2025 年 7 月 31 日(木)～8 月 20 日(水)、(8 月 8 日～14 日お盆期間休館)、新宿御苑にあるアイデムフォトギャラリー「シリウス」をお借りすることとなった。展示作品は、山端庸介氏、林重男氏、松重美氏、岸田貢宜氏、吉田潤氏などの作品約 50 点を予定している。原爆の被害状況を撮影した原板からのモダンプリントの展示に加え、原爆投下後にパノラマ撮影された原板から作成したパノラマプリント、撮影者の足跡をたどる時系列コンタクトプリントをご覧いただく予定だ。特に山端庸介氏が 1945 年 8 月 10 日に撮影した約 100 コマの写真については、フィルムのカブリや汚損なども含めてそのままの状態、撮影された順にコンタクトプリントとして全て展示し、原板保存の価値や次世代への継承の重要性を訴求する。また、展示期間中には関連した講演会も企画中である、皆様の参加をお願いしたい。



出典：<https://photo-archive.jp/database/index.php>
(2025.2.17 確認)

2024 年度「フォト・ジャーナリズム論」講座報告

共催事業：専修大学、公益社団法人日本写真家協会

2010 年専修大学が開講した「フォト・ジャーナリズム論」(旧：報道写真論、山田健太教授担当)は、公益社団法人日本写真家協会との共催事業であり、当協会は、2011 年から講師を派遣してきた。この講座は「学生たちの真実を見抜く目を育て批評力と行動力を養うことを目的とし、メディアの第一線で活躍する写真家や実務者の実作と体験談をもとに、いまメディアの現場で何が起きているかを理解してもらうこと」を方針としている。

2024 年度は榎並悦子と野田雅也両氏を派遣した。会場は、川崎市多摩区の専修大学生田キャンパス。

●榎並 悦子

2024 年 4 月 16 日～5 月 28 日(7 回)

文学部ジャーナリズム学科の学生さんに向けて、前半計 7 回の講義を受け持った。私がこれまで取り組んできたテーマの中で「ジャーナリズム」を学ぶ学生に関心を持ってもらえそうなもの。また、報道を考える上で写真は切り離せないことから、伝えるための写真テクニックについても盛り込みたいと考え、それぞれ 7 本のパワーポイントにまとめた。

第 1 回は「インドのアパタニ民族」について。ここ数年何度も通い、取材を重ねてきたテーマで、写真集にもまとめたものだ。彼らの風習や精霊信仰に基づく暮らしをたくさんの写真と共に紹介した。またネット情報と実際に現地で聞く話の相違など、自分自身で検証する大切さについても話した。

第 2 回は「東日本大震災から 13 年」として、2011 年 3 月 30 日に初めて目にした被災地の被害状況や仮設住宅での暮らし。復興に向かう人々や街の様子。毎年通うことで感じる変化などを話した。被災した人々にカメラを向けていいものか否か、私自身の葛藤についても語った。担当の山田健太先生によると毎年学生を引率して震災遺稿を訪ねているとのこと。現地を見て考える素晴らしい取り組みだと思った。

第 3 回は「光の記憶 視覚障害を生きる－視覚障害の現場から」と題して講義を行った。最初に視覚に障害がある人が字を読むための点字や、耳の聞こえない人のための手話が、国によって違う、という話をするとうるさくという学生が多かった。写真集に収めた当事者のエッセイを読み上げたところ、熱心に耳を傾けていた様子が、講義後のレポートから伝わってきた。「手話サークルに入っている」「道で白杖を持っている人がいたら声をかけたい」「家族に視覚障害があり、理解を深めてもらえて嬉しかった」など、反応がいちばん大きかった回であったと思う。

第 4 回は「伝える写真の撮り方」として自分の視点を伝えるためには、どのような工夫をすればより伝わる写真が撮れるかについて比較作例を見せながら講義を行った。「記者」として仕事をしていく上では、自分自身で



キャンパスで講義中の榎並悦子氏



写真を撮らなければいけないシーンも多い。文字だけでは伝えきれないことを、写真の力を活用してよりの確に伝えていって欲しい。カメラを持っている学生は半数くらいだったろうか。講義後にどんなレンズを購入すればよいか質問する学生もあり、カメラに対する興味は深いと感じた。

第 5 回は「日本一の長寿郷より」高齢化率が高くてもコミュニティで支え合い、元気に暮らす高齢者たちの様子を紹介した。5 回と 6 回は膝の手術を受けて入院中のため、病院内からのオンライン授業とさせていた。

第 6 回は「108 歳園長と園児たちの日々」。仏教系の幼稚園に通う園児と高齢園長との日々を禅語やフォトムービーを織り交ぜて紹介した。すでに鬼籍に入られた園長だが、当時の語りを記録した動画も紹介した。禅語に興味を持ったという学生が多かった。

第 7 回は、前半はアメリカの小人症の人たち取材した「Little People」について。後半は世界の写真家たちの作品を取り上げた。ピューリッツァー賞の「ハゲワシと少女」(1994、ケビン・カーター)は報道か人命救助かという論争を巻き起

榎並 悦子(えなみ・えつこ)

1960 年京都市生まれ。大阪芸術大学写真学科卒業後、岩宮武二写真事務所を経てフリーランスとなる。

視覚障害者が暮らす老人ホームの日常をとらえた「都わすれ」高齢化率日本一の町取材した「日本一の長寿郷」インドのアパタニ民族取材した「APATANI STYLE」などのテーマと取り組む。著作に『榎並悦子のマルテク式極上フォトレッスン』『明日へ。東日本大震災からの 3 年—2011-2014—』『園長先生は 108 歳!』『光の記憶 見えなくて見えるもの—視覚障害を生きる』などがある。アメリカに暮らす小人症の人々取材した写真集『Little People』で第 37 回講談社出版文化賞写真賞受賞。JPS 会員。

こし、カメラマンが自殺したことでも衝撃を与えた作品。この写真について、関心を寄せた学生が多かった。

講義を振り返って、まず、学生たちの「筆力」に感心した。

講義後の短い時間にレポート（リアクションペーパー）をまとめる力が身につけている。大半の学生が調べたいワードをネットで検索し、レポートに反映していた。また授業で紹介した写真展や前週の講義の感想を話してくれる学生もあり、少しずつ手応えを感じて嬉しくなった。広い教室を見渡し、この中から将来、新聞や雑誌で活躍するであろう学生がいると思うと実に頼もしい。講義が少しでも役に立ってくれることを願うばかりだ。

●野田 雅也

2024年6月4日～7月9日(6回)

専修大学では、ジャーナリズム学科に続き大学院ジャーナリズム学専攻も開設され、基礎から専門性の高い分野までを学ぶ優れた環境がさらに整いました。私の学生時代はジャーナリズムを学ぶ機会が限られていたため、独学で写真技術を習得し、現場で取材経験を積み重ね、実践で学んできました。

「フォトジャーナリズム論」の講義でしたが、私は報道分野でスチル写真とビデオ映像を併用したハイブリッド撮影を行うため、写真と映像のそれぞれの有益性を活かして「伝えること」に重点を置き、全6回の教室での講義と写真展鑑賞を行いました。

1回目の「旅人からフォトジャーナリストへ」では、学生時代にカメラを手世界を放浪し、その後フォトジャーナリズムの道へと進んだ経験談を話しました。国家間の格差や宗教間の対立などに直面し、目撃者として自分に何ができるのか？その問いかけが写真で伝えるフォトジャーナリズムの道につながりました。

2回目の「取材現場のリアル」では、インドネシアのスマトラ島沖地震と津波被害の現場で、独立紛争を続けるゲリラ部隊の潜入取材を題材にしました。ジャングルでの戦闘取材や拘束され解放されるまでなど、現場でのリアルな体験を裏話を交えて話しました。

3回目の「写真から映像の時代へ」では、福島での原発事故取材をテーマに、映像取材の重要性を伝えました。東日本大震災を節目にメディアは紙媒体からデジタル媒体へと急速に移行し、リアルタイムでの情報伝達が求められました。また目に見えない放射能による被害の記録にも、映像取材は不可欠でした。メディア環境が急速に変容するなかで、報道のあり方を問いかけました。

4回目の「オンラインインタビューの実践」では、今も帰還困難区域である福島県浪江町津島の三瓶春江さんとオンラインで繋ぎ、Zoomインタビューを実践しました。オープンチャットを利用し教室内で質問を募り、スクリーン越しの相互コミュニケーションですが、三



キャンパスで講義中の野田雅也氏



野田 雅也(のだ・まさや)

1974年福岡県生まれ、写真家・映画監督。20代のほとんどをバックパッカーとして世界を放浪し、チベットを中心に写真撮影を始める。その後はフォトジャーナリストとして世界各地の紛争や災害現場、地球環境などを取材しフォトストーリーや映像作品を国内外で多数発表。東日本大震災後の福島を長期取材し、ドキュメンタリー映画『遺言』『サマショール』で共同監督、グリーンイメージ国際映画祭大賞など受賞。写真集に『造船記』（集広舎）、『災害列島・日本』（扶桑社）、『3・11 メルトダウン』（凱風社）などがある。日本ビジュアル・ジャーナリスト協会（JVJA）会員、JPS会員。https://masayanoda.com

瓶さんと心を通わせる学生たちの表情がとても印象的でした。

5回目の「未来へ伝える力」では、津波被害で壊滅した岩手県大槌町を舞台に、復興の槌音を響かせ続けた船大工のフォトストーリー「造船記」に焦点を当てました。未曾有の津波被害に向き合うなかで、何を伝え、何を残せるのか？なぜ今、写真集という紙媒体で記録を残したのか？など写真の記録性などを話題にしました。

6回目の「つながる世界へ ピースジャーナリズムの目指すもの」では、終わらない戦争を未然に防ぐピースジャーナリズムの方法論を考察しました。ガルトゥングの平和論やチベット仏教のダライ・ラマ14世から対話の重要性を学び、平和をつくるジャーナリズムの方法を模索しました。

毎回の授業後に提出されるリアクションペーパーには、小さな文字でぎっしりと想いが記されていました。学生たちの鋭い視点と感受性の高さ、そして穏やかな情熱を感じました。新しいメディアが増える中で、講義を通じて次世代のジャーナリストたちに出会えたことが、何より嬉しい体験でした。

(写真提供／専修大学 構成／小池良幸専務理事)

講師派遣歴

2011年度：桑原史成	
2012年度：長倉洋海、英 伸三	2013年度：宮嶋茂樹、樋口健二
2014年度：大石芳野、山本皓一	2015年度：清水哲朗、石川文洋
2016年度：桃井和馬、石川 梵	2017年度：宇井真紀子、広河隆一
2018年度：公文健太郎、竹沢うるま	2019年度：小松健一、前川貴行
2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大のため休講。	
2021年度：渋谷敦志、小澤太一	2022年度：高橋智史、米田堅持
2023年度：小松由佳、竹田武史	(敬称略)

セミナー研究会レポート

◆関西地区委員会技術研究会報告◆

解説！レンズメーカー各社 ミラーレス用新製品セミナー

2024年9月9日(月)

大阪産業創造館 会議室B 参加数：45名

講師：田原栄一（㈱ケンコー・トキナー）

桑山輝明（㈱シグマ）西角久美子（㈱タムロン）

業界の展望などについて情報共有と議論を行う場として設け、各社の専門家が一堂に会した。

シグマ、タムロン、ケンコー・トキナーの順に壇上に上がっていただき各社の歴史、コンセプトやレンズに対する製造技術、

描写など技術的な話は大変興味深く参加者も聞き入り、カメラメーカーの純正レンズとは一味違う焦点距離のレンズやレンズメーカーだからそのこだわりなど普段聞けない話も多く参加者にとって有益になったと思う。（抜粋）



（記・撮影／植村耕司）

◆第1回日本写真保存センターセミナー報告◆

「後世に伝える フィルムデジタイズとフィルム保存」

2024年10月11日(金)

JCII ビル6F 会議室及オンライン 参加数：79名

講師：高村 達、野田知明

日本写真保存センターが行う、デジタルカメラを使ったフィルム画像デジタル化の手順やそのメリット、

中性紙包材を使ったフィルム原板の保存方法を、センターで作業にあたる野田知明会員が解説するセミナーを開催した。最新デジタルカメラが備えるピクセルシフト撮影で得られる高品質データの検証や、デジタル化したフィルム画像の鑑賞用最適化レタッチの実演が主な内容。2024年1月に開催した、デジタル画像を保管する「NAS」



（NetworkAttachedStorage/ ネットワーク接続型記録

装置）機器に関するセミナーで得られたアンケート結果から、フィルム原板をデジタルカメラで複写する具体的方法や、フィルム原板そのものの保管法に関心が高かったことを受け、それらを詳細に伝える実践的なセミナーとした。この回で得られたアンケートでも、保存センターがフィルム原板の保存とデジタル化を課題に持つ写真家・団体を対象に、原板保管の具体的手法やデジタル化などの技能情報や、フィルム原板保存の社会的意義を発信し続けることは、写真文化の継承・発展につながるものと考えられる結果だった。

（記／井上六郎、撮影／竹田武史）

◆関西地区委員会セミナー報告◆

「写真集制作の舞台裏・編集者から写真家へ」 赤々舎・姫野希美氏による講演会

2024年10月26日(土)

大阪産業創造館6階 会議室E 及オンライン

参加数：55名

講師：姫野希美（赤々舎 代表）

姫野氏は、自身の経験を生かし、写真集の制作過程や編集者としての経験を豊富なエピソードを交えて語られた。

一冊の写真集が出版されるまでどのように形づくられるか、李岳凌（リー・ユエリン）氏の写真集『Raw Soul』作成の過程を例に、その奥深い舞台裏を解説いただいた。

最初から持ち込まれた写真から写真集を構成することはほとんど無く、写真家とのコミュニケーションを図



りながら時間をかけて作り上げるようだ。今までで持ち込まれた段階からほぼ手を加えることなく出版に至ったのは、木村伊兵衛賞を受賞した浅田政志氏の『浅田家』くらいだそうである。

また、数多くの新進気鋭の写真家を発掘し、写真集を出版して世に送り出すまでの写真家への寄り添い方、視点や戦略についても触れ、一冊の写真集が出版に至るまでの貴重な話に参加者たちは真剣に耳を傾けた。発掘の際には、作品の技術的な完成度だけでなく、その人自身が持つ独自の視点やメッセージを重視しているとのこと。「写真には、その人が見たことのない風景や体験、感情が詰まっているべきだと考えています」と語り、姫野氏が新しい才能を見出す視点に対する強い信念を感じさせた。（抜粋）

（記／小笠原敏孝、撮影／柴田明蘭）



協会に寄贈された会員の出版物を到着順に掲載いたします。

(2024年7月～12月)

①発行所

②発行年月

③サイズ

(タテ×ヨコ)、頁数

④定価

⑤寄贈者

⑥電子書籍ストア

本紹介／出版広報委員・池口英司



秋田白神 山は恵むよ

秦 達夫

①日本写真企画 ②2024年7月

③18.2×25.7cm、112頁

④2,727円 ⑤秦氏

今も原生林が残る白神山地がテーマ。主要な被写体はブナなどの木々だが、枯れ葉や、雪解け水や、サル姿も登場する。山は大地の造形物であると共に、生命の集合体でもあるのだ。バラエティーに富んだ被写体が、そう教えてくれる。



列車で行こう! 私鉄 特急と全路線図鑑

櫻井 寛

①世界文化社 ②2024年7月

③25.7×18.2cm、384頁

④3,600円 ⑤発行所

いま日本で運行されているJRを除くすべての私鉄について、各社の代表的な風景を紹介し、短い文章とデータを加えてそれぞれの会社のプロフィールを紹介した図鑑。現代の鉄道車両はいかにカラフルなのだろう。



1970年代～2000年代の鉄道 地方私鉄の記録 第3巻 [甲信越編]

写真・諸河 久、解説・寺本光照

①フォト・パブリッシング

②2024年7月 ③25.7×18.2cm、

128頁 ④2,000円 ⑤発行所

各社ごとに豊かな個性があることから、地方私鉄には熱心なファンが多い。本書は甲信越地方で1970年代からの30年間に撮影されたさまざまな風景を収録。今はなき車両が続々と登場する。表紙に登場するのも、今はなき特急車だ。



Harlem, The Community

松井正紀

①松井正紀 ②2024年7月

③21.5×21.5cm、80頁

④—円 ⑤松井氏

ニューヨークに「ハーレム」と呼ばれる一画がありそこにもさまざまな人が集う。本書はその人々の姿を収める。「危険と教えられたが、ホールドアップと言われたことはなかった」と著者は語る。私たちに、まだ知らない世界がある。



「スイスの最も美しい村」 全踏破の旅

吉村和敏

①日経ナショナル ジオグラフィック

②2024年8月 ③21×14.8cm、

256頁 ④3,000円 ⑤吉村氏

スイス国内各地にある山村、散村の風景を紹介する写真集であり、紀行文集。街全体の調和を大切に考える彼国の人々の、優雅で誠実な生きざまが窺える。本書に登場する多くの街は日本では無名だが、そこにも本書の価値がある。



鉄道写真

米屋こうじ

①交通新聞社 ②2024年8月

③21×14.8cm、128頁

④2,000円 ⑤米屋氏

鉄道写真の撮影法から、撮影後の作品発表の方法までビギナーから中級者が、知っていそうで知らないノウハウを集めた指南の書。被写体が高速度で動くだけに、このジャンルにも様々なノウハウがある。作例を見るだけで勉強になる。



＃セルフポートレートの裏側 撮影もモデルも全部わたし。

Rinty (河合璃奈)

①玄光社 ②2024年9月

③25.7×18.3cm、144頁

④2,200円 ⑤発行所

セルフポートレートの撮り方について、機材、ライティング、ロケーションなど、重要なポイントを紹介した144頁の「大作」。やるならここまでやろうという著者の掛け声が聞こえてくるようだ。芸術作品と呼ぶにふさわしい作例が並ぶ。



古都のことは
原田 寛、上野佳子

①扶桑社 ②2024年9月
③21×15cm、96頁
④1,500円 ⑤原田氏

鎌倉、奈良、京都で撮影された季節感溢れる写真に、日本の四季の美を綴った短い言葉がつけ加えられた一冊の抒情詩。雨の一日も、紅葉を散らす風も、本書では一遍の物語となる。日本にはまだ、こんなに懐かしい風景が残っている。



1960年代～2000年代
京浜電車の記録

写真・諸河 久、解説・北澤剛司

①フォト・パブリッシング
②2024年9月 ③25.7×18.2cm、
144頁 ④2,200円 ⑤発行所

自社の車両設計に確固たるポリシーを持つ京浜急行電鉄の、1960年代から40年間の写真を集めたアルバム。高度成長の時代から、安定成長の時代にかけて製作された車両には、登場時ごとに時代性を見取ることができる。



ひとすじの道ー写真と共に歩んだ
井上博道の生涯ー [写真編] [本文編]

編集・井上博道記念館

①井上博道記念館 ②2024年8月
③24.2×18.2cm、[写真編]146頁[本
文編]112頁 ④5,500円 ⑤発行所

山陰に生まれ、2012年に逝去するまで、近畿地方を中心に、寺社、風景、風俗を撮り続けた井上の代表作を集めた書籍。作品を収録した写真編の他に、ご家族による追想などで氏の足跡を辿ることができる本文編が同梱されている。



新版 原発崩壊
樋口健二

①現代思潮新社
②2024年9月 ③26×21cm、
184頁 ④2,800円 ⑤樋口氏

2011年に刊行された写真集の新版。福島第一原発の事故現場を取材し、変わり果てた風景、心に傷を負った人々の姿を記録する。原発への依存度を高めようとする為政者への警鐘として再販された一冊はメッセージ性に満ちている。



ウロボロスのゆくえ
土田ヒロミ

①Akio Nagasawa Publishing + Case
Publishing ②2024年9月 ③30×
20cm、120頁 ④9,000円 ⑤土田氏

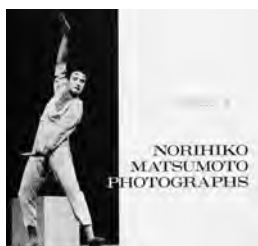
望遠系のレンズで撮影されたのだろう、遠近を圧縮した風景が並ぶ写真集。被写体に選ばれているのは、原色で彩られた工場や、小売店ばかり。ここに現代人の生活の拠点があるのだろう。21世紀を彩るコンボウ写真という趣を備える。



風の子守唄
米美知子

①文一総合出版 ②2024年10月
③26×25cm、96頁
④3,200円 ⑤米氏

北海道から奄美大島までの間で撮影された114点のネイチャーフォトを収録する。本書に登場する木々、水面、氷、小動物などのすべてが明るいトーンで描かれ、見る者の心を癒してくれる。まさに子守唄のような写真集だ。



PORTFOLIO III NORIHIKO
MATSUMOTO PHOTOGRAPHS
松本徳彦

①松本徳彦 ②2024年10月
③23.5×25cm、18頁
④ー円 ⑤松本氏

多彩な仕事をこなし、舞台写真の世界でも第一線で活躍した著者が、1950年代から1980年代にかけて撮影した作品を集めた一冊。最新の印刷技術を駆使し、モノクロオリジナルプリントの豊かなグラデーションが再現されている。



ミツツボアリをもとめて
アボリジニ家族との旅
今森光彦

①偕成社 ②2024年9月
③26×21cm、40頁
④1,600円 ⑤今森氏

オーストラリア内陸部を徒歩で旅し、この地の原住民であるアボリジニの家族と共に、ミツツボアリを探し求めた旅の記録。この4年の間まともな雨が降っていないという土地で、人々は質素に、そして力強く生き続けている。



晴の日、ケの日
ふるさと佐賀
岩永 豊

①佐賀新聞社 ②2024年10月
③25.7 × 26.7cm、144頁
④5,000円 ⑤岩永氏

著者の故郷の佐賀で撮影された写真でまとめられた一冊。ほとんどの作品に、この地に住まう人々の姿が登場する。一連の作品のどれもが時代を語る貴重な証言者となることだろう。小さな畑の中、民家の軒先に魅力的な被写体がある。



世界夜景紀行

丸田あつし、丸々もとお

①光文社 ②2024年10月
③17.2 × 10.6 cm、480頁
④1,800円 ⑤丸田氏

世界114都市の夜景ばかりを集めた写真集。空の色が刻々と変化する夕暮れは魅力的な被写体となるが、その時間帯はごく僅かで、撮影の苦労が偲ばれる。「人間が創ったいちばん美しい風景は夜景」と言った作家がいた。真実だろう。



語りかけてくる風景
水越 武

①JCII フォトサロン ②2024年10月 ③24 × 25cm、31頁
④1,500円 ⑤発行所

北アルプス、知床半島、ロッキーマウンテンなどで撮影された写真を集める。山岳写真の本分でもある雄大な風景が選ばれ、グラデーション豊かなモノクロ写真が並ぶ。2024年10月からJCII フォトサロンで開催された写真展の図録。



水俣物語
MINAMATA STORY 1971 ~ 2024
小柴一良

①弦書房 ②2024年11月
③25.7 × 18.2cm、256頁
④3,000円 ⑤小柴氏

工場排水によって環境が破壊され、公害病という言葉を生み出した水俣の姿を、1971年から2024年まで続けてまとめられた写真集。病に苦しむ人の姿、変わり果てた風景は見る者の心に強く刺さる。「水俣」はまだ終わっていない。



神坐す
世界遺産 宗像大社 沖ノ島 自然と祭り
山村善太郎

①小学館 ②2024年11月
③29.7 × 21cm、112頁
④3,000円 ⑤山村氏

玄界灘に浮かぶ沖ノ島は「『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」として世界遺産に登録された。この写真集は島の自然と、この島の宗像神社の神事を記録する。手つかずの自然、人々の真摯な姿に、命とは何かを考えさせられる。



かごしま楽写歳々
村上光明

①南日本新聞社 ②2024年8月
③21 × 15cm、192頁
④3,000円 ⑤村上氏

南日本新聞の連載記事として、休刊日を除く毎日、1日1枚のスナップに短いコメントをつけた文芸集。風景、動物、人物、食べ物、あらゆるものが登場し、南の国の1年が綴られる。小さなメモ書きあり、偉大な地誌である一冊だ。



小さな国の大自然
井村 淳

①春陽堂書店 ②2024年9月
③21 × 21cm、124頁
④2,000円 ⑤井村氏

北海道、宮城、長野、小笠原などに取材し、手つかずの自然の中に生きる生き物たちの姿を追う。エゾヒグマ、シマリス、ザトウクジラ…。ここではそのすべてが愛らしく、美しい。日本という小さな国には、こんなに豊かな大自然がある。



カトリック雪ノ下教会
太田有美子

①太田有美子写真事務所 ②2024年3月 ③21 × 14.8cm、38頁 ④1,818円 ⑤太田氏

鎌倉市雪ノ下の教会の姿を収める。ステンドグラス越しの光、柔和な表情のマリア像、星空の下の尖塔、祈りを捧げる人…。ここではそれらすべてが、静かに輝いているように見える。澄み切った空気を感知取ろう。



蚕養 60年
ある女性の人生 貫かれた愛と工夫
角田新八

①角田新八 ②2024年10月
③24.8 × 26.2cm、100頁
④10,000円 ⑤角田氏

養蚕業は近代までの日本を代表する産業だった。生糸は日本の主要輸出品として珍重されたのである。けれども養蚕の仕事がいかに過酷で、地道なものか。この写真集は養蚕に携わってきた人々のそんな暮らしぶりを伝える。



KIKORI
木は長い夢を見る
山口規子

①日本写真企画 ②2024年9月
③29.7 × 21cm、120頁
④4,000円 ⑤山口氏

青森県三戸郡の山間部に通い、現代の森の姿、そこに生きる人々の暮らしぶりを記録した一冊。輸入品に押される形で、国内の林業が形を変え続ける中で、人と自然の共生の在り方を問いかける。



日本の野鳥 78種
～水辺の野鳥編～
高城芳治

① TBLP ②2024年8月
③11.5 × 6.5cm、81頁
④1,300円 ⑤高城氏

日本で見られる野鳥78種を、鮮明な写真と簡潔な解説でまとめた写真集であり、図鑑。リングで一冊にまとめた単語帳のような装丁が楽しい。写真を1枚繰るごとに、自らも撮影に出かけたい読者もいることだろう。



空と大地の野鳥
高城芳治

① TBLP ②2024年11月
③19.8 × 28cm、88頁
④3,500円 ⑤高城氏

シラサギ、オオハクチョウ、シマフクロウなどの野鳥がほんの一瞬見せるさまざまな表情を世界の森、水辺に追う。それは時に愛らしく、時に厳しい。「自然の美しさは永遠ではない」と語る著者の切実な思いが、この一冊に結実した。

寄 贈 図 書

細江賢治様……………細江英公・『細江英公』
青木紘二様……………監修・日本オリンピック委員会、
写真・アフロ・パリオリンピック TEAM JAPAN 日本オリンピック
委員会公式写真集 2024
池口英司様……………監修・池口英司・鉄道のクイズ図鑑
三浦誠様……………著者・写真作家集団 写房、
編集・三浦誠・TIME Passages
遠藤励様……………MIAGGOORTOQ
太田菜穂子様……………編集・NPO 東京画・WONDER MtFUJI
瀬戸内道造様……………黒い雨
中藤毅彦様……………DOWN ON THE STREET
松尾忠男様……………自伝的エッセイ集 写真家を生きる
溝口良夫様……………帯と砂 KYOTO/ENOSHIMA
山端祥吾様……………被爆翌日 山端康介
長崎原爆写真 117 枚全撮影位置解析
双葉社……………監修・櫻井寛、作画・はやせ淳・新・駅弁ひとり旅 6

JCII フォトサロン様……………井桜直美・ステレオ写真に浮かび上がる
幕末・明治の日本 Part4 海を渡った日本人
……………清岡惣一・清岡惣一の世界「都会風景」
……………西山英明・都電に乗って 1967-68
……………編集・井桜直美、小須田望、櫻井由理・
ー関東大震災・北伊豆地震を乗り越えてー三嶋大社の軌跡
東京都写真美術館様……………TOP コレクション 見ることの重奏
……………光と動きの 100 かいだてのいえ
……………アレック・ソス・部屋についての部屋
……………現在地のまなざし 日本の新進作家 vol.21
ふげん社様……………高木誠・生きている大地
……………金川晋吾・明るくていい部屋
……………山口総一郎・デッサン
りぼん舎様……………神田一澄・極から極
……………高達志・Amazing Wild Birds 素晴らしい野鳥
東京展美術館様……………第 50 回 美の祭典 東京展 図録
……………東京展美術館 創立 50 周年記念誌
二科会写真部様……………第 72 回展 二科会写真部作品集
日本肖像写真家協会様……………人像 2023
日本写真作家協会様……………第 35 回 一般社団法人日本写真作家協会展

受賞おめでとうございます。今後ますますの活躍をご期待申し上げます。



■「令和6年度自然公園関係功労者環境大臣表彰」受賞 2024年12月18日

受賞者：大塚勝久（1988年入会）

昭和55年より西表石垣国立公園の自然風景や生活・祭祀を写真に収めその魅力の発信及び保存のための普及啓発に努めるとともに、特に平久保半島のサガリバナ群落については、その保全活動や地元調整等、公園区域編入に尽力したことに対して。



■「塚本学院校友会奨励賞」受賞 2024年11月23日

受賞者：唐木孝治（1988年入会）

写真集「人形芝居の里－信州伊那谷－」等、南信州の歴史、文化の保存や観光としての発展に貢献していることに対して。



■「令和6年度地域文化功労者表彰」2024年11月20日

受賞者：下瀬信雄（2010年入会）

永年にわたり、写真家として優れた活動を行い、地域文化の振興に貢献していることに対して。



■「令和6年度高知県文化賞」受賞 2024年11月3日

受賞者：野町和嘉（1974年入会）

高知県では、高知県立美術館等にて展覧会を開催し、故郷である三原村には長年作品を寄贈するなど本県の文化振興にも大きく貢献していることに対して。



■「International Photography & Videography Competition 2nd Half 2024 Individual Portrait (Classic) 部門 銀賞」受賞 2024年11月

受賞者：早坂華乃（2024年入会）

作品「non title」に対して。



■「美幌町自治功労賞」受賞 2024年11月3日

受賞者：前川貴行（2007年入会）

美幌博物館に作品304点を寄贈したことに対して。



■「令和6年度卓越した技能者」の表彰 2024年11月11日

受賞者：宮本博文（2016年入会）

日大藝術写真学科で、写真撮影・ライティング・写真化学・写真機械学等を習得、写真撮影・修復等の技術は高く、ポートレート撮影はもとより、コマーシャルフォトを得意とし、特に地域地場産業と連携したカタログやウェブ掲載用撮影の評価は高い。後進育成では、撮影や画像処理等の技術セミナーを、個人や企業の広告宣伝部を対象に開催し「伝える写真」の重要性を伝承するほか、（協）兵庫県写真師会理事長や近畿写真師連合会会長として、会員への技能検定促進活動や技能講習会にも尽力したことに対して。



■「令和6年度三田市技能金蘭賞」受賞 2024年10月10日

受賞者：森井禎紹（1994年入会）

三田市を拠点に日本各地1,000か所を超える祭りの写真を撮り続け、写真の訴求力や物語性を高める独自の演出手法を確立した。手法を著した「演出写真入門」を発刊するなど、多くの写真家に影響を与えていることに対して。



■「バリ写真賞PX3 [The Prix de la Photographie, Paris] Architecture / Cityscape - Professional 部門 Bronze」受賞 2024年8月16日

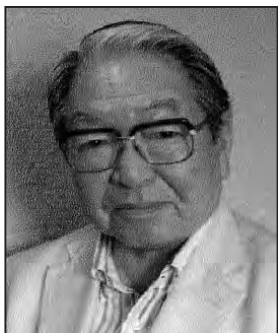
受賞者：吉永陽一（2017年入会）

作品「South wind 15:00, my hometown Shibuya」に対して。

■「IPA [International Photography Awards] 2024 Architecture / Aerial / Drone Professional 部門 3rd」受賞 2024年9月18日

受賞者：吉永陽一（2017年入会）

作品「"Soratsutsu" Airplane and Trains」に対して。



細江 英公 名誉会員

2024(令和6)年9月16日、左副腎腫瘍のため逝去。91歳。

1933年山形県米沢市生まれ。(本名・敏廣) 1954年東京写真短期大学(現・東京工芸大学)写真技術科卒業。1959年写真のセルフ・エージェンシー「VIVO」設立に参加。主な代表作に「おとこと女」「薔薇刑」「抱擁」「ガウディの宇宙」「ルナ・ロッサ」「浮世絵うつし」「死の灰」等がある。写真展、写真集多数。主な受賞に1969年「鎌鼬」芸術選奨文部大臣賞。2003年世界を代表する写真家7人のひとりとして英国王立写真協会創立150周年特別賞。受章に1998年紫綬褒章、2007年旭日小授章、2017年旭日重光章、2010年文化功労者などを受ける。清里フォトアートミュージアム館長、東京工芸大学名誉教授。1959年入会、副会長、監事を長年務められ協会運営に尽力され、2013年名誉会員に推挙されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

細江英公、その彗星の輝き

川田喜久治

長かったコロナ・パンデミックが過ぎ、細江英公の訃報を聞いたのは2024年9月も終わる頃だった。彼の意志を反映した清里フォトアートミュージアムの作品収集を手伝い「それじゃ、また」と、別れて8年以上は経ったのだろうか。あのとき彼は不運な事故に遭っていて、車椅子での審査だったが、新しい人のすぐれた写真のもつ未来のことを嬉しそうに語っていた。

彼と佐藤明、丹野章、奈良原一高、東松照明と私の6人でVIVOという写真家自身のエージェンシーを立ち上げたのは半世紀も昔のこと。2年ほどで解散したが、いま思うに、細江英公はひとりでもその野望を可能にしたような気がする。先見の明、創造性と独断力には目をみはるものがあつたのだ。

男と女の裸体に魔術としかいえない演出で時の思潮を浮かびあがらせる。忘れられた写真のテクニクを使い、長期保存用のプラチナプリントの技法を

学びにニューヨークまで出かけるといった光りの記述への探求者でもあった。

舞踏家、土方巽に東北土着の鎌鼬の神を演出する。「薔薇刑」では三島由紀夫の裸体と女優の肢体を、なにひとつない清貧な部屋で執筆を続ける裸の稲垣足穂を、老いた大野一雄に赤子を抱かせるなど、創作と演出の多面的な解釈といのちの謎を「フォト・グラフィ」にする。シュルレアリスムへの関心も早かったし、フォンテーヌブロー派の描く乳房やロダンの石の肉体から突然に生まれた作品もある。ワークショップは海外の若者にまで及んでいる。

晩年のボンベイからアウシュヴィッツ、トリニティ・サイト、ヒロシマにいたる「死の灰」となった人間の作品集は、いまを生きる私たちに未来への警鐘として提示されたものだ。その細江英公の灰の記憶は、祈りとともに彗星のように輝き、絶えずいまに帰するだろう。



西田 茂雄 正会員

2023年9月30日、急性大動脈解離のため逝去。73歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(1985年入会)



杉山 栄紘 正会員

2023年11月13日、心不全のため逝去。80歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(1976年入会)



藤森 秀郎 正会員

2024年11月2日、誤嚥性肺炎のため逝去。88歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(1962年入会)



岩城 昭輝 正会員

2024年12月28日、解離性大動脈瘤のため逝去。79歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(1993年入会)

経過報告(2024年5月~2024年11月)

- 5月18日~26日 第49回2024JPS展(東京) 東京都写真美術館B1F展示室 入場数3,482名 ○5月18日表彰式、作品講評会、祝賀パーティー、5月23日イベント「JPS会員写真家による作品講評会」5月25日イベント「プリントしてフィルム愛を分かちあおう」
- 5月19日 著作権セミナー AM11:00~16:00 東京都写真美術館1Fホール 午前午後開催のべ参加数172名 ○第3回知っておきたい写真著作権&肖像権セミナー
- 5月20日 写真学習プログラム講師向け説明会 PM2:00~4:00 JCIIビル会議室/オンライン 参加数4名、オンライン参加数13名
- 5月24日 2024(令和6)年度第25回定時会員総会 PM2:00~3:50 東京都写真美術館1Fホール 本人出席83名、代理委任2名、議決権行使書638名、計723名、外部理事4名、外部監事2名、税理士1名、名誉会員5名、賛助会員15社19名 ○決議事項:第1号議案:2023(令和5)年度事業報告書及び決算報告書承認の件、第2号議案:名誉会員推挙承認の件 ○報告事項:1「2024(令和6)年度事業計画書」の件、2「2024(令和6)年度予算書」の件、3.第50回「日本写真家協会賞」の件、4.会費滞納による正会員資格の喪失手続きの件、5.その他
- 6月9日 第6回「おやご写真教室」 AM9:00~12:00、PM1:00~4:00 福島いこいの村なみえ 参加数4組8名、参加数5組10名
- 6月13日 広報インタビュー PM2:00~5:00 JCIIビル会議室 参加数6名
- 6月15日 著作権セミナー PM1:30~4:30 京都市勤業館「みやこめっせ」B1F大会議室 参加数91名 ○第3回知っておきたい写真著作権&肖像権セミナー

写真解説(表紙、表4)

ウロボロスのゆくえ(表紙写真) — 土田ヒロミ

1990年代に日本の重厚長大の大型生産現場と国道16号線の沿道に展開していた商業施設を撮影した。生産と消費を対峙する形で2021年11月～2022年1月にCanon Gallery Sにてコラージュ的インсталレーション展示を行い、2024年にその展示を写真集に編んで出版。掲載写真は生産現場写真と商業店舗風景の写真をコラージュしたもの。

写真集・写真展「ウロボロスのゆくえ」



市川病院(表4写真) — 小柴一良

1949年頃水俣湾の異変。地元民が広範囲で気づき始めた。魚などが海面に浮上、ネコの狂死・ネコ踊り病などが多発、以後水産被害が顕著となる。1956年5月1日水俣奇病(後の水俣病)の発見。原因は査として解らず栄養失調・祟り病・小児マヒ・アル中・脳梅毒などと言われた。水俣病多発地区に在って多くの患者を診、後の胎児性患者を見出していた市川病院は既に廃業し、今は肥薩県境の国道3号線の側に付む。

写真集『水俣物語(MINAMATA STORY 1971-2024)』



- ◎6月18日～23日 第49回2024JPS展(関西) 京都市美術館別館2F 入場数1,317名
○6月23日作品講評会、講演会、6月9日イベント「映えるライティングで撮るセルフポートレート」JPS会員写真家による写真講評会 井戸端写真会」
- ◎6月21日 第1回技術研究会 PM200～400 JCH ビル会議室 参加数44名 ○ひと味違う、こだわりの作品プリント ～フレコジクレとプラチナパラジウムプリントで、美しい作品を長期保存～
- ◎7月4日 広報インタビュー PM400～600 ライカカメラジャパン株式会社 参加数5名
- ◎7月6日 著作権セミナー PM200～400 電気文化会館 イベントホール 参加数70名
○第4回知っておきたい写真著作権と肖像権セミナー
- ◎7月11日～17日 2024年新人会員展(東京) アイデアフォトギャラリー「シリウス」出展者29名、作品数58点、入場数748名 ○私の仕事」
- ◎7月30日 国際交流委員会企画「表現者たち」vol.16 JPSホームページ ○「私の中の宇宙」クリスチャン リヒテンベルグ
- ◎8月1日 JPSビアパーティー PM6:30～8:30 「プッフ&貸切パーティーY's(ワイズ)新宿エステック情報ビル」パーティースペース 参加数98名
- ◎8月5日 ハラスメント勉強会 AM10:30～12:30 JCH ビル会議室 参加数26名
- ◎8月9日 第5回「会長全国行脚」北海道地区 PM2:30～5:00 せんだいメディアテーク7階会議室a 参加数7名
- ◎8月15日 「笹本恒子写真賞」選考会 PM200～500 JCH ビル会議室 8名 ○選考・佐伯剛、野町和嘉、熊切太輔、推薦候補者・20名、第7回「笹本恒子写真賞」・遠藤勲
- ◎8月26日 2024年第19回名取洋之助写真賞作品選考会 PM1:30～4:00 JCH ビル会議室 10名 ○選考・山田健太、清水哲朗、熊切太輔、応募者・21名、21点、名取洋之助写真賞・藤原昇平「東京オアシス」、奨励賞・星野藍「赤き星が落ちた世界 ソビエト連邦崩壊の残響」
- ◎8月28日 第6回「会長全国行脚」北海道地区 PM3:00～5:00 北海道クリスチャンセンター 研修室301・2号室 参加数11名
- ◎9月6日～12日 2024年新人会員展(大阪) 富士フィルムフォトサロン大阪 出展者29名、作品数58点、入場数3,523名 ○私の仕事」
- ◎9月9日 関西地区委員会技術研究会 PM2:00～4:30 大阪産業創造館 会議室B 参加

- 数45名 ○解説! レンズメーカー各社 ミラーレス用新製品セミナー
- ◎10月7日 賛助会員との懇談会 PM5:00～7:30 JCH ビル会議室 賛助会員23社36名、JPS25名
- ◎10月9日 国際インタビュー PM200～400 JPS 会議室 3名
- ◎10月9日 広報インタビュー PM200～500 6名
- ◎10月11日 日本写真保存センターセミナー PM200～400 JCH ビル会議室 / オンライン 参加数49名、オンライン参加数30名 ○「後世に伝えるフィルムデジタルとフィルム保存」
- ◎10月20日 2025JPS 展開選イベント AM10:00～16:30 JCH ビル貸し暗室 / 会議室 参加数7名 ○JPS 展開選体験イベント～プリントしてみんなでフィルム愛を分かちあおう～
- ◎10月21日 日本写真保存センター2024年度第2回諮問委員会議 PM200～3:30 JCH ビル会議室 21名(リモート参加)
- ◎10月21日 日本写真保存センター2024年度第2回支援組織会議 PM4:00～5:00 JCH ビル会議室 支援組織会員8社・1団体11名、JPS9名(リモート参加)
- ◎10月26日 2025JPS 展開選イベント PM1:20～4:30 JCH ビル会議室 参加数35名
○第50回2025JPS 展特別企画 秋の大作講評会
- ◎10月26日 関西地区委員会セミナー PM200～400 大阪産業創造館 6階 会議室E/ オンライン 参加数55名、オンライン参加数11名 ○「写真集制作の舞台裏・編集者から写真家へ」赤々舎・姫野希美氏による講演会
- ◎11月9日 第18回 JPS フォトフォーラム AM10:30～16:30 東京都写真美術館1階ホール 参加数合計188名 ○「記録、伝える、その先に見えるもの——ある大地の物語」講演者・中条望、小山幸佑、齊藤小弥太、バネリスト・中条望、小山幸佑、齊藤小弥太・清水哲朗
- ◎11月18日 関西地区委員会オンラインセミナー PM7:00～9:00 オンライン 参加数57名 ○「写真家のための経営学 知っていますか!? フリーランス新法」セミナー
- ◎11月25日 2025年度関西地区 JPS 入会希望者説明会 PM3:00～5:00 大阪市立生涯学習センター梅田5階第4研修室 参加数13名

編集後記

◎今号の編集期間中は、南半球を巡るクルーズ船の旅に参加していた。船内では衛星回線を通じて Wi-Fi でインターネット接続ができ、国内地方のホテル並みにアクセスが可能であった。レイアウトや入稿の作業、Zoom 会議を地球の裏側に行て行えるとは、以前は考えられないことであった。長期留守を許して頂いた編集委員各位にお礼を申し上げる。(小池)

◎今年も1月1日のヨドバシカメラ新春記念撮影会から始まりました。バタバタしていたらもう2月中旬です。年とともに時間が早く立ちます。早いといえば、AIの発達スピード。Deep Seek なんというものが現れました。半年先はどうなっちゃうんでしょう? フォトグラファーのスピード感では、追いつけません。仕事にも影響あるよな〜トホホです。(伏見)

◎JPSへ入会し20年が経ちました。[JPS 2004年同期有志展]が20年目の年度末にあたる3月21日(金)～

27日(木)に富士フォトギャラリー銀座で開催されることになりました。この代の同期展は今回の開催が初めてです。入会した頃の年会費は現在より1万円安かったと思います。健康面、経済面、この先あと何年会員でいられるでしょうか…(小野)

◎会報掲載のため第19回名取賞受賞者のインタビューを、写真展会場で行った。受賞者お二人の話を興味深く伺ったが、同時に展示された計60点のプリント写真が放つ「オーラ」を楽しむことが出来た。AI時代が急速に到来し「リアルとフェイク」が混在する社会で、改めてストレートフォトの魅力を再確認した。(飯塚)

◎最近の悩みにスチールを優先するか? 動画を優先するか? というものがあります。もちろん両方撮り、動画からの切り出しという手もあるのですが、一筋縄には行きません。昔はカメラの機種に悩み、フィルムかデジタルかの選択に悩んだものです。これも嬉しい悩み、ということにしておきましょう。(池口)

◎正月明けからインフルエンザA。一段落したら、風邪

とスタートから散々な2025年…。巷の流行りものには無縁な生活でしたが、今年は違いたうです。辛い花粉症は今のところセーフ。GWには写真展を予定。気温とともにアゲて参ります!(桃井)

◎3年ほど前、息子が祭りから金魚をぶら下げて帰ってきた。以来、我が家のリビングには浄水器とヒーター付きの水槽が置かれている。餌やり、清掃、水質管理。いつからか私しかやらなくなった。聞くところによると金魚の寿命は10年以上だという。家族旅行は私だけ留守番という生活は当面続きそう。(山縣)

◎2025年は理事と監事の役員改選期にあたります。正会員数が徐々に減少に向かっている現在、協会の運営もまた厳しい状況に向かいつつあります。特に近年の諸物価の一斉上昇には対処方法がなかなか見つかりません。5月の総会後に誕生する新理事会では、思い切った判断も求められるでしょう。(事務局 杉山)

日本写真家協会会報 第183号(年2回発行) 2025年3月10日 印刷・発行 ◎編集・発行人 熊切太輔

URL <https://www.jps.gr.jp/> Email info@jps.gr.jp 本誌掲載記事・写真の無断転載を禁じます

出版広報委員 伏見行介(常務理事)、小池良幸(担当理事)、小野吉彦(委員長)、池口英司(副委員長)、飯塚明夫、桃井一至、山縣 勉

発行所 公益社団法人日本写真家協会(JPS)

〒102-0082 東京都千代田区一番町25番地 JCH ビル303 電話 03(3265)7451(代表) FAX 03(3265)7460

印刷所 株式会社光邦

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3丁目11番18号 飯田橋 MK ビル 電話 03(3265)0611(代表)

ペンタキシアンのためのコミュニケーションスペース

「PENTAX クラブハウス」に行ってみた！

柴田 誠(JPS 会員)

「PENTAX クラブハウス」は 2022 年 7 月に東京・四谷にオープンしたペンタックスユーザーのための新拠点。いつでも気軽に立ち寄れて、そこに行く仲間がいる。特に用事があるわけではないけれど、出かけたついでにふらっと顔を出したくなる、そんなスペースを目指したクラブハウスとはどんなところなのか、行ってみた。

購入・修理・体験・鑑賞・交流までが 一度にできるコミュニケーションスペース

入り口脇にあるショーウィンドウには、ペンタックスの長い歴史を感じさせる懐かしいカメラがズラリと並んでいる。思わず足を止めて見入ってしまう。

入る前からワクワクさせるさせる「PENTAX クラブハウス」は、ユーザーとメーカーとの接点になる「部室」のようなスペースをイメージして作られたコミュニケーションスペース。放課後に用があってもなくても、ちょっと立ち寄って仲間とおしゃべりしたり情報交換したりできる。そんな空間を目指しているという。

最新のレンズやカメラに触れることができるというのは、ショールームなら当然と言えば当然だ。しかし「PENTAX クラブハウス」は一味位違う。開発担当者が不定期に訪れて店頭に立ち、ユーザーの生の声を聞く意見交換の場所となっている。

現行のすべてのKマウントレンズを体験することができるので、購入前の相談をしたり、実際に使ってみて使用感を伝えるといったこともできるようだ。

展示スペース「フォトウォール」では作品展示やギ



入る前からワクワクさせる「PENTAX クラブハウス」の入り口。

ャラリートークイベントなどが開催されている。また昨年は、フィルムコンパクトカメラ「PENTAX 17」や「PENTAX 67」のフィルムカメラ体験会などが開催され、好評を博した。「PENTAX 17」の関連グッズに加え、「PENTAX 17」の発売に合わせてフィルムの販売も開始されている。

イベントも楽しそうだが、撮影の合間にふらっと立ち寄ってほっと一息つく。そんな空間が「PENTAX クラブハウス」の楽しみ方なのかもしれない。



最新のレンズやカメラに触れることができる「レンズバー」。



最新の機材を購入もできる。PENTAX17に関連してフィルムも販売中だ。

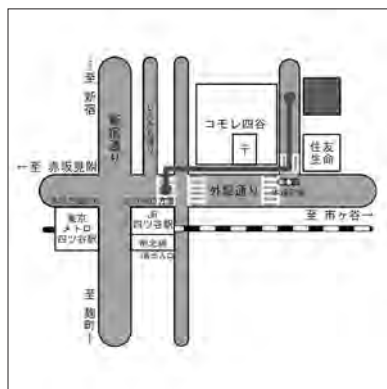


イベントなどを行う展示スペース。作品展示する「フォトウォール」もある。



ファームウェアのアップデートや修理を受け付ける「サービスカウンター」。

「PENTAX クラブハウス」



住所：〒160-0003

東京都新宿区四谷本塩町4-8

パーシモンビル1F

TEL：0570-006371

営業時間：11:00～18:00

休業日：水・日および祝日・弊社指定休業日

Canon

make it possible with canon

5



写真に限界はない。

動画には可能性しか見えない。

映像表現に、双璧の力を。

道なき未知を切り拓く、

EOS R5 Mark II。

「私」が知らない「私」の新境地へ導く。

前人未踏の私へ。

NEW

EOS R5 Mark II



EOSは2023年3月に累計生産台数1億1,000万台^{*1}、交換レンズRF/EFレンズシリーズ^{*2}は2023年5月に累計生産本数1億6,000万本を達成しました。
※1 銀塩（フィルム）とデジタルの双方を合わせた累計生産台数。映像制作用のシネマカメラを含む。※2 EFレンズ、EF-Sレンズ、RFレンズ、RF-Sレンズ、EF-Mレンズ、EFシネマレンズ、エクステンダーを含む。2023年6月29日時点。



© キヤノン EOS R5 Mark II ホームページ

canon.jp/eos-r5mk2

キヤノンマーケティングジャパン株式会社

TAMRON

Focus on the Future

90mm F/2.8 Di III MACRO VXD (Model F072)

ソニー Eマウント用 / ニコン Z マウント用

名作は、
時間を超える。



NEW

90_{mm} F2.8 MACRO

for full-frame mirrorless

(Model F072) ソニー Eマウント用 / ニコン Z マウント用 Di III: ミラーレス一眼カメラ専用レンズ

www.tamron.com/jp/

製品の詳細情報はこちらから▶



第19回「名取洋之助写真賞」受賞作品 写真展

【東京展】2025年1月17日(金)～23日(木) 富士フィルムフォトサロン東京
 【大阪展】2025年2月28日(金)～3月6日(木) 富士フィルムフォトサロン大阪

公益社団法人日本写真家協会主催の、第19回名取洋之助写真賞受賞作品写真展を、富士フィルムフォトサロン(東京/大阪)で開催した。写真展会場で受賞者の二人に話を伺った。

◆名取洋之助写真賞：藤原昇平氏 「東京オアシス」

会場に足を踏み入れると、展示された30枚の写真から発せられる「温もりオーラ」がひしひしと伝わってきた。

6年間にわたり都営住宅「戸山ハイツ」取材してきた藤原昇平氏。その取材のきっかけは大学生時代に見た報道番組。「戸山ハイツが孤独死の頻発する都心の限界集落」として紹介されていたという。「番組を見た後、戸山ハイツに行くと、認知症気味の老夫婦に甥だと間違われ、部屋でお茶をご馳走になったんです。報道では伝えられなかった温かい世界を感じました。しかし当時それを表現する手立てがありませんでした」

新聞記者としての経験を経て退職し、写真学校に入學した藤原氏は、戸山ハイツの取材を始めたが、苦勞の連続だった。「最初はひたすらインターホンを押し続けました。しかし誰もドアを開けてくれません」何度も心が折れそうになりながらも、覚悟を決めて足を運んだという。「手法を変えて、ベンチに座っている人々に声をかけ、撮ったポートレイトをプレゼントしました。すると、冗談半分で『私の遺影写真を撮ってよ』『私のも撮って』と声がかかり、少しずつ受け入れてもらえるようになりました」

写真展を見た団地の住民たちからは、「故郷の明るい様子や、今は亡き友人を撮影してくれてありがとう」と感謝されたと語る。藤原氏は今後も戸山ハイツの取材を続けていく考えだ。

見學に訪れた写真学校の学生たちからの質問に丁寧に答える藤原氏。未來の写真家たちには「社会の見方と現実とはしばしば異なります。戸山ハイツでも孤独死はありますが、住民たちは助け合いながら、楽しく生活しています。自分の眼で確かめるためにも、現場に何度も足



受賞作品を見る来場者
 (2025. 1. 17 富士フィルムフォトサロン東京)

を運んでください」とアドバイスを送った。

「藤原さんにとって写真とは」との問いには、「自分にしか撮れない対象を撮り、それを他者に明確に伝える手段です」と迷いなく答えた。

◆名取洋之助写真賞奨励賞：星野 藍氏

「赤き星が落ちた世界 ソビエト連邦崩壊の残響」

「名取洋之助写真賞」の対象になる作品のテイストと自分の写真は違うかなと思いつつ応募して、見事奨励賞を受賞した星野氏。受賞の感想を聞くと、「喜びは受賞の連絡を受けた電話を切ってからこみ上げてきました。今まで心配をかけてきた母が喜んでくれたのが嬉しかったという。」

「取材期間ですか。約十年の間に二十数回、旧ソビエト連邦を訪ね撮影しました。現地では『何を撮っている、パスポートを見せろ』とよく言われました。警察署に連行され、1時間の尋問の後、なぜか流れでその警官と意に沿わないデートをしたことも」

「従姉の自死を引きずるように」、日本の廃墟や地元福島の前日本大震災の写真を撮っていた星野氏の沈んだ気持ちを変えたのは、チェルノブイリとの出会いだったと語る。

「チェルノブイリを巡り過去と現在を見据えたとき、自分の中で抱えていたものに、落とし所をつけることが出来た」「アップが多かった写真の撮り方も変わり、周辺の風景も入れて広く撮るようになりました」「それ以来、旧ソビエト連邦に残る廃墟や人々の過去の榮華に興味を持ち、会話するような気持ちで撮影を続けています。旧ソビエト連邦の取材は今後も続ける計画です」旧ソビエト連邦崩壊の残響は、まだ生々しく星野氏の中で響いているようだ。

「星野さんにとって写真とは」と問かけると少し考えてから、「自分の人生を変えてくれる旅の相棒。自分がやりたいことや行きたい所に一緒に行ってくれる相棒ですね」と返事が返ってきた。

来場者から「この場所に行ったことがあります」「星野さんの写真を見ていたら私も行きたくなりました」など様々な声をかけられ、写真展が出来て良かったという。「中国やセネガルにも行きたい。まだまだ撮りたいモノは沢山あります」と今後の計画を熱く語ってくれた。



富士フィルムフォトサロンに展示された二人の写真作品からは、「取材対象との時間をかけた真摯な会話」が聞こえてくるようであった。

(記・撮影/出版広報委員：飯塚明夫)



Message Board



◆木下 健 (1985 年入会)

ドイツ・ミュンヘンに、今年 (2024 年) も 2 か月ほど滞在しました。その間、美術館アルテ・ピナコテークには 12 回行きました。私の好きなスペインの画家ムリーロの貧しい子供達を描いた絵画があるからです。それは、私がライフワークとして撮り続けてきた、世界の貧しい子どもたちの写真の原点です。実は、ミュンヘンの公営の美術館、博物館などは、JPS の海外用プレスカードの提示で、0 ユーロです。ミュンヘンから列車で 6 時間ほどでパリに行けます。パリのルーブル美術館、オルセー美術館も、プレスカード提示で、障害者の人たちなどと同じで、無料、しかも優先入場が出来ます。いつも大混雑の『モナリザ』は、並んで順番に列をなして鑑賞ですが、係員の女性が、私のプレスカードを見て、1 番前に案内してくれました。『プレス』に対しての意識の違いでしょうか？

(東京都八王子市在住)

◆村上光明 (2001 年入会)

令和 5 年は 1 年間 365 日の新聞連載から始まった。30 万部発行の地元新聞で「かごしま楽写歳々」の連載だ。1 年間フィルムと対峙した。読者に感動を届けられるか 1 月 1 日の作品を送りだす、休刊日を除く 352 作品を掲載する仕事だ。写真で綴る歳時記となるよう、県内の風土と季節を取り上げる。ニュースとも運動に心がけた。また南北 600 キロの鹿児島県、奄美群島の営みなど多様な黒潮文化と、世界自然遺産の原生林も紹介するよう努めた。奄美観光大使の次なる目標として、奄美民俗文化の世界文化遺産登録を視野に、活動をしていきたい。

連載を写真集としてまとめた写真群は、全て過去の鹿児島だ。読者に温故知新を感じ未来を見て頂ければ写真家冥利に尽きる。

(鹿児島県鹿児島市在住)

◆諸河 久 (1982 年入会)

「赤い電車に白い帯」のキャッチで

著名な「京浜急行」。京浜工業地帯の工場群の軒先をかすめるように京浜間を飛ばした走りっぷりには電車ファンならずとも一度は乗ってみたい路線の一つだ。



JPS に入会した 1980 年代、出版社の依頼で京浜電車の撮影に何回か携わった。当時は旧世代の 600 系が引退の時期を迎え、新たな看板電車である 2000 系が登場した時期であった。検車区での撮影は 4 × 5 判のリンホフスーパーテヒニカによる精密描写に拘った。撮影現場では電車を最良の位置に移動してもらったのかどうかで、作品の可否が決まってしまう、構内運転を担当する運転士さんによるところが大きなだ。ラッキーだったのは、担当された運転士さんが大学の友人の同級生で、その方の裁量で思うような形式写真を残すことができたのだ。

撮影から 38 年、今秋 (2024 年) に上梓した本書をあのときにお世話になった元運転士さんに献呈できたことが、何よりも嬉しかった。

(東京都中央区在住)

◆山口規子 (2001 年入会)

手入れをされていない杉の山々を見るたび、日本の林業に疑問を持ち続けていた私は 2018 年、青森県新郷村に住む石ヶ守勲 (いしがもりいさお) さんに会った。当時 95 歳。自らの山を持ち、毎日山へ入り、木々の手入れをしている林業家。山を愛し、山を大切にしている、本物のキコリだった。

そんな彼を撮り続けて 6 年目、2024 年 9 月に東京、10 月に大阪、11 月に青森と 3 か所で、写真展「KIKORI 木は長い夢を見る」を開催。多くの人が訪れ、写真集もほぼ完売になった。感謝である。写真家はいろいろな社会問題に興味を持ち、それを記録し世間に伝える。それは目立たない小さな行動かもしれない。しかし、写真を見た人が何かを感じ、考え、ひょんなことから解決の糸口が見つかったなら、それは写真家冥利に尽きると思う。

(千葉県船橋市在住)



◆吉村和敏 (2014 年入会)

2015 年に発足した「スイスの最も美しい村」には、現在、49 村が登録されています。2024 年春、スイスは「世界で最も美しい村」連合の承認を受け、フランス、ベルギー、イタリア、日本、スペインに次ぐ 6 番目の加盟国になりました。「ヨーロッパの最も美しい村」の撮影をライフワークとしている私は、コロナ禍の 2022 年から 2023 年にかけて「スイスの最も美しい村」の全村を旅し、約半年に及ぶ旅行記の執筆を経て、この度 1 冊の本にまとめることができました。アルプスの麓にひっそりと息づく小さな村の姿、村人たちによって大切に受け継がれてきた歴史、チーズやワインを中心とした食文化など、まだまだ多くの日本人が知らないスイスの魅力を存分に紹介しています。

(東京都江東区在住)



◆米屋こうじ (2005 年入会)

鉄道の基礎知識をテーマとしたシリーズで、その第 2 弾として『鉄道写真』について執筆しました。鉄道写真といえば車両を被写体とするものと思われがちですが、鉄道のある風景や季節、旅情やイメージ写真についてなど幅広く紹介しています。カメラ機材や撮り方の基本的な解説に加え、鉄道、写真、メディアの歴史なども触れました。特に写真に関しては、カメラ・オプスキュラからスタートし、フィルムの種類やサイズを紹介、現在のデジタルカメラへ続く流れを解説しています。付録の NFT 特典は「夜行列車の時間」を収録しています。ちょっと懐かしい夜行列車のイメージ写真をお楽しみいただける内容になっています。よろしくお願いたします。(埼玉県蕨市在住)



◆丸田あつし (2008 年入会)

夜の世界に魅せられ、夜景フォトグラファーとして活動始めてから約 30 年。判型は小さいものの、480 ページというボリュームのある写真集『世界夜景紀行』のお話をいただいた時、作品集としてだけでなく、自身の活

動の軌跡を撮り
まとめたアーカイブ的な役割の書籍にしようと考えました。600点を超える全ての写真を頼りに、記憶を順に写っている被写体や、実際に三脚を立てたポイントを調べ、3行程度の短い文章にまとめるのは想像以上に大変。

ただ同時に数々の思い出に浸りながらの作業は、楽しいひと時でもありました。今後どれだけ世界を巡るチャンスがあるかはわかりませんが、次の30年！を目標に、これまで以上に意欲的に撮影活動が続けていきたいと思っています。

(東京都中央区在住)

◆櫻井 寛 (1992 年入会)

今年は英国に世界初の蒸気機関車による鉄道が開業して200年の節目の年です。それを記念して、写真文化首都 北海道「写真の町」東川町の文化ギャラリーにて「鉄道開業200周年記念・櫻井寛写真展・列車で行こう! The Railway World」を1月13日まで開催させていただきました。東川町文化ギャラリーの会場は、タテ2m×ヨコ3mの写真パネルが悠々展示できる広さを誇り、さすが、写真文化首都、写真の町のギャラリーであることを実感しました。さて、私の写真家人生を振り返ってみますと、初の個展は1975年に銀座ニコンサロンで開催した「惜別〜北国の蒸気機関車〜」です。被写体は厳冬の北海道の大地を力走する蒸気機関車たちですが、奇しくも50年後の今年、北海道で鉄道写真展を開催できることにいいようなない感動を覚えました。今年の被写体はもちろん英国鉄道です。

(東京都稲城市在住)

◆山村善太郎 (1970 年入会)

『神坐す』小学館

2017年7月、宗像大社は世界遺産として登録され、「神宿る島」宗像。沖ノ島と関連遺産群として多くのメディアに紹介された。沖ノ島には登録と同時に、生態系の維持などの観点から一般人は上陸できなくなりました。私は幸いにして世界遺産になる日、



町から宗像大社の厚息により沖ノ島での撮影を許可され、数年間にわたり写真を取り続けてきた。フォトグラファーは、頭の中でおおよその写り具合がわかるものだが、沖ノ島の写真には今までに経験したことのない不思議なものが数多くある。それは私の期待を超えており、これは自分の写真ではなく、借越ながら、誰かに背中を押されて撮らせて戴けたのではないかと感じている。

(兵庫県神戸市在住)

◆秦 達夫 (2003 年入会)

昨年秋に百貨店での写真展のチャンスを頂きました。そこで大きなヒントを頂いたので、お裾分けです。百貨店は商品力にプラスαの価値を付加し販売する場所。量販店は商品価値よりも低い価格を提供する場所。同じ商品でも来店するユーザーの求めるニーズが異なり思考が違うんです。会場で僕に投げかけられる質問も経験談に基づくものが多く、自分の経験値を上げるためにはどうしたら良いのか?と話が流れて行くのです。百貨店は付加価値こそが生き残るポイントと店長さんも話していました。デジタルやAIのイノベーションによって誰でも高品質なデータを作る時代ですが、写真の付加価値を大切にすることが僕らの活路ではないかと思いました。

(東京都世田谷区在住)



◆太田有美子 (2017 年入会)

5年前前から神奈川県鎌倉市にありますがカトリック雪ノ下教会の広報の方から依頼を受け、教会写真を撮り溜めておりました。今回鎌倉の地を訪れた外国人の方が記念となるものを、ということで英語表記もある写真集『カトリック雪ノ下教会』を制作しました。レイアウトも全てオリジナルでPDF入稿する形で予算に見合うA5版P36ページの冊子化を実現しました。隣接している売店にて販売しています。見本誌もありますのでお近くにおいでの際はぜひ冊子を手に取っていただき、また売店横の聖堂にも扉を開けお立ちください。



(神奈川県逗子市在住)

◆池口英司 (2017 年入会)

このほどGAKKENから『鉄道クイズ図鑑』の改訂版を上梓致しました。

いわゆる子ども向けのクイズの本です。簡単なようで、子どもの突っ込みは厳しく、子どもが得た知識というのは大人になってもずっと頭の中に残るものですから、その簡単なことを絶対に間違えてはいけないというのが児童書です。私がお世話になった編集プロダクションでも、絵本に教会のイラストを挿入する時に、そこに登場するのが、神父なのか牧師なのかを一生懸命検証しているといった具合で、それまで出版社で速報にばかり気を取られていた私にとって、大きな勉強の機会になりました。守るべき姿勢は今でも変わらないはず。1冊ごとに勉強のやり直しです。

(横浜市内神奈川区在住)



◆原田 寛 (1996 年入会)

鎌倉を中心に奈良、京都など古都の風景を約五十年に渡って撮影してきましたが、今回扶桑社から初の妻との共著、『古都のことは』を上梓しました。長年撮りためてきた奈良や京都、鎌倉を中心にした写真に、妻がエッセイのような短文を添えた写真集です。古都の四季を追いかける中で、作者が風景のどこに注目し、また何を感じていたかを、脇で助手をしていた妻が勝手に想像しながら文章にしたものです。さすが女房と思うほどの確なものもありますが、まるで検討はずれもあって、それはそれで面白い企画だったなと自己評価しています。写真集や写文集はいままでいろいろ上梓してきましたが、今回のようなスタイルは初のチャレンジです。撮影者本人としては自分の作品を説明しないという主義なので、一生に一度くらいはこんな写真集があっても良いかと思っています。

(神奈川県鎌倉市在住)



会報「メッセージボード」原稿募集

出版広報委員会では、随時、メッセージボードの投稿を募集しております。近況報告、写真展開催・写真集出版の案内ほか、同好会の呼びかけなどでも構いません。300字程度で写真も掲載いたします。何回登場いただいても構いません。メール投稿はinfo@jps.gr.jpでお待ちしております。

【カビの発生を防ぐ】【大切な機材の保管に】

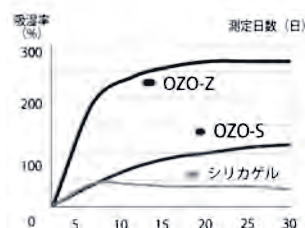
king

強力乾燥剤 OZO シリーズ

- シリカゲルとは「違う」次世代の乾燥剤 -



吸湿率
シリカゲルの
2~7倍



多湿条件での撮影直後の機材の乾燥に威力を発揮

製品仕様

Z (超即効タイプ)

成分：塩化マグネシウム、酸化マグネシウム

本体袋材質：ポリエステル不織布

持続期間 (目安)：4 ~ 8 カ月

S (即効タイプ)

成分：塩化マグネシウム、酸化マグネシウム

本体袋材質：耐水紙

持続期間 (目安)：6 ~ 10 カ月

製品ラインアップ

JAN コード	型番 (容量)
4906238819093	OZO-S15 (15g × 4 袋入)
4906238819086	OZO-Z10 (10g × 4 袋入)
4906238828842	OZO-Z5 6P (5g × 6 袋入)
4906238823151	OZO-S30 (30g × 6 袋入)
4906238823144	OZO-Z10 (10g × 12 袋入)

OZOだけの三大特長

・強力、スピーディーな効果

容器内の湿度を急速に下げることができます。

Zタイプでは3時間以内に吸湿が完了します！

・気候に左右されない吸湿力

化学反応によって吸湿を行うので、常に一定の吸湿力を発揮。一度吸湿した水分を放出しにくい、結露防止に効果的。

・海水ミネラルが主成分

水に濡れても殆ど発熱しないので、安心して使うことができます。天然素材のため、利用後は「可燃ごみ」として捨てられます。

公式ホームページ
(アサヌマネットショップ)



株式会社 浅沼商会
イメージング事業部

〒103-0024 東京都中央区日本橋小舟町 7-2 ヤクシビル 2F
お問合せ：info@asanuma1871.jp



株式会社 浅沼商会

YOU ARE A COPYRIGHT OWNER

写真作品が オーファンワークスにならないために 氏名表示はとても重要です

撮影者を「親」、作品を「子」に例えて
撮影者（権利者）が不明になった作品（著作物）を
オーファンワークス（孤児著作物）と呼びます。

このような作品は
たとえその作品を利用したい人が現れても
利用の許諾を得ることが難しく
埋もれていく可能性があります。

あなたの作品をそのような状況に置かないためにも
作品公表の際には、必ず氏名表示をしましょう。
写真著作権を大切に。



一般社団法人 <https://jpca.gr.jp>

日本写真著作権協会

Japan Photographic Copyright Association
〒102-0082 東京都千代田区一番町 25 JCII ビル 403

【会員団体】

- 公益社団法人日本写真家協会
- 公益社団法人日本広告写真家協会
- 一般社団法人日本写真文化協会
- 日本肖像写真家協会
- 一般社団法人日本写真作家協会
- 全日本写真連盟
- 一般社団法人日本スポーツプレス協会
- 一般社団法人日本自然科学写真協会
- 日本風景写真協会
- 公益社団法人日本写真協会
- 一般社団法人日本スポーツ写真協会



TOWN ————— 林 義勝

新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言を発出以後、賑わっていた街は忽然と人々の往来が消えて様変わりした。そんな街の光景を撮ってみようと思い立った。撮り始めると今迄見過ごしていた新たな発見をすることができた。時が過ぎ今は何事もなかったかのようにインバウンド客で活気を取り戻している。街をテーマに新たな発見と出会いを楽しんでいる。

FUJIFILM X-T3 XF16-80mm F4





月光 ————— 塩田諭司

北アルプス白馬岳山頂から杓子岳、鑓ヶ岳と剉岳方面を撮影した写真です。撮影時刻は真夏の深夜で、到着の山頂は辺り一面ガスで真っ白でした。しかし、上空には星空が見え隠れし、風があったためガスが抜けると予想し、山頂でツェルト（簡易テント）を被り暫く待機していました。徐々に山容が見え始め、ガスが抜けた瞬間に月光に照らされた滝雲が現れました。滝雲は長くは続かず、その一瞬を捉えた作品です。

FUJIFILM GFX50R GF32-64mm F4 R LM WR





孤高 ————— Rinaty (河合璃奈)

この作品は、写真家に転身した年に撮影したセルフポートレート作品である。現代ではスマートフォンが普及しており、誰でも簡単に写真を撮影することができる。そして写真を仕事にしている人口も増加し続けている。最近ではAIも発達している。そんな世界で、写真一本で生き残っていくことは非常に難しい。生き残るために、流行りに合わせ、自分が撮りたいものではないものを撮り、他人に媚びる者も多い。それでも私は、周りに流されず、自分らしく堂々と生きていきたい。厳しい世界の中でも自分の色を忘れず、孤高の存在として生きていきたい。そんな気持ちをこれから先も忘れないよう、自分のお守りとして撮影した。

FUJIFILM GFX100 GF23mm F4 R LM WR



MORE THAN FULL FRAME

GFX 100sII

新開発の1億2百万画素ラージフォーマットセンサーが描き出す、
驚異の解像力と諧調表現がその物語の空気感まで伝える

- ・ 新開発1億2百万画素高速センサー「GFX 102MP CMOS II」と高速画像処理エンジン「X-Processor 5」搭載
- ・ AIによる被写体検出AF採用、連写性能も7.0コマ/秒の高速化
- ・ 5軸・8.0段^{※1}のボディ内手ブレ補正機能を搭載しながら質量は883g^{※2}と軽量化を実現
- ・ 「フィルムシミュレーション」に「REALA ACE」含む20種搭載

※1 CIPA規格準拠 ピッチ/ヨー方向、「フジノンレンズ GF63mmF2.8 R WR」装着時。

※2 付属バッテリー、メモリーカード含む。





Photo Koshiba Kazuyoshi